
SHIFT

I・B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H I F T

【Nコード】

N 4 0 3 2 M

【作者名】

I・B

【あらすじ】

薄暗い路地裏に横たわる、美しい少女。その少女を拾ったのは、悪人面で、粗雑な男だった。二十八歳、もうすぐ三十路のおっさんと、七歳の、謎を抱えた銀髪の幼女が織りなす一週間の物語。非日常的ハートフルストーリーです。／／全八話、本編完結しました。非日短い間でしたが、ご愛読、ありがとうございました！／／現在、番外編を不定期更新中です。

1st day 路地裏の天使／喫茶店の魔王

1999年、七月七日。

世は、騒然としていた。

有名なノストラダムスの預言、恐怖の大魔王。

その言葉に踊らされて、多くの学者が意図を汲もつと研究を重ねた。様々な憶測が飛び交う中、そのどれも大きな予兆があるものだとし、直前まで騒がれたそれもいざ迎えてみると、なんとということはない。平凡な一日が過ぎていった。

七日目ともなると、人々は新しいゴシップにと目を向けて、この預言を過去のものとしてドラマや映画にするといった話まで、持ち上がり始めた。

今日、この日まで。

この日、空が“光った”のだ。

全世界の空が突然発光し、全ての人間に黄金の雪を降らせた。

家の中にいようと、シャルターに逃げ込もうと、意味を成さない。全ての物質を乗り越えて、人々にその雪が降りかかる。

預言は本当だった。

そう人々は騒然した。

だが、人々の生活に、変化は起こらなかった。

そう、表面上は、なにも。

S H I F T

2021年、十二月十五日。

しとしとと降る雨。

十二月中旬ともなると、肌寒さで外へ出る気がなくなる。

古ぼけた看板に綴られた文字は、かすれて読み取ることが出来ない。ただその木製のドアと店内を見回すことの出来る窓が、その店を喫茶店であると示していた。

掃除の行き届いた店内は、古ぼけた入り口からでは考えられない程清潔だ。

昼時なのに客がいないところを見ると、掃除しかやることがなかったのだろうという答えに、簡単に辿り着いた。

顔が映る程磨かれた、木製のカウンター。

その奥で、一人の男が寛いでいた。

鴉の濡れ羽色　滑らかな漆黒をオールバックになでつけている。

目は同じく黒。だが、つり上がった目は研ぎ澄まされた黒曜石を思わせるほど、鋭利だ。

整った顔立ちは、男の印象を尖らせる。氷のような、刃物のようなといった形容詞がよく似合う風貌だ。

ウェイター服がよく似合っては、いる。

だが、カシミアのロングコートの方がよく似合うだろう。

彼は、表の職業に就いていて良い、優しげな雰囲気は、纏っていない。

喫茶店の棚に入れた、タバコの箱を取り出す。

一応ここは飲食店だが、鋭い目で周囲を睨み付ける彼の前に訪れることが出来る人間は、そうにいない。すなわち客が来ないということとで、彼は彼のみスペースで好きにやっている。それだけなのだ。

「あ?.....ちっ、しけってやがる」

男は、ぐしゃりとタバコを握りつぶす。

もう無かったかと棚を探すが、見あたらない。

「めんどくせえ」

嫌そうに息を吐きながら、ウェイター服のポケットをあさる。奥の方までごつごつとした指を伸ばして、丸めたレシートと一緒に硬貨を取り出した。

一に丸が二つ刻まれた、銀の硬貨が二枚きり。これでは、タバコどころか酒も買えない。せいぜい、アルコールの入った薄い水もどきの酒を買う程度が、関の山だ。

「はあ……つたく」

仕方なく、レジを開ける。

躊躇無く店の金を使おうとしている辺り、粗雑な性格が見て取れる。

「こつちもか」

だが、レジの中も、空だった。

最後に客が来たのはいつだったかと、頭を捻らせる。考えても一向に答えは出ず、男は額を抑えて呻り始めた。

「一ヶ月、いや、二ヶ月前……か？」

どうやら、月単位で客が訪れていないようだ。

男は自分の髪を強ばった右腕でがしがしとかき回すと、大股歩きでカウンターを出る。

壁に掛けてあった灰色のロングコートを左手で掴むと、それを乱暴に羽織った。

店の傘立てに置いてある、金属部分が錆びた黒い傘。

客の忘れ物だったそれを、男は躊躇わず使っていた。客も、忘れていたことに気がついていたとしても、わざわざ顔の怖い男の下へ取りに戻ったりはしない。

男は自分でそう判断して、勝手に使っていたのだ。

「気分転換つと」

軽い口調だが、低く重い鋭利な声で放たれるその言葉は、とても平穏な内容に思えない。

普通の感性を持つ人間が側にいたら、“なに”で気分転換をするのか怯えて通報するだろう。

喫茶店を出て、準備中の札を手取る。

男はそこで初めて、札が“始めから”準備中だったことに気がついた。

「ちっ……誰の仕業だ」

そう言つて虚空を睨む。

その仕草は標的を定めた殺し屋のようだった。

ちなみに犯人は当然、前回の準備中から戻すのを忘れていた、この男である。

苛立たしげに踵を返すと、傘を差す。

水滴が傘に当たる度に弾け、ぼつりぼつりと音が鳴る。

弾かれた水滴の何割かは、すうっと流れて傘の外へこぼれ落ちた。

頬に当たる風は、冷たい。

だが、そんなことは男にとってどうでもいいことだ。

ぎりぎり東京というこの町は、閑散としていて寂しげだ。

人影一つ見あたらぬことに、客が来ない理由は町長の町興しが出ていないのだからだろうと、顔の怖さと粗雑な性格を棚に上げて、顔も覚えていない町長を恨む。

パシヤ

水たまりに足を置いてしまったせいで、水が跳ねて黒いズボンの裾を汚す。

苛立たしげに足を二三度降ると、傘の持っていない右手で再び頭を搔いた。

「今日は厄日か」

八割が自分の普段の素行が原因なのだが、男はそんなことは欠片も考えていなかった。

自分が悪いと落ち込む根暗は、男が一番嫌いなタイプだった。もっとも、男の場合は気にしなさ過ぎなのだが。

水たまりを避けて歩いたりはしない。

水たまりの為に余計な労力は使いたくないという、二十八の男が考えるのには子供じみた意地だった。彼は時折、こんな一面を見せるのだ。時折では、ないかもしれないが。

……

歩いていると、聞こえてきた声に足を止める。

動物の鳴き声には聞こえなかった。どちらかというところ、か細い声だ。暗い路地裏の、その奥。こんな場所にいるのは、世間知らずの阿呆か後ろ暗い事情を持つ人間、それでなかったら浮浪者だ。

「……なにか、持っているかもな」

世間知らずの阿呆なら謝礼、後ろ暗い人間なら口止め料、浮浪者なら情報網。

どれも自分に益のあることばかりだと、男は凶悪な笑みを浮かべた。悪人面である。

だが、男は忘れていたのだ。

自分で先ほど……“今日は厄日”と呟いたことを。

やや興奮した足取りで、路地裏を歩く。

鼻をつく生ゴミのような臭いと、湿気った雨の匂い。

普段なら眉をしかめて苛立たしげに舌打ちをする、淀んだ空間。

そんな濁った空気も、欲に目が眩んだ男にとっては、些事だった。

……けて

助けを呼ぶ声。

この時点で、男の脳内では謝礼が計算されていた。銭の鳴る音が、脳内で響く。

まずは酒だ、次にタバコだ、と、捕らぬ狸の皮算用で既に散財することが決まっていた。

貯金をしていく、という考えは、男にはなかった。

路地裏の、曲がり角。

右手で壁の角を掴みながら、横に曲がる。

暗い路地裏の、小さな街灯の、その下。

男はその光景に、目を瞪る。

月の光を呑み込んだ様な白銀の髪。

雪よりも儂く絹よりも繊細な白い肌。
薄汚い路地裏においてもなお映える、整った容姿。

天使のような美少女が、そこに眠っていた。

息は荒く、幼いと言うことを差し引いても扇情的だ。
眠っているのは、助けを呼ぶのに疲れたからだろう。

男はその少女をじっとみて……大きく大きく息を吐いた。

どう見ても十にも満たないの少女に、邪な気持ちを抱く程、男は“ダメ”ではない。

そして、こんな場所にこんな少女を放置しておくほど“駄目”でもなかった。

「本当に、厄日だ」

白く染まったと息と共に、疲れを乗せた声が、暗い雨雲の中へ溶けていった。

かち、かち、と音を立てて、時計の針が回る。

瞼の裏に感じるぼんやりとした熱に、少女はそれが光だと思い至り、その暖かさに柔らかい涙を流した。

右手を持ち上げて、目元に這わせる。

こぼれ落ちた熱を持つ水滴を無造作にぬぐい取って初めて、自分が暖かい布にくるまれていることに気がついた。

瞼を開いて、上半身を起こす。

それだけで疲れた身体は軋み、全身の関節が、弱々しい悲鳴を上げた。

ゆっくりと見下ろして、自分の姿を見る。

意識がなくなるまで着ていた、白いワンピース姿。

所々に付着した汚れに、少女は首をかしげて、さらに何故意識を失っていたか思い出せないことに、気がついた。

次に少女は、周囲を見回す。

首をぐるりと回して、空色の目を上下左右にくりくりと動かした。

木造の質素な部屋。

桐の箆笥に埋め込み式のクローゼット。

和洋折衷なアンバランスさが、家主の無頓着さを表していた。

木目がすこしだけ怖い天井には、丸いカバーのかけられた電球が、オレンジに近い白い光で部屋を照らしていた。安い電球なら、こんなものだろう。

床は明るい木の色をしたフローリング。

埃一つ落ちていないところを見ると、よほどの綺麗好きかよほどの暇人か。

前者ではないとは、言い切れないが、この場合は後者である。

茶色の毛布は、よく見ると三枚もかかっていた。

厚手の布団がなかったので寄せ集めてきたのか、極端に色落ちした毛布が混ざっていた。

対して寝台は、少し広めのセミダブル。

シーツは白で、小まめな洗濯のためか汚れはない。

動く度に緩やかに弾むスプリングが、少女の胸を少しだけ躍らせた。

見回すのにも飽きて、ベッドから降りる。

毛布から足を出して、ベッドの横から足を降ろすと、ぺたんと音を立ててフローリングに着地した。

それだけで視界がほのかに白くなり、立ち眩みが起こる。

そのままふらりとベッドに腰掛けてしまい、少女は不満げに朱い唇を尖らせた。

意を決して、もう一度挑戦する。

やってやれないことはない。何事も挑戦が、子供を大きくしていくのだ。

今度はゆっくり、右足から二回続けて、足の裏でフローリングを叩く柔らかい音が鳴る。

フローリングの冷たさを、ぴったり貼り付けた足の裏から感じて、少女はぶるりと肩を震わせた。

そのことがなんだか悔しくて、もう一度唇を尖らせる。今度はおまけに、頬も膨らませて見せた。

フローリングの冷たさを足の裏で感じながら、一歩二歩と木造のドアまで歩く。

銀色のドアノブに映った自分の顔が、変に歪んでいる。そのことに少女は興味を持つ。

横に動いてみたり、伸び上がってみたり。

ぐにぐにと動く顔に面白くなり、握り拳を口元に当てて、白い歯を見せながらこころごとく笑った。

でも、その内に自分の顔が本当に歪んでしまったのかと心配になり、慌てて顔を触ってみる。

触っていると、ぷにぷにとした頬を触ることが楽しくなって、すぐに心配事など忘れてしまった。

そして、はっと思いついてドアノブに手をかける。

額よりも少し高い位置にあるドアノブを回すと、少女はゆっくりと押し開いた。

ペンキで白に塗装された壁は、長いこと塗り直していないのか、所々がひび割れている。

すべすべとした手触りの壁に手をかけながら、開いたドアと壁の間から身を乗り出す。

きよろきよろと周囲を見回す気分は、秘密の冒険家だ。

フローリングを歩く音が響かないように、抜き足差し足。

それでも小さく、ぺた、ぺた、と音がしてしまうのは、ご愛敬だ。

やがて階段に辿り着く。

壁に手をつけておそるおそる降りる。

一段一段が高いことに、少女はアトラクションを前にした恐怖心と興奮を、知らず知らずのうちに胸に抱いていた。

最後の段を下りきって、少女は両手を振り上げる。達成感は大きくとも、進んだ道は短い。

短いということは、まだまだこの冒険を堪能できるということだ。

意気揚々と、左へ曲がる。

右方向と迷ったが、お茶碗を持つ方を選んでみたのだ。

まだ冒険は、序章を終えたばかり。これからが、本番だ。

息を大きく吸って、左手でガッツポーズ。さあいざ行かんと右腕を振り上げた。

「で？どこへ行くつもりだ？」

後ろから聞こえた声に、少女はびくりと肩を震わせた。

低く重い、苛立った声。少女は振り返らなかつたときの恐怖心と、真逆に位置する怖いもの見たさの感情を、総動員しておそろおそろ振り向いた。

だが、振り向いた先には、黒い棒が二つ立っているだけだった。

少しの間首をかしげて、視線を落とす。その棒から地面に平べったくくつついた靴下が生えていることに気がついて、少女は左手の平に、右手の握り拳を落とした。

閃いた、と言わんばかりに、満面の笑みで顔を上げる。

気分は名探偵。犯人はおまえだ、と声を上げそうだ。

そして、見上げた先の顔を見て、少女は表情を変えた。

黒い髪と、黒い鋭い目。苛立たしげに歪められた顔は、まるで少女がもつと小さい頃に絵本で見た、勇者と戦う暗黒の邪龍のようだった。

その鋭い目に見下ろされて、少女は……目を輝かせた。

「かつこいい」

「はあ？」

自分の容姿なんて、自分が一番よくわかっている。

だから男は、目を輝かせて自分の顔を覗き込む少女に、顔を引きつらせた。

そして、少女の正気を疑って初めて自分の顔のことだと確認して、落ち込んだ。

かつこいいと呼ばれて素直に喜べないし、そもそも子供に言われても嬉しくはない。

「おじさん、だれ？」

「あ？ ああ、そうか」

男は漸く状況を思い出して、ため息をついた。

泣く子も拳骨で黙らせる程度には大人げないが、純粹な感情には弱かった。

かつこいいと言われたから“黙らせた”などと世間に吹聴されれば、自分の評価はマフィアから変質者にジョブチェンジする。

男はそのことに思い至り、もう何度目か解らないため息をついた。

「来い」

男はたった一言そう告げると、背を向けて歩き出した。

少女はその言動に、自分を導く勇敢な騎士のようなビジョンを瞼の裏に思い浮かべて、花のように咲いた笑顔でついていく。

その場に第三者がいたら、それは勇敢な騎士などではなく首を刈る

デュラハンだ、と止めていただろう。

ぺたぺたと、小走りですいていく。

男は少女のために歩く速さを緩める程、優しくはない。

むしろ、小走りになっていることに気がついていながら緩めないところを見ると、嗜虐的な趣味でもあるのかと誤解されるだろう。趣味ではなく、癖なのだ。なお悪いが。

荒々しく銀色のドアノブを掴むと、乱暴に開ける。

少女が入ってくるので、開けたままにして大股で歩く。

この時点で、男は脇に置いてあるローファーを履いていた。

喫茶店の、店内。準備中の札だけでなく、埃一つついていないブラインドも下ろす。

小さな子供を連れ込んでいると騒がれれば、もう何度目か解らない無実と誤解の警察騒動に繋がる。

しかも今回は、少女の身元がわからないのに男に懐いているという怪しい要素がある。

国家権力に屈するつもりはないと胸を張れば、塀の高い檻に入れられるのだ。

かしゃん、と音がしてブラインドが下まで落ちる。

全ての窓を隠したらそれはそれで通報されそうだが、この程度なら周辺住民も「またか」と怯えるだけで済む。男はいい加減、この周辺を焼き払いたかった。

電気のスイッチをつけると、店内が明るくなる。

男は壁際の席に乱暴に座ると、生活区と店内を繋ぐドアのところに入ったままきよるきよると店内を見回す少女の様子に、ため息をついた。

目の前の金銭に捕らぬ狸で目が眩んだ自分が悪いとは、考えない。何事も前向きに。責任は、押しつけてこそその責任だ。

「さて」

男は、友人に勧められて貰った禁煙用の、タバコの模造品を啜えた。何か啜えていないと落ち着かないのだから、使わないと思っていたこれで我慢する。

男の様子に気がついた少女は、裸足のままぺたぺたと走りより、男の向かいの椅子を引いた。

そして、背の高い椅子に飛び乗ろうとして、椅子の背に額を打つ。横から乗ろうとしたのが悪かったのかと、少女は涙目で額を押さえながら、唇を尖らせた。

これも、今日で三度目だ。

今度は、前に回る。

椅子を倒さないように慎重に、机と椅子を掴んでよじ登る。気分はロツククライマー。前人未踏の頂上へ、果敢に挑む。

だが、それをいつまでものんびりと眺めている程、男の気は長くない。い。

むしろ短い方だと自覚している男は、ここまで見ていた自分を褒めたくなった。

椅子から立ち上がる姿に、先ほどまでの乱暴さはない。

一生懸命頑張る少女の姿に絆されて、手を貸してあげようと立ち上がった。

なんてことは、もちろんない。

単純な精神的疲労で、のろのろと立ち上がったという、それだけの話だ。

手伝うのではなく、さっさと話を進めさせるのだ。だったら、始めから手を貸してやれという話だが。

「むむむ」

「はあ」

呻る少女の首根っこをひつつかみ、椅子に座らせる。

猫のように掴み取られた少女は、自分の身体が浮き上がったことに、目を輝かせた。

この暗黒邪龍は、きつと魔法使いだ。そんなとりとめのない思考は、少女の中で“尊敬”に変わる。

男はここで、少女に敵わなくなるフラグを立てていた。

重ねて言うが、この男は純粋な好意には弱いのだ。後ろ暗いから。

「で、なんでおまえは」

「わたし、アリア！おじさんは？」

漸く話を進ませることが出来る。

そう思った男の言葉は、少女　アリアによって、出鼻をくじかれた。

男は大人げなく額に青筋を立てたが、少女の無垢な瞳に気圧されて、言葉に詰まる。

迷子の子供に懐かれて、犯罪者と間違えられて腰の引けた警官に拳銃を向けられたときも、気圧されたりはしなかったのに。ちなみにその警官は、男が眼力で気絶させて、事なきを得た。

「はあ　　颯真……源、颯真だ」

「みなもと、そーま……うんっ！わかった！おじさん！」

結局“おじさん”である。

だが、いちいちアリアの言動を気にしていたら話が進まないと言うことくらい、男 颯真はこの短い邂逅で理解していた。人間は、学ぶ生き物である。

「で、どうしてあそこにいた？」

「ぶっ？」

無邪気に首をかしげるアリアに、颯真は再び青筋を立てる。今度は二本もある。

気の弱い人だったら、これだけで失神するだろう。

颯真は、息を整えて、落ち着く。

人間は学習するのだ。

重ねて言うが、学習する生き物なのだ。

「おじさん、どうしてへんなかおしてるの？」

三本目の青筋が浮かぶ。

首都高の分岐点並みに枝分かれしていて、今にも血管が切れそうだ。颯真は、何故自分が我慢をしているのか疑問に思っ、握り拳を作った。大人げない。

「でも、かつこいーねっ」

「ぐっ」

震える手を、机の下に隠す。

息を荒くしているため、客観的には変質者だ。

颯真は行き場のない怒りの発散口を、机に定めた。机の端を握ると、思い切り潰す。

木製の分厚い机が、颯真の握力でみしみしと歪む。

そして、フローリングに落ちる木片を掃除するのは自分であると言ふことに思い至って、嘆息した。

「親は？」

颯真は、いつそ短く聞いて情報を集めることにした。

そろそろ破裂した血管で額の上の渋滞玉突き事故が起こりそうだったためだ。

我慢強いと自分に言い聞かせられる分だけ余裕があると、血の上る脳みそで考えていた。

「おや？」

「お父さんやお母さんだ」

なおも首をかしげるアリアの様子に、颯真は今度こそ机の上に乗っ伏した。

予想以上の厄介ごとなのに、下手をすれば金は一銭も入らない。

警察に持って行くというのが一番現実的な手段なのにそれを選べないのは、出頭騒ぎが嫌だからだ。

警察署には、彼専用の取調室（私物付き）がある。常連でも、嫌なのだ。

これからどうするべきか、颯真はつらつらと考える。

机に乗せた右手、人差し指で、木目をとんとんと叩く。

アリアはその指を、じっと眺めていた。指の動きに合わせて身体ごと顔を上下させる。

そうしている内に酔ったのか、青い顔で蹲った。

颯真は、無意識に灰皿に手を伸ばす。
隣の席に置いてある灰皿は、少し遠い。
だが、タバコの火がついている訳ではないので、簡単に諦めた。

「おじさん、はいっ！」

「ん？ああ、すまん……な？」

アリアに灰皿を手渡されて、それを自分の前に置く。
そこまで来て、漸く自体の異常さに気がついて、啜っていた禁煙用のタバコを口から落とした。
目を瞠り、首をかしげる少女を見る。
そして、風切り音を幻聴させるほどのスピードで首を回して、隣の席を見た。

そこには、灰皿はない。

アリアは、椅子に座るのにも時間がかかる。
取って戻ってくるような、時間はない。
それならば、どうやってやったのか。
それを考えて、颯真は苛立たしげに右手で頭を掻いた。

「おい、今どうやった？」

直接訊ねると、アリアはきょとんと小首をかしげた。
ぷらぷらとさせていた足を一度止めて悩み、思い至ったのか笑みを作る。

そして、更にも二つ隣の席に、指を向けた。

「えーとね……」

アリアが気合いを入れて、灰皿を見る。

すると、アリアの指に引き寄せられるように、ふわりと宙を浮いて、灰皿が颯真の前に落ちた。

落ちる勢いが強かったせいで、灰皿はからんと机の上で跳ねた。

「そこで、待ってる」

「うんっ！」

にこにこ笑みを浮かべて、颯真の言葉に頷く。

その限りなく無邪気な表情に、颯真はついに頭だけでなく胃も痛くなってきた。

彼のように凶太い精神の胃にダメージを与えることが出来たのは、後にも先にも彼女一人だけである。

乱暴に席を立つと、壁に掛けたロングコートのポケットから携帯電話を取りだした。

装飾のない黒一色の携帯電話。

その横のスイッチを押すと、勢いよく開いた。無造作に短縮番号を押して、苛立たしげに左耳に当てる。

『現在この携帯電話は』
「いいから普通にしろ」

颯真よりも冷たい、低い声。

電話越しにもわかる伶俐な雰囲気は、よくわからない冗談のせいで簡単に霧散する。

ブラインドのかかった窓の横に背を預けて、右手をウェイター服のポケットに突っ込んだ。

足先で床を叩く姿から、彼の感情が簡単に予測できた。

「銀髪のがきの“シフター”だ。心当たりは？」

『知らん……が、“何”だ？』

「わからん」

颯真の言葉に、男は低く、呻る。

電話越しに感じる困惑の感情に、颯真は苛立ちを隠そうともせず、右手で頭を掻く。

この仕草は、颯真が苛立ったときの癖だった。

無くて七癖とはよくいったもので、無くそうしても無くせないのが癖である。

『厄介事には相違ないだろうが……いや、まさか……そうだな、匿つておけ』

「ガキのお守りをしろってか？」

電話越しで表情が見えないとはいえ、男は颯真の苛立ちを如実に感じ取っていた。

男にとって、颯真は古い付き合いになる。

颯真が案外と流されやすいことも、割と良い一な部分があることも

目の前の欲望に後先考えない節があるのも、しっかりと把握していた。

『謝礼を出す準備があつたのだが、そこまで言うのなら』

「仕方ねえな。さっさとどうにかしてくれよ？」

即答だった。

それも、声色まで柔らかくなっている。

彼は、もう少しで今月の電気と水道を止められるところだったのだから、仕方がない。

天下の回りものがなければ、生活サイクルも回せないのだから。

『そうか。すぐに振り込んでおこう。とりあえずは、前金だ』

「おう、頼んだぞ。村正」

男 村正は、最後にもう一度「頼んだ」と口にして、電話を切る。颯真は携帯電話の通話終了ボタンを押すと、ロングコートのポケットに、携帯電話をしまった。

そして、上機嫌な様子でアリアの前に戻ってきた。

軽やかなに椅子に座る辺りで機嫌の良さが伺えるのだが、その顔は邪魔者を始末したギャングのように恐ろしかった。

こんな怖いものが格好良いなどといえるのは、アリアだけだと断言できる。

「あー、アリア、だったな」

「うん！」

待ち望んだ颯真の声に、アリアは歓喜を滲ませた声を出す。

鈴の転がすような声は、聞き心地が良い。

もちろん颯真は、そんなところは気にしていない。

颯真にとつてのアリアは今のところ、金の生る木、程度で止まっている。声なんか、気にしていない。

「帰る家はあるのか？」

順序がおかしい。

ここで有ると答えたら、前金だけ貰うつもりでいる辺り、彼が顔と中身が完全一致する瞬間があるから駄目だと友人に怒られる、所以だろう。

そんな楽をして稼ごうという颯真の考えなんて知らず、アリアは俯いて首を振る。

その様子から、颯真は追求しようとはしない。聞いたら、厄介事に全身で突っ込むことになるからだ。

「それなら、少しの間、ここにいますか？」

颯真がそう続けると、アリアは目を瞞って颯真の顔を見る。

少しだけ潤んでいる目には、あえて気がつかない、隠したいのなら好きにすればいいという、投げやりな感情だった。

「うん！よろしくねっ！おじさんっ！」

満面の笑みを見せるアリアに、颯真は苦笑を零した。

だが、その顔は、最初よりも幾分か柔らかい。

彼にこの話を持ちかけた村正という男は、知っていたのだ。

颯真は、明確な“理由”を与えられないと善行を働くことが出来ない、不器用な恥ずかしがり屋である、と。

数分後、颯真は、意気揚々と確かめに行った銀行の、預金残高で崩れ落ちることになる。

水道代と電気代によって金が突き返せない状態で、法外な値段の前金にその理由たる“厄介事”に巻き込まれたということに、気がついて。

これが、男と少女の、小さな物語の序章。

その中の、小さな小さなプロローグだった。

1st day 路地裏の天使／喫茶店の魔王（後書き）

長編、短編と書いたので、今回は中編です。

全七話構成を予定しています。

描写に力入れて書いてみようと思います。

できるだけ、わかりやすい文章になるように、と。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

今作も、よろしく願います。

追記、七月十六日十時七分。

見やすいように改行と、言い回しの細かい部分を修正しました。

2nd day Shopping Time !

冬の東京は、寒い。

もちろん、他県へ行けば東京よりも寒いところなんて、いくらでもあるだろう。

だがそれでも、寒いことには変わらない。

小鳥の囀る声も、鴉の鳴き声も、暖かい眠りを妨げるとい意味では何も変わらない。

そんな風に可愛らしい小鳥を睨み付けることが出来るのは、この男くらいだろう。

もちろん、大人げないという意味になるが。

セミダブルのベッドで、颯真は寝返りをうつ。

だが、小鳥を睨むために気力を使ってしまったせいで、二度寝をすることは出来なかった。

二度寝の心地よさが、得られない。颯真はそのことに苛立たしげに、右手で頭を搔く。

「起きるか」

口に出せば、起きようという気にはなる。

茶色の毛布をはがそうと、左手を動かす。

だが、何か重いものが腕に巻き付いていて、動かすのが面倒に感じられた。

仕方なく、毛布を剥いで、左手の重いものに目をやる。

銀色の髪と白い肌の、目を瞞るような美少女が、可憐な微笑を浮かべながら静かに寝息を立てていた。

少女　　アリアは、颯真の左手に巻き付くように、背を丸めて寝入っている。

アリアは、たった七歳の少女とは思えない美しさと、年相応の“あどけなさ”を併せ持っていた。

絵画から抜け出して、白い羽をシーツとワンピースに変えて地上におりたった天使のような容姿は、大の大人でも生唾を飲み込ませる“危うさ”を演出していた。

その肢体に、邪な考えを　　持つはずなど、当然無い。

颯真はうつとうしげに腕を振って、アリアの手から抜ける。

そして、面倒くさげに首根っこを掴んで、自分の右側に置いた。

左から起き上がらなければならぬので、邪魔だったのだ。

同じベッドで寝ているのは、そうしたいとアリアが望んだからだ。

だが、望めば応える颯真ではない。

単純に、ベッドが一つしか無く、同衾するのが一番手っ取り早かったのだ。

更に言えば、颯真はこの幼い少女をカイロ扱いしていた。

幼女が怯えるような趣味はないが、子供が泣くような容姿と性格は持っていた。

「面倒なことになったもんだ」

そう言っつて、シャツとズボンという簡素な格好からウェイター服に着替える。

もうこの服を着始めて十五年。一番着慣れた服だった。

颯真は小さく欠伸をすると、ベッドから暖かさが無くなって眉をし

かめるアリアを気にも留めずに、朝食の用意をしに行った。

流石に、二人分作る程度の良識は、持ち合わせているようだった。
。

SHIFT

隙間風はなくても、寒いものは寒い。

暖かさを求めて、白い小さな手がシーツの上を、縦横無尽に動き回る。

やがて暖かさが見つからないことに、アリアは眉をしかめて呻る。

「むむむ、ゆくえふめいだ」

いないと解ったら、目を開ける。

空色の目を開いて、ぱちぱちと瞬きをした。

くあつと口を開けて欠伸をしたら、ベッドに足を投げ出したまま上半身を起こす。

右手を挙げて、ぐっと背伸びを一つ。

左手は目元に当てて、擦る。

意識がまだ覚醒しきっていないのか、焦点の合わない目で小さく肩を落とした。

だらけきった顔は、すぐに二度寝してしまおうと画策する、ねぼすけな猫のようだった。

「あれ？」

首をかしげて、鼻を鳴らす。

くんくんと匂いをかけば、扉の向こうから食欲をそそる匂いがしてきた。

アリアは見えもしない匂いの煙を追うように、目を閉じたまま鼻を突き出して顔を動かす。

ベッドから身を乗り出して、よだれをこくりと呑み込んだ。

「おなかへった」

一言そう呟くと、おぼつかない足取りでベッドから降りる。

ぺたんぺたんと言は二回。

降り立つと、鼻を突き出したまま移動する。

銀のドアノブも高い階段も既に乗り越えている。アリアは今、怖いものなしだ。

「むむむ、はっけんですたいちよう！」

誰に言っているのか。

……辿り着いたのは、生活区から店内に繋がるドアだった。

自分で開けたことがないドアノブは金色で、アリアの心を刺激する。狙いは定めた、あれは新しい障害だ。アリアの目は、挑戦的に輝いていた。

「とっつー！」

「あ？」

ドアノブに飛びつく、決死の跳躍。

だがそれは、開かれた扉から出てきた声に遮られた。

勢いをつけるために下がっていたので、開くドアに正面衝突するこ
とは避けられた。

運の良い少女である。

ばふりと音を立てて、黒い棒にぶつかった。

その棒は想定していたよりも堅くなくて、アリアは自分の鼻が潰れ
てしまわなかったことに安堵した。

小さな右手でぺたぺたと顔を触る。

曲がっても、いないようだ。

「おはよう！おじさん！」

見上げて、アリアはぱあっと笑う。

向日葵畑に咲いた一輪の花は、日に向かうと書くだけあって、太陽
のように明るく暖かい。

颯真はそんなアリアを一瞥すると、笑顔を気にも留めずに踵を返し

た。
呼ばなくても来たのなら、それでいい。面倒が省けた、とその大きな背中が物語っていた。

アリアはそんな颯真のズボンを掴むと、もう一度笑う。
先ほどよりもなお明るい、満面の笑みだ。

「おじさん！おはよう！」

振り向いた颯真に、アリアはそう言い放つ。
言いたいことは解るが、ここで素直に言うことを聞く程優しい人間だったら、最初の時点で挨拶を返している。
子供の我が儘に付き合う暇があったら、さっさと食べさせて食器を片付けたい。

颯真は、そんな薄情な大人だった。

「おはよう！」

それでも、アリアはめげない。

颯真は泣かれたら面倒だとアリアの顔を見る。

だが、その顔に涙などは浮かんでいない。

浮かべているのは、天真爛漫な輝きだけだ。

後光が差していそうなその笑みに、颯真は一歩足を退いた。

何時の時代も、悪の魔王は勇者の光に弱いのだ。それが年端もいかない子供ならば、尚更だ。

「おはよう！」

「おはよう」

ついに、負けた。

アリアはそんな颯真をにこにこ見つめていた。器量という意味では、颯真は始めから負けている。惨敗だ。

今度こそ歩いて、アリアの首根っこを持ち上げる。

喜ばせる気など、颯真には欠片もない。

だが、この方法をとる度にはしゃぐアリアの無邪気な様子に、邪気だらけの颯真は深く肩を落とした。その顔に浮かぶのは、憔悴である。

カウンターに座らせると、颯真は厨房側に回る。

自分の分はさつさと済ませていた。一緒に食べてあげられる程、彼は可愛い性格をしていない。

アリアは、カウンター席に並べられた朝食に、目を輝かせる。

ふわふわたまごのスクランブルエッグと、こんがり焼かれたスライスベーコン。

真っ赤なミニトマトが添えられたレタスのサラダには、白い自家製ドレッシング。

きつね色に焼かれたトーストには、オレンジの皮が入った自家製マーメイド。

白いコップに入ったミルクは、甘い匂いと共に温かい湯気を昇らせていた。

この男、見かけによらず料理には全力を注ぐ男だった。

いや、料理だけではない。綺麗に清掃が行き届いた店内を見るかぎり、掃除も颯真の仕事だとわかる。

彼が顔を見せることなく厨房に立つだけで、客の入りはがらりと変わるだろう。

お客様に真摯であろうという気持ちが欠片もない時点で、駄目かも知れないが。

「わあー……いただきます！」

アリアは、フォークを握り、食べ始める。

もぐもぐと咀嚼して、呑み込む度に目の輝きを強くする。

両手でコップを掴んで、ミルクを飲む。

だが、少し口にして慌てて口を離した。どうやら熱かったらしく、アリアは赤い舌をぺろりと出して、風に当てて冷やした。

それでもミルクの味を早く感じたくて、ふうふうと息を送って冷ます。

そしてそれを、ごくりと飲み込んだ。

暖かさに身体をぶるりと震わせると、その心地よさに、ふぬけた笑顔で肩を落とした。

満足そうに平らげていくアリアの前で、颯真はタバコを取り出した。だが、流石に食事中の子供の前で吸うことは彼のなけなしの良心が痛んだようだ。

タバコの箱を握りしめたまま、きっかり一分悩んで、悔しげにタバコの箱を片付けた。

彼の中で良心が打ち勝つのは意外に多い。

そもそも良心が戦い出さないで、迷うこと自体が少ないのだが。

「ごちそうさまっ！おじさん、こんなにつくれるんだね。まほうつかいみたいっ！」

食べ終わったアリアは、興奮を隠しもせずそう告げた。

颯真はそれに返事をするともなく、ソースを顔につけたアリアに布巾を投げた。

アリアはそれを慌てて受け取ると、ごしごしと顔を拭く。

その間に、颯真は食器を回収して洗い始めていた。

骨張った大きい手を使って洗っているのに、食器を持つその手に粗雑さはない。

その優しさを、一割で良いからアリアに分けてあげるべきだろう。

「おじさんっ」

笑顔で颯真を呼ぶアリア。

颯真は当然のように答えない。

仏頂面を崩さない辺りで、徹底抗戦の気配が伺える。

彼は悪いやつだった自分を取り戻すのに必死だった。

そんな意地を張らなくても十分、大人げない“悪い”人間なのだが、そんなことは頭がない。

「つぎからは、いつしよにたべようね！」

しかしアリアはめげない。

この幼い少女は、早くも颯真との付き合い方を身につけていた。

女は何時だつて強かなのだ。

だからこうして、どんな態度を向けられようと、笑顔を向け続ける。

彼女の中の颯真は、寡黙でカッコイイ魔法剣士で固定されていた。

そろそろ颯真はアリアに謝るべきだろう。大人げなくてごめんなさい、と。

「いつしよにたべようね！」

洗い終わった食器を、繊細な手つきで拭いていく。

まるで芸術品を扱うような優しさだ。

颯真は自分のためならば、優しさを最大限発揮することが出来るのだ。

つくづく駄目な大人である。

アリアの人間更正力に期待するしか、このおっさんをどうにかする方法はないだろう。

「いつしよにたべようねっ！」

一つ前よりも、語尾が強めだ。

アリアに動揺や困惑、焦りはない。

ただ信じて、言葉を紡ぐだけだ。

「たべよう、ねっ！」

「わかったよ」

第二ラウンドも敗退だ。

目に見えて明るくなるアリアの表情に和むことが出来る程純粹ではない。

むしろ、太陽の光を浴びた吸血鬼のような顔をしている辺りで、彼の性根を察するべきだろう。

颯真がデレるのは、案外遠くないことかも知れない。

アリアはカウンターのの上にだらしなく両手を放ると、颯真を見てへにやりと笑った。

この太陽が颯真という氷河を溶かしきるのは、まだまだかかりそうだった。

朝食を食べてしばらくした頃、アリアはしきりに服を気にしていた。ワンピースの裾を掴んで持ち上げてみたり、ちよっと匂いをかいで、ぎゅっとめを嗅ってみたり。

鏡に映してくるりと回って、出来ている染みに悲しそうな顔をした
り。

その仕草を見れば、大抵の大人は彼女の手を引いて外へ出かけるこ
とだろう。

だが颯真は、カウンターで新聞を読みながら、ちらりと一瞥してそ
れっきりだ。

アリアは意を決したように、颯真に近づいた。

そして、カウンター越しに颯真の目をじっと見つめる。

人に頼み事をしたいのなら、相手の目をじっと見つめる。

子供が本能的に持っている、おねだりの基本技である。

……女の子の派生技を覚えるのは、まだまだ先の話だ。

「おじさん、あのね」

我が儘だと思っているのか、普段の明るさはなりを潜めていた。

こんな表情をさせていることに胸が痛むこともなく、普段からこう
なら楽なのに、などと考えている時点でそろそろ駄目な大人レベル
がリミットブレイクしそうな颯真だった。

「ふくをかってください!」

アリアはそう言って、勢いよく頭を下げた。

……さて、アリアはカウンター席で背伸びをしていた形だ。

その状態から頭を下げたらどうなるか?そんなことは、一目瞭然。
鈍い音を立てて、アリアは額を打ち付けた。

真っ赤になった額を抑えて、蹲る。

涙目で小さくなるアリアを見ても、颯真の良心は働かない。彼の良

心は、こうしてよく怠けるのだ。

颯真は、アリアを一瞥すると、新聞に目を戻す。薄情である。左手で頬杖をつきながら、右手で新聞をめくる。

何気なく目にした新聞の記事、そこに視線を固定させて、颯真は身体を硬くした。

親分が鉄砲玉にばらされたことを新聞で気がついた若頭のような表情だった。

「よし、わかった。買い物へ行くぞ」

「ほんと、おじさん？ やった！」

喜びのあまり、飛び上がる。

浮かれているアリアをよそに、颯真は額に浮かべた脂汗を、左手でぐいっと拭った。

彼は、妙に焦っていた。

そして、その原因は、広げられたままになっている新聞の記事が示していた。

その記事の内容は、ネグレクトにドメスティックバイオレンスと言った、児童虐待のものだった。

これ以上厄介な汚名を着せられたら、凶太い颯真でも外に出づらくなることだろう。たぶん。

颯真はロングコートから引っ張り出した携帯電話で、警察への根回しを村正に頼む。

これで、職務質問から現行犯逮捕へのワープ現象を体験しなくて済むことだろう。

ロングコートをばさりと羽織ると、颯真はアリアを連れて外へ出た。

今日の厄介事の、始まりである。

十

冬の空の下、その肌寒さに、アリアはぶるりと震えた。

冷たい風に晒される素足と、手。
袖無しのワンピース一枚という格好は、彼女を外側から冷やしている。
く。

颯真は外に出たこの瞬間まで気がついていなかったのだが、彼女は素足だ。

店内に入るときにローファーを履いていたりと颯真自身は暖かくしていたが、当然のようにアリアのことまで気にしていなかった。

このままでは、根回しをされていても、めでたく留置所で強制お泊まりだ。

颯真は苛立たしげに右手で頭を掻く。生憎彼は、自分以外の服を常備しているような人間ではない。

これは割と普通のことなのだが、颯真だというだけで駄目人間のよ
うに感じられるのは、間違いなく日頃の行いによるところだった。

颯真はアリアの首根っこを掴むと、器用に放り投げて肩に乗せる。
突然の肩車に、アリアは目を見開いて驚いた。

そしてすぐにその双眸を輝かせると、楽しそうに颯真の頭に抱きつ
く。

少し毛質が堅くて、ちくちくとアリアの小さな手に刺さる。

その感触がどうしてか嬉しくて、アリアは好奇心に満ちた表情で、
ごわごわと髪を触る。

そんなアリアを、颯真は止めない。

楽しそうにさせておけば、世間は何も言わない。

颯真が二十八年の人生で学んだことだ。

こんなことを学ばなければならいというのは、結構残念な人生であ
る。

「服と靴と下着とコート、あとは毛布を一枚だな」

「おじさん、ふとっばらだね！」

アリアは、颯真の怖い顔の上にいるというのに、動じる様子もなく
頭をぺしぺしと叩く。

好奇心と期待がいつぱいに詰まった目は、蒼天の空色の中に、宝石
箱の中身を散らかしたような鮮やかな輝きに満ちていた。

子供ながら純粋な興奮が、アリアの頬をほんのりと朱色に染めてい
る。

もう、寒さなど忘れてるように見えた。

まとめて買ったために、大型百貨店へ行く。

電車代を使うのがもつたいたいという理由で徒歩で行っても良かったのだが、多少金を使っても世間体を気にした方が良さだろうという結論が、颯真の脳内で決まった。
この間、一秒にも満たない高速展開だ。

世間体を気にしなければならぬ容姿でも、色々と……そう、色々と便利なのでそこは気にしていなかった。前向きである。

タクシーを捕まえて、自分とアリアを終始生暖かい目で見る壮年のタクシー運転手の表情に苛立ちながらも、颯真は青筋を立てるのをぐっと我慢していた。

ここで下手に怒ったりでもしたら、黒白のタクシーに乗り換えさせられる可能性が出てくるからだ。

赤いランプのあの車は、乗り心地も居心地も悪い。

アリアを肩車しているためタバコを吸う訳にも行かず、強制禁煙の憂き目にあつたことで村正に脳内で八つ当たりしていると、すぐに百貨店に到着した。

入ってすぐ向かうのは、とりあえず自分で歩かせるために靴の購入だ。

颯真の顔を見て半泣きになる店員に、アリアの靴を選ばせる。

颯真はセンスがない訳ではない。選んであげるといふ思いやりがないだけなのだ。

それだったらセンスがない方がいいのだが、そんな颯真は気持ちが悪い。

動きやすくて丈夫な運動靴を購入して、ついでに靴下も買って履かせる。

肩車が終わっても、アリアは変わらず目を輝かせていた。

新しい靴が嬉しいのだろう。飛んだり跳ねたりと忙しない。

「おじさん、ありがとう！」

「次は服だ。パジャマや下着も纏めて選べ。行くぞ」

「うんっ！」

子供の下着云々で照れる大人ではないのは、救いだらう。

颯真は根性が捻くれていて顔が怖いだけで、変態ではないのだ。前者の要素だけで十分“ダメ”なのは、気にはならない。

白いワイシャツとピンクのベスト。

下は淡い空色のスカートで、ロングコートは颯真とお揃いの灰色。

それから白いマフラーを購入して、ついでにピンクの手袋も買う。

パジャマは鳩柄。パンツも鳩さんプリントの鳩づくし。

他にも、換えを何着かアリアは笑顔で選んできた。

颯真は終始顔色を変えることなくこれらをレジに運んで会計する。

今着るための服以外は、速達で自宅に運んで貰う。

手荷物付きで歩くのは、食材を購入する時のみと、颯真は決めていた。所謂、自分ルールである。

「おじさん、ごはんはどうするの？」

「そこら辺で食うぞ」

当然だが、アリアを食べる訳ではない。

だというのに颯真を虫を見るような目で見た通行人の男性は、颯真に塵芥を見るような目で睨まれて、泡を吹いた。颯真は。

気の弱い人間が標的だったら、眼力だけで殺害することが出来るだろう。

“ホンモノ”を泣かせたことのある視線は、伊達じゃない。

食事処を探すために、歩く。

視線で人を斬りながら、身体で風を切る。

歩く度に靡く灰色のコートが、無駄にカッコイイ。

アリアはそんな颯真に、胸をときめかせていた。

大股で歩く堂々とした姿勢は、高い身長と合わせて様になっている。時折右手で黒髪を掻く仕草も、外国の映画俳優を彷彿させる鮮やかな動作だ。

一つ一つの仕草が、決まっている。

目つきはそれを台無しにするどころか、アクセントの一つとして彼を一際映えさせる。

だから、彼の評判を落とすのは、ひとえに彼自身の性格だった。この男は、本当に改めるべきである。

百貨店の内部にあるレストランに入る。

美男と美少女のペアは、実に様になっていた。

これで隙あらば他人を視線で射殺そうとする厄介な癖がなければ、颯真はもうちょっと華やかな人生を送っていたことだろう。それは既に、颯真とは別の生き物だが。

レストランで、颯真はカルボナーラを、アリアはナポリタンを頼む。食べる手つきが繊細なのは、ひとえに美味しかったら味を盗もうという挑戦者の気概だった。

見た目とアンバランスな手つきを、アリアはうっとり眺めていた。アリアの中での颯真の株が、ぐんぐんと上がっていく。

颯真の外での様子と、自分の日用品の購入。

その二つを見て、得ることが出来て、アリアは幸せそうにはにかなだ。

アスファルトを踏む足は、軽い。
寒さなんて、何のその。真新しい運動靴の履き心地は、少しだけむずむずとしている。

それでも、スキップをする度にたんつと小気味よく鳴る足の裏に、緩んだ笑顔を浮かべてしまう。

両手は後ろで結んで、上を向く。

昼時を過ぎたばかりだが、なんだか少し、雲が出てきた。

アリアは目に映った雲が自分と颯真のコートとお揃いだったことにへへ、とだらしない声で笑った。

そんなアリアを、颯真は胡乱げに見る。

この年の子供は何を考えているかわからない。

何が嬉しくて笑っているのか、颯真は自分の子供時代を思い浮かべて考える。

だが、脳裏に浮かんだのは今よりも“やんちゃ”だが性格はほとん

ど変わっていない自分の姿。

この男は、昔からこんな感じだったようだ。救いがない。

右手を顎に当てて思案下な表情をしていたが、すぐにその右手を頭に持って行って、がしがしと掻いた。

目を閉じて、苛立たしげに息を吐く。

取引中に警察に乗り込まれたヤクザのような表情だった。すれ違う人は、それだけで涙目である。

「曲がるぞ」

「うんっ」

颯真が小さく告げると、アリアは疑問に思うことなく頷いた。

機嫌の良いその横顔は、無邪気で愛らしい。

颯真はそんなアリアを見ることなく、ただ鋭い目で虚空を睨み付けていた。

街道から脇道に外れて、裏道を歩いて人気のないところへ移動する。早歩きな為、アリアは走らなければついて行けないのだが、今の彼女にとっては、走ることも娯楽の範疇。風を切ってコートを靡かせる颯真の後ろ姿を見ることが、楽しかった。

やがて人がいなくなる。

裏路地を進んだところで、颯真は足を止めた。

そして、右足を軸にして半身になって振り向いた。

そこにいたのは、紺のスーツを着こなした、七三分けに眼鏡をかけたサラリーマン風の男だった。

脂汗をかいた頬を、紺のハンカチで拭っている。

その顔には営業スマイルが、仮面のようにぺたりと張り付いていた。場違いな空間で、真冬なのに大粒の汗をかくサラリーマン。

二次元から切り出したようなうすっぺらい存在感は、傍から見てもその男に“不気味”な印象を植え付けていく。

「気づかれましたか」

残念そうな口ぶりだが、その顔に張り付いた笑みは剥がれない。

呪いのかかった能面でも顔に貼り付けたのか、表情は一貫して動かない。

頬の肉一つ動かさずに喉の奥から音を絞り出している。

ここまで徹底させれば、いつそ見事と言えた。

「人様のことを考えて人混みから外れるとは……お優しい方なんですな」

当たり前だと言わんばかりに胸を張るアリアはともかく、颯真という男を知る人間が聞いたら耳よりも正気と脳を疑って真剣に入院を勧めるレベルの戯れ言を、男はにこやかに言い放つ。

その目は哀れな“正義の味方”を見下していたが、残念ながら目の前にいるのは邪悪な笑みを浮かべる悪魔である。

「いつまでもこうしては、仕方ありません。その子供を渡してください」

男はそう、笑顔のまま告げる。

そうすれば命は助けると、傲慢に語る目。

彼の目は、雄弁すぎた。

そう、颯真の神経を逆なでする程度には。

彼がしたことは、暗黒邪龍に逆鱗を聞いて、そこに息を吹きかけて

笑ったようなことだった。

「だんまり、ですか。仕方ありません。貴方はもう少し、命を大切にすべきでした」

男はそう言うと、ローファーと靴下を脱ぎ捨てた。

アリアが颯真の異様な気配に気がついてかなり後方に下がっているのだが、それを颯真が逃がしたのだと判断していた。

この時点で、俯いて目元の見えない颯真の発する気配に気がついていれば、まだマシな結果が見えていたのかも知れないに、だ。

「【脚部接続・因子転換・承認】」
「シフター、か」

颯真は、小さく呟いた。

人にならざる力を宿す、人から外れた突然変異。

警察にも対策課が存在するが、基本的に社会の裏側。

一般人では知らない裏の事情だ。

これを知っているのは、ルールを知らなければならぬシフター同士のみ。

確実にシフターだけしか知らないという分けではないが、男は颯真がなんらかのシフターであると、このやりとりで検討づけていた。

「転換しますか？」

「てめえ程度の相手に？」

男の笑顔は崩れない。だが、その広い額には青筋が浮かんでいた。

颯真は、他人の逆鱗を探して殴って怒らせてぶちのめすが、得意な男なのだ。

つくづくろくでもない性格である。

「後悔しなさい 【フロッグシフト】」

男の両足が、骨格を換えていく。

色も質も全てが転換されて、めきめきと奇妙な音を立てる。その両足は、まさしく蛙。太く平べつたい、蛙の足だった。

シフトファクター
“転換因子”

存在にもっとも適合する他生物の因子。

自分の魂を構成する因子を転換させて、己に由来するたった一つの“人外”に変身を遂げる、今世紀最大の謎の因子。この因子を持ち、他生物に変身する人間のことを、“シフター”と呼ぶ。

颯真の目の前の男は、蛙のシフターだったのだ。

男は屈伸運動をして、足を伸び縮みさせる。

白と緑のコントラストに黒い斑の足を惜しげもなく晒すその姿。

笑顔も相乗効果を発揮させて、実に堂々とした“変質者”の様子を演出していた。

一言で言うと、気持ちが悪い。

自信を持っているようなので、気の毒すぎて本人に告げることはできないだろう。普通の人ならば。

「きめえ」

そして、ためらいもなく口にしてしまうのが、颯真という男である。男は笑顔が崩れるんじゃないかと思うくらい、額に青筋を作っていた。

そろそろこの男は、颯真が“ストレス解消”をするために脇道に外れたことに、気がつくべきだった。

「轢殺してあげましょう」

男がそう、告げる。すると、男の姿がかき消えた。

蛙の凄まじい跳躍力を持って、裏路地の壁を縦横無尽に跳ね回る。その高速機動は、並の人間では捉えられない、目で追うことも難しいスピードだ。

だが、残念ながら颯真は色々と並の人間とは言い切れない。

「おじさん、がんばって！」

アリアの可愛らしい声援が、颯真に届く。

生憎颯真は頑張るつもりなど欠片もない。

だが、今までの経験から考えれば、返事をするまで言い続けるだろう。それは、煩わしい。

だから、颯真はやる気なさげに、半身から背を向けて、右手をふらふらと振って見せた。

そのことに喜んでいる以上、アリアのことは放っておいてもさほど問題ではないだろう。

煩わしくないという意味で。

颯真はおもむろに、足下に落ちていた空き缶を拾った。

男は、自分のスピードを前にした悪あがきを見てから、必殺“ガマ油滑走路”でとどめを刺すつもりだったので、その様子を気にしていなかった。

そして颯真は、男の軌道を一瞥すると、壁に向かって空き缶を放り投げた。

「なっ!？」

それだけで、十分。

跳ねるために壁に向けた足と、壁の間に空き缶が挟み込まれた。その結果、男は壁の上で“滑り落ちる”という奇妙な体験を味わうことになった。

予想のつかなかった出来事に、男は頭を下にして落下する。シフターならこの程度で死にはしない。だが、意識を失って逃げられるだろう。

男の顔から笑顔は消えていないが、悔しげだ。

そして、颯真は……その程度で許す程、優しくはない。

壮絶な笑みは、世界征服を目の前にした魔王のようだった。

軽く前に出るだけで、そこは男の落下地点の、一步半前となる。

颯真は男の落下タイミングを読んで、前蹴りを放つ。

全体重を込めたその蹴りは、逆さまに落下した男の顔を捉えた。俗に謂う、ヤクザキックが男の笑顔に突き刺さる。

「ぎゅぶっ」

奇妙な声を上げて、鼻から鮮血をまき散らしながら仰け反る。

逆さまに落ちてきて仰け反ったため、勢いよく後ろにはじき飛ばされながら顔面でスライディングした。

無残である。

颯真は白目を剥いている男に近づくと、身分証明書を見るために、ポケットから財布を抜き出す。

“遠藤京次”と刻まれた免許証を、警察の友人である村正に引き渡

すために抜き取っておく。
そして、当然のように金も抜き取った。高そうな銀時計も、さりげなく回収している。

「おじさん、かつこいーっ！」
「当たり前だ」

決して当たり前ではない。
むしろ、今は恐怖にむせび泣く場面であって、顔を輝かせて笑う場面ではない。

アリアは今、素敵なナイト様に助けられて、ご満悦だった。
誰か、この幼い少女の頭を救ってあげるべきだろう。

「臨時収入だ。夜は何が食いたい」
「はんばーぐっ！」

福沢諭吉が五人も手に入ったことで機嫌の良い颯真は、夕飯のリクエストを聞くとという普段なら絶対にしないことをした。
颯真は、頭の中に煮込みハンバーグのレシピを思い浮かべる。
デザートまで考えている辺り、本当に機嫌が良いようだ。

「しっかし……なんだかなあ」

ハンバーグにはしゃぐ小さな少女。
何の動物に変身するかも解らない、謎のシフター。
聞き出すと深みにはまりそうで、聞くに聞けない、けれど気になるジレンマ。

アスファルトを踏みならす軽快な足音に、颯真は深く、息を吐く。
白い吐息が昇るのは、果たして空か、深淵か。まだまだ厄介事は、
尽きそうになかった。

「おじさんっ！はやく！」

笑顔で強ばった手を引く、幼く白い、小さな手。

その手をふりほどくのも面倒で、颯真は開いている左手で、がしがしと頭を掻くのだった。

2nd day Shopping Time ! (後書き)

第二話でした。

次回は明日か、明後日にあげたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次回も、よろしく願います。

追記、七月十六日、十時三十四分。

誤字修正と、細かい言い回しを修正しました。

ついでに、見やすいように改行を増やしてみました。

3 r d a y 颯真と愉快的仲間達

降り積もる、雪。

ダイヤモンドダスト

空から落ちる白銀の宝石屑は、雲間の光を器用に吸い取って、きらきらと輝く。それは、生物から熱を奪う、欲を持つ人間に対する誘蛾灯。見惚れたが最後、緩やかな寒さと共に、目覚めぬ眠りに落ちていく。

そんな白い結晶を傘越しに感じる。

例え直接肌に触れなくても、その寒さは風に乗って温度を奪っていき、無垢な掠奪者を前に、ただの人間は震えて逃げるしか道はない。

傘を差しながら、大学帰りの学生は、身体を震わしながら自分の身体を両手で抱いた。彼の命を守っていたカイロは、先ほど無残に寿命を迎えた。天寿と言うには早すぎる、あっけない最後だった。

暖を求めてさまよい歩く。

そんな中、彼はやっと暖かな光を見つけることが出来た。看板はかすれて見えないが、ドアにかかった“営業中”の札が、その場所を暖かな店だと指し示していた。学生は、喜び勇んでドアに手をかけて、開く。からんからんと鳴る鈴の音が、心地よい。

かすれた看板に対して、清潔で手入れの行き届いた店内。暖房が効いていて、店内は思わず息を吐かせる程暖かい。漸く寒さの地獄から解放されて、彼は小さく頬を緩ませた。

「いらっしやいませ！」

鈴の転がるような、美しくも可憐な声。その幼い声の主を捜そうと、

学生はきよるきよると周囲を見る。そしてすぐに、声が幼かったことに思い至り、苦笑を零しながら下を見た。

「あ
」

そして、思わず息を呑んだ。

プラチナを溶かしたような白銀の髪は、腰下まで滑らかに伸びている。

済んだ浅瀬を思わせる色素の薄い青い目は、ぱっちり大きく円らだ。

雪を溶かして人の形に固めたような、繊細で儂い白い肌と、上品な真紅を乗せた朱色の唇が、いつそ神秘と言っても過言ではない、芸術的なバランスを保っていた。

桃色のベストと白いシャツ、水色のスカートの上から緑のエプロン。

その全てが女神の彫像のようで、学生は生唾を飲み込む。

「なんめいさまですか？」

滑舌がスムーズにいかないのは、彼女がまだ蕾みだからだ。

まだ花開くことも知らない、閉じた花。学生は、自分の手を持ってその花弁を開きたいと、邪な願望を秘めた目で、少女を見た。

一向に帰ってこない返事に、少女は小首をかしげる。

その姿が、紳士ドロンとしての彼の本能を呼び起こしているとも、知らずに。

学生は、少女に夢中だった。

夢中だったから、気がつかなかったのだ。この場所にいるのは天使だけではない。むしろ対極に位置する、魔王の根城に足を踏み入れ

ていたことなど、知りもしなかった。

「よ、よし、ここにあめ玉が」

「何をやってる」

低く重たい、声。

厨房の奥から出てきたのは、そう “黒” だった。

漆黒の髪と目、ウエイトレス服を身に纏った顔の怖い男が、学生を睨み付けていた。

その重圧に、学生は我に返る。そしてついに、美少女という餌によって、自分が魔王に誘い込まれたと言うことに、思い至った。

いつまで経っても動かない客に声をかけただけは、思わない。これから食事的な意味で食べられるのだという最悪の思考が脳内を駆け巡る。そして、学生はついに耐えきれなくなって踵を返す。彼は今、十九年の人生の中で、一番速い動きで駆けだした。

「すみませんでしたッ!!」

走り去っていく、学生。その姿に妙な苛立ちを覚えた男 颯真は、あらん限りの握力で固めた雪玉を投擲した。

すると、雪玉は風を切って一直線に進み、鈍い音を立てて学生の頭に激突した。

ゆっくりと雪の中に倒れる学生の姿に、颯真はがしがしと頭を搔く。苛立たしげに店内の入ると、首をかしげる少女 アリアの姿に、ため息をついた。

アリアの姿に釣られてふらふらとやってきて、颯真の姿を見て逃げ出す。

昼前だというのに、もう三人目の“逃亡者”だった。

SHIFT

しんしんと降る雪に、颯真は苛立たしげな様子だった。

自室の窓から見える冷たい雪。その一粒一粒を、消滅させんが如き勢いで睨み付ける。

この寒さは、颯真にとっての仇敵だ。

なにせ、冷暖房と言った空調設備は、店内にしかないのだから。

自分に抱きついてすやすやと寝息を立てるアリアを無造作に引きはがすと、ベッドから降りる。

颯真は、埋め込み式のクローゼットまで歩いて、今日のウエイター服を選ぶ。

クローゼットの中身は、六種類程のウエイター服が入っていた。颯真にしか解らない違いがあるため、六セットではなく六種類なのだ。颯真以外のものが見ても全て同じに見えることから、彼の友人はこれを“変則的裸の王様”と呼んでいた。別に誰に買わされた訳でもないのだが。

ベッドで寝息を立てるアリアが、眉をしかめた。

彼女の朝は、隣の暖かさを失う喪失感から始まるようだ。

白いシーツの上で、手を滑らせる。上を下へと動き回り、自分で動かした手が送った風で寒気を覚えて、猫のように丸まった。

寒い寒いと震えながら目を開けて、朝だと悟ると物音がする方を見る。

颯真がウエイター服に着替え終わると、ぼんやりと焦点の合わない目で自分を見るアリアと目があつた。アリアは颯真に初めて気がついたように目を丸くして、すぐにへにやりと笑って見せた。

あまりにその笑顔が幸せそうで、颯真は少しだけ気圧された。綺麗なものから目を逸らすのは、汚れた大人の宿命である。

「おじさん、おはよー」

「……おはよう」

颯真が挨拶を返すと、アリアはその言葉を噛みしめるように、笑顔

で何度も頷いた。
眼を細めて頷く姿には、求めていたモノを手に入れたと喜んでいる、
そんな感情が見て取れた。

複雑な事情が、聞いてもいないのに転がり込んでくる。颯真はその
事実にも、大きく大きくため息をついた。

まだ引き返すことが出来ると思っっている辺り、この男は楽観主義者
なのかも知れない。

壁に左手を当てて、頂垂れる。

そんな颯真をよそに、アリアはぺたぺたと歩いて筆筒の前に立つ。
そして、いそいそと着替え始めた。白い小さな手が慌ただしく動い
ている様子を一瞥すると、颯真は部屋を出た。

アリアはお気入りの服に着替えると、大きく伸びをして、クローゼ
ットの扉に構えられた姿見の前へ移動した。そして、少しだけ朱の
刺した頬に両手を当てて熱を感じ取ってから、姿見の前でぐるりと
回った。颯真に買って貰った、お気に入り服だ。

左手の握り拳を口元にあてて、ころころと笑う。

部屋を出ると、階段を下りて店内へ歩いて行った。ドアを開けて、
横に置いてある靴を履く。これも、颯真に買って貰ったアリアのお
気に入りだ。

アリアは座り込んで靴を履くと、立ち上がって地面つま先を、とん
とんと当てる。しっかりと履けたことに満足して、頬を綻ばせた。

そうしたら、小走りでカウンターの中へ入る。

朝食を作っている颯真の横で、手洗い顔洗い歯磨きをこなす。冷た

い水は、顔だけでなく背筋も冷やしたようで、アリアはぎゅうつと目を瞑って顔を拭いた。

カウンターに座って、朝食を待つ。

颯真は、昨日は洋食だったので、今日は和食を作っていた。

ふんわりほかほか真っ白ご飯。

わかめと豆腐と油揚げ、それからエノキの入った合わせ味噌のお味噌汁。

あつあつのだし巻き卵に、ほうれん草のおひたしと、塩もみキュウリのお漬け物。

こんがり焼かれた鮭の切り身は、塩味だ。

ついでに湯飲みに熱いお茶が注がれていて、見ているだけで身体が温まる。

「いつしよに、たべよー」

「ちっ……わかってるよ」

颯真は苛立たしげに舌打ちすると、頭をがしがしと掻いてから、自分の分の食事をアリアの左横に並べた。既に尻に敷かれ始めている哀れなアラウンドサーティーである。

「おじさん、いただきますっ!」

笑顔で手を当てて、アリアはじいっと颯真を見た。ここまでくれば、颯真もアリアの言いたいことが解る。無視しようかとも思ったが、結末は見えているのでさっさと終わらせることにした。

「はぁ……いただきます」

「いただきますっ!」

手を合わせて、アリアに従う。子供に従うというのも嫌だから、颯真は脳内でアリアの願いを仕方がないから聞いてやったという表現にシフトした。デレ期は近い。

和食は、箸を使って食べるものだ。なれた人にはわかりにくいがこの箸を扱うのは結構難しい。

幼い子供となるとそれも顕著で、鮭をほぐすのにもいちいち体力を使う。

アリアはちらとらと隣りの颯真を見て、動きを盗もうと凝視していた。

颯真の食べ方は、日本人でも目を瞠る程繊細で美しい。顔に似合わないにもほどがある。

自分の手を凝視するアリアの様子に、颯真もだんだんと苛つき始めた。

四苦八苦して、失敗しては眉をしかめて呻りながら、颯真の手を、穴が開く程見つめていた。

颯真としてもこんな視線に晒されていたら、食べにくかった。

蹴散らせばいい対象ではないというのが、彼にストレスを与える一番大きい理由だ。

颯真は大きいため息をつく、長い手をアリアの背中側から回して抱え込むような形を作る。そして、箸を持つ手に自分の手を重ねた。その体勢に、アリアはどきりと胸を弾ませていた。

「即、覚える。こうだ」

颯真としては、教える手間を省くために“横着”したに過ぎない。

だがその形は優しげなお兄さんか父親のようで、彼を知るものが見れば目を瞠ることだろう。彼自身も、客観的に冷静にこの状況を見ることが出来ていたら、やはり同じように本人か否か疑うことだろう。

アリアは胸をどきまぎとさせながら、颯真の強ばった手を感じていた。

堅くてごつごつとした大きな手は、冷たいのに暖かい。心を温める、不思議な温度。

この手に包まれていれば、アリアは何だって出来るような、そんな気がした。

「ごつ？」

「そうだ、よし、できたな」

すっと、颯真が手を離れた。

手は離れたが、隣りに颯真がいるというだけで、アリアの心は暖かいままだった。

温もりの残る手でまだ拙くても扱えるようになった箸を動かして、だし巻き卵を口に運ぶ。ふんわりと口の中で優しくほぐれる、甘い卵。

アリアはそれが、颯真に箸の使い方を教わる前よりもずっと、美味しく感じた。

「えへへ おじさんっ！」

「………今度は何だ」

アリアは、少しだけ恥ずかしそうに、それでもやはり可憐に輝いた笑みを見せた。

「だいすきっ」

それは、アリアの心からの言葉だった。心に響かせる、鈴の音。暖かい空気が、やんわりと流れる。

アリアは白い歯を見せて頬をやや紅潮させたまま、はにかんだ笑顔を見せ続けた。えくぼが頬に出来て、アリアの明朗活発な可憐さを印象づけている。

アリアは何も答えない颯真から目を逸らすと、両手を頬に当てて冷やそうとしていた。

赤いままなのがなんだか恥ずかしくて、上目遣いで颯真を一瞥すると、照れているのを誤魔化すために、ぺろりと赤い舌を出して笑った。

対する颯真は、湯飲みを口に当てたまま固まっていた。

彼は今、必死だった。幼い少女に抱く情欲の念を抑えるのに必死だとか、そういう話ではない。聞かれたら確実に牢屋に入れられる外で言わないようにと言いつけて中で言われて、やっぱり聞かれたらこれはもう海外逃亡しかない。

どうせ周辺住民からは“やっぱり高飛びか”としか思われないのだろうから、世間体は気にしなくて良い。いっそ埋めてしまおうか？ などと思案しているが、物騒なだけで彼なりの照れ隠しだった。方向性が間違っているが。

そして 事態は、悪化する。

吹き込む風に、颯真は身体を震わせた。

颯真が喫茶店の入り口側に座っているの、颯真の影で照れていた

アリアは、扉の方から冷たい風が流れていることに気がつかなかった。

颯真は寒さを誤魔化すために熱いお茶を飲み干す。彼は沸騰したお湯を一気飲みすることが出来るという、微妙な特技の保持者だ。

身体を芯まで温めたところで、颯真は疑問に思う。どうして、暖房の効いたこの店内で、寒いと背筋を震わせているのか、と。

どさっ

何かが、落ちる音がした。

もう気がついてはいるのだが、颯真は必死にその現実から目を逸らそうとしていた。だが、逃げたところで変わるものではない。現実には、非情である。

「颯真、さん……そんな、“本当”だったなんて」

準備中の札がかかっているにも気にせずドアを開けてしまうのは、彼の私的な繋がりのある人物達……つまり、颯真の友達連中だけだ。

開け放たれたドア。

会話を聞いていたのだろう、開けてすぐに手鞆を落とした人物。

茶色の手提げ鞆から、ゆっくりと視線を上げていく。紺のジーンズに白いシャツ。その上からダッフルコートを着込んだでいる。

大きな鳶色の目と、薄い茶色の髪。セミロングのその髪と体つき、顔立ちから、女性であることがわかる。

「待て、美穂。その“本当”ってのはなんのことだ？」

美穂と呼ばれた女性は、ふらふらと店内に入る。

おぼつかない足取りに心配になるアリアにそつと近づくと、丁度食べ終わってごちそうさまのために合わせていた手に、自分の手を重ねた。

そして、少しだけ潤んだ目で、アリアに優しい笑みを作っ て見せた。背に合わせて腰を屈めている辺り、“まともな”大人である。

「あたしは安土美穂。お嬢ちゃんは？」
「わたし、アリア！」

美穂はアリアに名前を聞くと、噛みしめるように頷いた。そして、アリアに気がつかれないように、颯真を鋭い目で一瞥して、再び視線をアリアに戻す。
その顔に浮かべられているのは、変わらず優しい微笑みだ。

「源アリア……アリア〓源かな？良い名前だね」
「みなもと……うんっ！わたし、アリア〓みなもとっ！」

颯真の目が細められ、濃厚な殺意が込められた視線が美穂に突き刺さる。

美穂は、慣れているはずの自分の体調を悪くさせるその眼力に、身体の底から沸き上がる恐怖心を、気丈な精神で押しつぶす。

ここで負ける訳にはいかないのだ。この少女のためにも。

一方、颯真は苛立ちが最高潮まで上がっていた。

美穂のせいで、アリアはこれから“源”と名乗るだろう。

子供に強く言い聞かせることが颯真に出来ない以上、止めることは出来ない。

ちなみに、言い聞かせることが出来ないのは、言い含めようとするのにも加減が解らず、結局失神と通報、尋問、留置所のスペシャル

コンボが確定するからだ。経験済みなので、間違いはない。

「アリアちゃんかあ、良い名前だね。年はいくつ？」

「えへへ、ななさいっ！」

「二十一の時の子供、か……ちゃんと答えられて、偉いねえ」

聞き捨てならない、言葉があつた。

颯真は勢いよく美穂の両肩を掴んだ。

そして、テーブルを軋ませる程の握力で、万力の如く押しつぶす。めきめきと体内が鳴る音と形容できない痛みに、美穂は顔を引きつらせた。引きつらせることしかできなかった、というのが正しいだろう。

「誰に何を聞いたのか、正直に話せば両腕“だけ”で許してやる」

「あいたたたたっ！？……むむむ、村正君が！」

出てきた名前に、颯真は手の力を緩めた。当然、緩めるだけだ。

逃がしてはいないし、逃がす気も無い。

その“本気”を感じ取って、美穂は顔を青くした。アリアは信号機のように顔色を変化させる美穂を、無邪気な笑顔で見つめていた。時折、拍手も混ぜている。

「村正君が、颯真さんに隠し子がいて、母親に認知を迫られて今頃になって引き取ったって……あいたたたたっ！？」

颯真は大きくため息をつきながら、両手に力を込めた。美穂は涙目になっている。

まんまとからかわれてまんまとお仕置きされている辺り、哀れであ

る。

「アリア、俺はちょっとこいつと“話し合い”をしてくる。大人しくしてろ」

「？ うんっ！おじさん！」

「アリアちゃん、そこは“おとうさん”でも……いいいたいっ!？」

どす黒い空気をまき散らしながら、颯真は美穂を引っ張る。

掴んでいる手首からは、骨の軋む嫌な音がしていた。明らかに震えている美穂と、異様な空気の颯真。そんな二人を見ながらも笑顔で返事をするアリアは、将来大物になるだろう。

二人が離れていき、アリアはぼんやりと美穂に言われたことを思い出していた。

おとうさんでもいいという言葉。アリアは、居ないものについてどんなものかわからない。

だから最初に颯真に、両親について訊ねられたときも、首をかき捨てた。

知識としては知っていても、颯真が聞きたいことはそんなことではないと、幼いながらに感じ取っていたのだ。

美穂は、アリアに颯真を“おとうさん”と呼ぶように勧めた。

それは、颯真が家族になると言うことだが、それは簡単なことではない。家族を得ることは、簡単なことではない。アリアにそう教えられた人物を、アリアは覚えていなかった。

湯飲みに残ったお茶を飲むために、両手で持ち上げる。

湯飲みを斜めにする、まだ少しだけだが温かさの残る緑茶が、アリアの喉を通る。

こくりこくりと二口分程目を閉じて飲むと、ゆっくりとカウンターにお茶を置いた。

一人で過ごすということが、アリアは無性に寂しかった。

「いやーごめんねえ、アリアちゃん。あたし、なんか勘違いしてたみたい」

戻ってきた美穂は、開口一番でそう告げた。

ぶらんと下がっている左腕に何があったのかは解らない……解りたくないが、妙に痛々しい。美穂はへらりと笑うと、アリアの隣りに座った。そして、お茶をねだる美穂に、颯真は苛立たしげに水を置いた。

この寒いのに、氷入りの冷たい水だ。悪意を感じずにはいられない。ここで藪をつついて悪魔を召喚する度胸はないため、美穂は顔を引きつらせながらも水を飲んだ。

「で、何しに来たんだけ？」

「何って、村正君に聞いて心配になったから見に来たんですよ」

美穂はそう言うと、唇を尖らせた。颯真と付き合いのある友人だけあって、立ち直りも早かった。伊達に慣れてはいないのだ。

美穂は既に寛ぐ体勢に入っていて、颯真はそんな美穂を見て青筋を立てている。

明らかに怒っている颯真を前に寛ぐことが出来るのだから、この女性には案外と肝が据わっているのかも知れない。もちろん、ただ抜けているという可能性も否定できないのだが。

「ねー、おじさん」

アリアは、迷ったあげく、結局“おじさん”と呼んだ。“おとうさん”とは簡単に呼んではいけないような気がして、この呼称に落ち着いたのだ。

「なんだ？」

「どーしたの？」

怖い顔のまま聞き返す颯真と、明るく首をかしげる美穂。

対照的で、アンバランスな二人だった。アリアはそんな二人を見て、決めていたことを言おうと大きく息を吸い込んだ。

アリアは考えていたのだ。どうすれば家族を得る“資格”を得ることが出来るのか、と。

そして、辿り着いた答えは、とりあえず出来ることからやろう、というものだった。

「わたし、おじさんのおしごとの、おてつだいがしたいっ！」

その純粋な叫びに、颯真はぼかんとしていた。

同じように美穂も驚いていたが、こちらはすぐに正気に戻って笑った。隣を見て我が振りを直したのだ。颯真が踏み台にされるといふ、珍しい結果だった。

「アリアちゃんは偉いねえ……それじゃ、お姉ちゃんがエプロンを進呈しようー！」

美穂はそう言うと、緑色のエプロンをアリアに渡した。

手提げ鞆からごく自然に出てきたのだが、どうして持っていたかは謎だ。

「おい、余計なことを……」

「じゃあね！アリアちゃん！」

「うんっ」

美穂は、その場から全力疾走で逃げ出した。

颯真が雪玉を使って撃墜するまでの間に、アリアは器用にエプロンを着た。颯真が戻ってきたときには、すでにやる気に満ちたアリアが、満足げに佇んでいた。

ならばやらせて見ようと玄関付近にいさせるマスコット扱いにしたところ、何故かロリコンがこぞって来るようになった。

そして、冒頭に戻るのだった。

十

薄暗い雲間に浮かぶ太陽が、頭上にまで昇ってきた。

いつものように客の一人も来ないまま、正午である。

颯真はそれに関して苛立つことはあまりない。客が来ないことなど日常茶飯事で、いつもの光景が眼前に広がっているにすぎないのだ。だから、特に気にした様子もなく、新聞を広げてのんびりとしていた。

だが、アリアはそうはいかない。

ドアの前でそわそわと身体を揺さぶりながら、腕を前に組んだり後ろに組んだり小さな焦燥に似た気持ちを、身体で表現していた。

手伝いをする決意した方がいいが、一向に客が来ない、来てはいるのだが、何故かアリアを見て顔を赤くした後、颯真を見て顔を青くして逃げてしまうのだ。

これでは、颯真の役に立つことが出来ない。

純真な子供には、“大きいお兄さん”の気持ちを理解することなど、できません。

唇をとがらせてみたり、頬を膨らませてみたり。

不満を身体で表現したところで、何かが変わる訳ではない。

だが、ここで止めてしまうのもいやで、アリアは姿勢を正しくして立ち続ける。ここで座るように促すことが出来る程優しい颯真ではないので、直立不動の構えで扉を睨み続けた。

そして、ついに扉が開く。顔に浮かべるのは満面の笑み。逃がしてなるものかと声に力を入れてみる。気分は獲物を見つけた狩人だ。

「いらっしやいませーっ！なんめいさまですかっ？」

ところが、先ほどまでと同じように、返事が来なかった。また逃げられるのかと思うと、上げた顔も下がってしまう。

残念、獲物は逃がしてしまった。

だが、ここで諦めたりはしない。再チャレンジだと力強く顔を上げると、新しい客が自分を見下ろしていることに、アリアは気がついた。

ぼろぼろのジーンズとぼろぼろの黒いシャツ。

薄汚れた茶色のコートに切りも整えもせずは無造作に後ろへ流した白い髪。

周囲にどこかで感じたことのある無駄な威圧感を撒き散らす三白眼は、焦げ茶に近い黒い色をしていた。颯真がマフィアなら、こちらは脱獄犯だ。

「子供、か……一人だ」

「え　　は、はいっ！おたばこはおすいになりますかっ？」

「カウンター席で構わん」

「はいっ、ごあんないいたしますっ」

帰ってきた言葉に、アリアは一瞬、惚けてしまった。

ぽかんと目を見開き、口は半開き。そんな顔をさらしてしまったことに、アリアは顔を赤くする。

そして、待たせるのは良くないと、颯真にねだって聞き出した接客方で席に案内する。

この店で始めてこの接客方をしようしたのは、アリアだったらする。つまり、颯真は一度も慇懃な態度をしたことがないと言っことだ。彼はもつとアリアを見習うべきだろう。切実に。

「ヴァンか、珍しいな」
「近くまで来たのでな」

男 ヴァンも、颯真の友人だった。美穂とは違い“いかにも”颯真の友人らしい風貌の男だ。二人で歩いていたら機動隊を呼ばれるだろう。そして、妙に逃げ足の速いヴァンだけ逃げ切り、颯真一人で取り調べを受けるのだ。

ヴァンがカウンターに座ると、颯真はサイフォンを使ってコーヒーの準備をする。

注文をしていないのに煎れているので所謂“いつもの”というやつなのだろうと、アリアは密かに感動していた。

店長と常連客、アイコンタクトでご注文。

自分もそんな風になりたいと、アリアは想像してはにかむように笑った。そうすれば、自分もベテランウエイトレスだ。

「あれは？」

「同輩」

「そうか」

背中越しの、短い会話。

騒がしいものではなくゆったりとした雰囲気と、不快ではない沈黙。それだけで、アリアが少し嫉妬してしまうほど、二人が親しい友人なのだということがわかった。

この風貌の男二人がこの空気を出せることには、驚かない。アリアとしては二人とも“かっこいい”のだ。このセンスは、もうどうしようもないだろう。

「娘、名は？」

「むすめ？　わたしは、アリア！アリア！みなもとっ！」
「そうか。俺はヴァン＝クローデットだ」

ヴァンはカウンターに座ったまま、左側の扉の前に立っていたアリアに訊ねた。

アリアは“娘”という単語に首をかしげたが、すぐに理解して頷いた。

ちなみに、お揃いだと喜んでで名乗っているが、同じ名字が家族を表すものだとは気がついていない。妙に偏った、ちぐはぐな知識である。

「客が来ないのが、寂しいのか？」

ヴァンは、抑揚のない口調で、そうアリアに訊ねた。

アリアは人差し指を唇に当てて、少し考えた。そして、すぐに答えが出たのか、ゆるゆると首を縦に振った。その様子に、ヴァンは小さく、頷いた。

「待っている」

「おい、ヴァン？余計なことを　　ったく」

颯真が言い切る前に、ヴァンは出されたコーヒーを一気に飲み干して店を出る。その頼もしい背中に、アリアは感動していた。やはり、颯真の友達だけあって、頼もしい。

だからアリアは気がつかなかった。

ヴァンがちゃっかり無銭飲食を働いていたことに……。

ヴァンが去った後も、暇な時間は続く。だが、今度は長くはなかった。

「ここだー」

「本当に小さい子が働いてる」

「おおっ」

次々と、人が入る。

アリアは急に忙しくなったことに驚くが、ここが正念場だ。

役に立っていると颯真にアピールするために、快活に笑いながら接客する。

颯真はやってくる客の人数に目を丸くして驚いていた。

その様子にアリアは颯真が“かわいい”などと、とても常人では考えられないことを思っていた。颯真がアリアに勝てる日は来ないだろう。

人を視線で射殺そうとする癖が発動さえしなければ、客もそこまで颯真に怯えはしない。困惑の最中に立たされている颯真は、反射的に周囲を威圧する余裕もなかったのだ。

忙しくなった喫茶店。

颯真は右手で頭を掻きながらも、金のためだと言い聞かせて、注文されたメニューを作るのだった。

「ありがとうございますっ！またおこしをおまちしておりますっ！」

西に太陽が落ち込む頃、アリアは最後の客を見送った。

カウンターでは、颯真がぐったりと項垂れながら、レジに入ったお金を数えて笑っている。

白い魔法の粉を販売した売上金を数えている、と言われたら、納得してしまいそうな凶悪な笑顔だ。本人は至って真面目である。欲に塗れてはいるが。

「おじさん、おつかれさまっ」

「おっ」

機嫌が良いので、無視することはない。

颯真は自分でそう思っているが、機嫌が悪いときでも返事をするようになりつつあることには、気がついていなかった。

アリアはぐうっと背伸びをして、全身の骨をならす。空気の弾けるような音が、なんとも心地よい。

労働による爽やかな疲れに、アリアはにへらと、だらしなく笑った。そして、颯真の隣りにちょこんと座る。椅子に昇らせたのは、颯真だ。

お金を数える颯真を嬉しそうに見るアリアが座りにくそうだったから、颯真はすぐに手を貸してくれた。

颯真は完全に無意識なのだが、アリアはそれに“暖かさ”を感じていた。

本当に“冷たい”人間は“寒い”のだ。

「えへへ おじさんっ、だいすきっ！」
「はいはい」

颯真は、そう言って抱きついてくるアリアに、軽く返した。無理にでも身体を引きはがさない優しさに嬉しくなって、赤くなった頬を隠すように颯真の腕に顔を押しつけた。

颯真はいちいち相手にしていられないという理由で引きはがしていないが、基本的に嫌いな人間に触れられることを嫌う男だ。自分でも気がついていないが、颯真はアリアに心を開きかけていた。

からんからん

準備中の札がかかっているのに、ドアが開く。

そんなことをするのは颯真の友人なのだが、一日に三人も来るのは久しぶりだった。

颯真は扉を開けた主を見て、まともな部類の友人だったことに、安堵のため息をついた。ちなみに、美穂は“まともな友人”にカテゴライズされない。あれはあれで、まともではないのだ。性格的に。

「大通りでヴァンが“狐狸理”^{こじくり}を連れていたからまさかとは思ったのだけれど……本当に流行っていたのね」

狐狸理とは、美穂の経営する万屋……所謂何でも屋なのだが、おそらく周辺を歩いていて、ヴァンに捕まったのだらう。

年の頃は、二十六歳から上、三十歳よりも下ぐらいの女性だった。

胸の大きく開いた服に、タイトなスカート。

茶色のコートを羽織った姿が、様になっている。

髪はアップにして軽く飾り付けたプラチナブランド。

アリアよりも濃い青の瞳と、日本人離れした顔立ち。

赤褐色の肌が、服装と化粧と合わせて扇情的な、大人の雰囲気を持つ美女だった。

「ヴィヴィアンか。今日はどうした？」

「あら？用が無ければ、来ちゃいけない？　ヴァン達が“おもしろいこと”をしていたから、見に来たのよ」

カウンター席に座り、足を組む。

どこか淫靡な雰囲気を持つ仕草の一つ一つに、アリアは目を輝かせていた。

だが、“用が無ければ”と女性　ヴィヴィアンが言ったときに、少しだけ剣呑な表情を作った。

ヴィヴィアンはその表情からすぐに意図をくみ取ると、少しだけ笑ってから訂正した。

それにあからさまに安心するアリアを見ているヴィヴィアンは、実に楽しげだ。

「それで、この子、“私たち”のご同輩、らしいじゃない」

「ああ……今一、なんだかわからんがな」

颯真はお金を数えるのを止めずに、そう答えた。
踏み込む気がないので聞く気がない。

また、子供の内は、自覚していなかった場合は藪をつついて恐慌状態を引き起こすこともある。それなりの“準備”が整っていない内は、聞き出す訳にもいかなかった。

「わからないなら……どうやってシフターだってわかったの？自己申告とは言わないでしょう？」

「ああ、それなら　　アリア、灰皿のアレ」

二人のやりとりを横目でじっと見ていたアリアは、突然話を振られて首をかしげた。

灰皿、と聞いてとればいいのだろうと判断すると、アリアは笑顔で頷いた。

「うんっ、わかった。おじさん！」

アリアがぐつと指先に力を入れた。眉をしかめて後ろの席の灰皿に指を向ける姿は、可愛い。指を上にあかすと、灰皿が浮き上がる。

そして、颯真の前まで糸で引っ張られたかのように、浮いて来た。

その力に、ヴィヴィアンは目を丸くしていた。

「これって　　^{デュアルファクター}“重核因子”？」

「おそらく、な」

シフターの転換因子。

その力に、ある種特別な能力がついてくることがある。

毒蛇が溶解液を放つことが出来るのは、能力を持つ因子……“重核因子”を持つと言うことである。ヴィヴィアンは、アリアがその“珍しい”シフターなのかと、驚いていたのだ。

「それなら、狙われるのにも納得するわ」

「おまえはどこまで知ってるんだ……」

納得するヴィヴィアンに、颯真は大きいため息をついた。

アリアは何のことだか解らずに、首をかしげていた。だが、なんとなく仲間はすれにされているようで、不満に頬を膨らませた。ヴィヴィアンはそれをみて、今度は少しだけ声を出して笑う。

その和気藹々とした風景を見ながら、颯真は大きく息を吐く。

右手でがしがしと頭を書くと、彼にして珍しい、憂鬱な表情で天を仰いだ。

「厄介事は、ご免だぞ」

そう呟くが、その声は小さい。

巻き込まれずにいられるのか、颯真は自分でも自信がなかったのだ。

日は落ち込み、町には黒い天蓋がかけられた。

3rd day 颯真と愉快的仲間達（後書き）

現在、思うところがあり、先の話を大幅に改訂をしています。
心理描写もいじる必要が出てきたので、すこし更新が遅れるかも知
れません。
申し訳ありません。

2011/03/12 誤字修正

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次回も、よろしく願います。

とりとめのない言葉。

その自分の声に酔っているのか、男は喉から引きつった笑い声を零した。

静かな空間に木霊する声を聞くのは、命を持たない冷たい機械だけだった。

「イツヒ……ハハハッ」

大きく笑い声を上げる。

何も無い空間に響くように、大きく大きく笑う。

口を開けて、黄色い歯をむき出しにしながら、嘲笑の笑みを塗り重ねていく。

目には涙が溜まり、それがゆっくりとタイルの床に落ちていった。

部屋が暗いためか、その涙はコールドールのように黒く淀んでいるように見えた。

「そう、だ。わた、わたしが、しん、しん人類」

壊れたテープレコーダーのように、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

そして突然、電流にでも打たれたように身体を震わせると、おもむろに立ち上がった。

キーボードを数回叩いて機械音が鳴ったことを確認すると、がらんとした空虚な瞳でふらふらとカプセルへ歩きだした。

カプセルの前で、ガラスのカバーに包まれたスイッチを押す。

すると、ガラスのカバーが割れる高い音と共に、空間に三つのカプセルが浮かび上がった。

それらのカプセルの中身は空ではなく、裸体の人間が入っている。

男はその人間を見ても、表情を変えずに、ふらりと服を脱ぐ。

やせ細り肋骨の浮いた身体は血の気が無く、幽鬼を連想させる。

「世界を、劣等種を、新人類を」

ぼそぼそと蚊の鳴くような声でそう呟くと、カプセルの脇のレバーを引いた。

カプセルが降りてきて、浴槽のように横たわると、男はその中に身を投じた。

気泡が浮かび、弾ける頃には、再び周囲が完全な闇に閉ざされた。

S H I F T

天気は快晴。

昨日の雪が嘘のように晴れ渡った空は、太陽の光を雲で隠すこともなく、地上を輝きで満たしていた。

そこかしこに作られた雪だるまは、まだまだ溶けない。

日差しがあるといっても肌寒いことには変わりなく、風でも浴びようものなら凍えてしまっただろう。

白いベッドで、寒さからアリアはもぞもぞと起き出した。

ベッドに残る温もりが、少し前まで颯真がここにいたことを示していた。

アリアは颯真の顔を思い浮かべると、頬を綻ばせて笑う。

今日も一緒に過ごせるのかと思うと、アリアの胸は自然と躍る。

なんだか顔が熱くなった気がして、アリアは小さな手を団扇のようにして顔に風を送った。

そして、自分で送った風が思ったよりも冷たくて、背筋をぶるりと震わせた。

冷たい風に不満げに唇を尖らせたが、すぐに機嫌を直す。

漂ってくる、良い匂い。

大きな魔法の手が生み出す素敵な料理の数々を思い出して、アリアはよだれをこくりと飲み込んだ。

想像とするだけで小さく、くうと鳴ったお腹の音に顔を赤らめながら、ベッドから降りる。

フローリングの冷たさは、あまり感じない。

颯真に買って貰った鳩さんプリントの靴下が、アリアの熱を優しく守っていた。

箆笥の前に立って、着替える。

何着か買って貰った服の中の一セット。

無地の白いTシャツに、ジージャン。

下は淡い緑のフレアスカート。

好みにより、キャップを被ることまでできるが、アリアは家の中で帽子を被る気になれず、付属のキャップを筆筒の上に置いた。

アリアの身長の子三倍程高いが、そこは指に力を入れて浮かせるだけで、簡単に置くことが出来る。

着替え終わると扉を開けて、外に出る。

四日目となると慣れてきたのか、高い階段を下るアリアの足取りも、心なしか軽やかだった。

克服済みな上に慣れているのだ。これくらいは朝飯前だと、アリアは一人、小さく胸を張った。

手を伸ばしてドアノブを捻り、扉を開ける。

店内に入るときに運動靴を履いて、アリアはカウンターに小走りで近寄った。

そして、朝食を用意して、手をつけずに仏頂面で待っていてくれた颯真に、アリアは明るい笑顔を向けた。

「いただきますっ」

颯真は手を合わせるだけだ。だが、アリアに合わせて“手を合わせる”という行為をするようになっていた、彼は意識して出来る優しい性格の持ち主ではない。

だが、アリアの願いを断り切れず、気がついたら流されていたのだ。

あつさりとしたオニオンスープに、キュウリとニンジン、それからアスパラのスティックサラダ。

今日の自家製ドレッシングは、橙色のキャロットソースだ。

トマトとハムとレタスをマヨネーズとマスタードを使って、耳の残ったパンに挟んだサンドウィッチ。

マヨネーズと砕いたゆで卵のものと、クリームで味付けられたオレンジと林檎のもの。

この三種類から選べる、綺麗で整ったサンドウィッチだった。

アリア専用の、鳩のマークがアクセントとして添えられた白いカップ。

ふんわりと昇る白い煙の匂いをかぐと、チョコレートのように甘い匂いがして、アリアは目を輝かせた。クリームでほんのり甘く整えられた、ホットココアだ。

今日は失敗しないように、ふうふうと息を吹きかけてから、おそろおそろココアを口にした。少しだけぴりりと痛んだ舌をぺろりと出して、風に当てさせる。

そして、今度こそとココアを口にした。

「あまい」

「ココアだからな」

そんな一言は、無視して食事続けるのが颯真だ。

だが、颯真は反射的に言葉を返していた。

何故自分は言葉を返したなどと悩む可愛い頭は持っていない颯真は、のんびりとスープに口をつけていた。

今日も良いできだと頷く姿に、アリアは颯真の“かわいらしさ”を再確認して、はにかんだ。色々と駄目な感じである。

サンドウィッチにかぶりつく、間から溢れてきたマヨネーズが指を汚す。

親指についたマヨネーズを舐め取ると、もう一度かぶりつく。口元が汚れてしまうが、ここまで来ると気にしていても仕方がないと思えるようになってきた。つまり、面倒になったのだ。

颯真はそんなアリアを見てため息をつく、布巾を手取る。

布巾を渡して拭くように指示することが案外面倒なことに気がついた颯真は、アリアの左側から右手を伸ばして、口元を「ごしごし」と拭く。

布巾が左へ行けば、アリアの顔も一緒に左へ動く。右へ行けば、アリアの顔も一緒に右へ動く。

拭き取り終わると、アリアはどこか恥ずかしそうに颯真を見上げて、白い歯を見せて笑った。

「えへへ……ありがとう、おじさん」

「いいから汚すな」

「うんっ」

アリアは真剣な表情になって、眉根を寄せると、サンドウィッチを睨み付けた。

もう負けてやるもんか、食べ尽くしてやるという意味の表れだ。

かぶりと噛みつくのも、控えめに。

なるべく汚れないように気をつけながらも、そのおいしさに頬を緩めていた。

新鮮なトマトとレタス、あっさりとしたハムのバランスが素晴らしい。

アリアが思っているよりも、敵は手強いようだった。

それから何度か颯真に口元を拭って貰いつつ、朝食を終える。食器を片付けに厨房へ入る颯真に、アリアは軽い足取りでついていた。

「おじさん、わたしもてつだう！」

「あ？」

颯真は、また面倒なことを言い出したアリアを、胡乱げな表情で眺めた。

自分でやった方が確実に綺麗になる。

だが、アリアが仕事を覚えれば、ぐっと楽になるのも事実。

このまま教育して、働かせれば人件費タダで楽が出来る。

そんな思考に辿り着いた颯真は、左手で口元を隠してにやりと笑った。

少女を調教して売り飛ばそうとしている笑みに見えるが、良いことを考えている訳ではないので悪人面と揶揄されても反論は出来ないだろう。

実際言われたら、殺す気で睨み付けるのだが。

「そうだな……洗ったものを拭いて、置いていけ」

「うんっ！がんばるっ！」

本当に教育するつもりなのか、簡単な仕事から任せていく。大きな背中と小さな背中が、厨房に並ぶ。

その姿は、父の仕事を手伝う娘の、親子の休日のように見えたのだった。

準備中の札をかけて、颯真は店の前に立っていた。

灰色のロングコートに身を包んで看板を睨み付ける姿は、襲撃の場所を調べるテロリストのようだった。

颯真は右手に持っていた三段程度の短い脚立を地面に置くと、昇って看板を取り外した。

脚立から降りて看板を店の壁に立てかけていると、店内からアリアが出てくる。

両手で抱えるには、バケツと布が入っている。

昨日が嘘のように客が来ないが、これはヴァンが昨日に限り“なか”したためだろうと颯真は予想をつけていた。

彼の友人のあの男は、よく突拍子もないことをするのだ。

だから、今日になってしまつと客の入りは悪くなる。

だが、まったく来ないのではなく、そこそこ来るようになっていた。昨日来た客の中で、また足を運ぼうと思つた人間だ。

午前中から昼頃にかけて客の対応をした颯真は、店の看板がかすれ

て読めなくなっていることに、客からの言葉によって漸く気がついた。

ちなみにその客は、颯真に教えた訳ではない。結局颯真を見ると怯えるので、颯真から必死に目を逸らしながらアリアに告げたのだ。別に颯真も、無銭飲食する訳でもなければ、攻撃的な態度はとらない。

ただ、昨日のように慌ただしくないと、つい目に力を入れてしまうだけなのだ。

これを見て颯真は“お茶目だ”などと評価できる人間は、アリアだけだろうが。

颯真は、看板に水をかけて汚れを落とすのをアリアに任せている間にペンキを用意する。

木製の看板に、適当に見える程度に店の名を浮かび上がらせればいいと思つてのことだった。

道の角に位置する喫茶店の左横を通つて、裏手の倉庫へ回り込む。そこで必要な道具をとつて戻つてくると、アリアが看板をこしこしと擦っているところだった。

布に水を含ませて、壁に立てかけられた看板を擦る。

布は両手の平に当てる形で、両手を看板にぐつと押しつけて上下に動かしていた。

子供なので体重をかけても大した力が入らないが、繰り返していく内に綺麗になつていった。

特に手伝ふ必要もないだろうと、颯真は店内から持ってきた椅子に座つて、新聞を広げていた。

子供に任せきりにする辺り、颯真らしい。

綺麗になると、かすれていた文字も少しは浮かび上がってきた。

たった七、八年手入れしなかっただけでこうなるものかと、颯真は嘆息していた。

アリアと二人、軍手を嵌める。

用意したペンキで颯真が文字を直す間、アリアは服とエプロンにペンキが付着しないように気をつけつつ、看板に装飾を加えていく。

文字の横に、白い鳩の羽を加えて満足していた頃には、颯真の方も終わっていた。

今の今まで隠れていた店の名前、緑色の字で綺麗に浮かび上がった店名は“konzert”……協奏曲と名付けられた緑の文字の横には、鳩の羽が可愛らしく並んでいる。

音楽を奏でる“天使”を象徴していると言われれば、納得してしまう、シンプルで綺麗な看板に仕上がった。

颯真はそれを元の位置に戻すと、片付けを始めた。

アリアもそれを手伝って、バケツを持って店内へ行く。

颯真はペンキを戻しに裏手に回った。

そうして店の前に戻ると、颯真はそこに黒い車が止まっていることに気がついた。

四人乗りの乗用車。そ

れが覆面パトカーであると言うことは、颯真は遠目からでも見抜いていた。

経験の賜だ。なんの、とは言わないが。

面倒事が降ってきてそうなことにため息をつきつつ、颯真は店内に入る。

すると、中ではカウンターに男性一人と女性一人が座っていて、そ

の斜め後ろにさらに女性が一人、アリアと連れ立っていた。当のアリアは、また颯真の友達なのだろうと目を輝かせていた。興味があるようだ。

「ずいぶん懐かれているな。颯真」

「村正、あの噂の借りをまず返して貰おうか……？」

やや逆立った黒い髪の男性　村正は、表情を浮かべることなく颯真の濃厚な殺意を受け流して見せた。大物である。

村正の隣にいる女性は、すらりとした体型の女性で、黒いショートヘアのクールビューティーといった風貌だ。

その斜め後ろ、アリアの隣りに立っている女性は、やや小柄で黒髪を三つ編みにした大人しそうな人だった。

この女性だけ、颯真の視線に身体を震わせていた。

よく見れば、目尻がうつすらと潤んでいることが見て取れるだろう。どうやら、慣れていないようだ。

「新木百合君は知っているな？……こっちは」

「あ、新しく“特課”に所属することになりました、波前杏子巡查長ですっ！」

村正の隣りに座る女性　百合が軽く会釈をした。

それに続いて村正が促すと、三つ編みの女性　杏子は、勢いよく綺麗な敬礼をして見せた。

颯真ははぐらかして話を進める村正に不満を抱きながらも、のらりくらりと躲されることはわかりきっていたので、自分も小さく名を告げた。

「源颯真だ。で、何の用だ？」

さっさと話を進めようと、颯真は頭を掻きながら訊ねた。

村正はそんな颯真に頷くと、アリアを一瞥してから颯真に要件を告げる。その仕草で、颯真は村正の要件に感じていた。

「アリア君、と言ったね　彼女を保護する用意が、整った」

対転換者・特殊犯罪対策課　通称“特課”は、シフターに関わる犯罪などの全権を預かる課である。

その課長である香川村正警部が直接動いたと言うことに、颯真はこの深さを感じ取っていた。

それ故に、秘密裏の準備や対策が必要だったのだ。

速達で颯真が送った敵のシフターの情報も、大きく関わっているのだろう。

「おじさん、ほごつてなあに？」

「こいつらがおまえを、安全な場所で守るってことだ」

「え　そ、れって」

村正は、二人のやりとりを聞いて内心で驚いていた。

颯真に無邪気に懐くアリアもさることながら、幼い子供の質問にわかりやすく説明する颯真の姿に、大きく目を見開いていた。

そして、その感情をすぐに仏頂面の内側へ隠く。彼は、あまり自分の表情をさらけ出すのが、好きではなかった。ポリシー、と言い換えても良いだろう。

「ここでお別れだ」

「やだっ！」

淡々と告げる颯真に、アリアは声を荒げた。

泣いたり怒ったりといった表情を見せてこなかったアリアが、初め

て大声と共に微かな涙を見せた。
その様子に、颯真はとくに表情を変えることなく佇んでいた。
村正はそんな颯真の様子に、今度は先ほどよりも小さな驚きを感じていた。颯真が“無表情過ぎる”のだ。何かを、押し隠していると
言わんばかりに。

「我が儘を言うな、村正について行けば」

「おじさんと、いっしょがいいっ！」

颯真は答えない。答えられない自分に、困惑していた。
行けと怒鳴りつけて、拳骨でも落としてやればいい。

だというのに 身体は、動かない。

そんな自分に舌打ちをすると、颯真はため息をついて頭を掻いた。
その腕を、持ち上げて、颯真は結局降ろしてしまった。

「行け」

短く放たれた言葉は、冷たく重い。

その言葉に、アリアは下唇を噛んで、悲壮な表情で眉根を寄せた。

村正は颯真の様子に小さく息を吐くと、アリアの正面に立って、屈んだ。

黒い目にじっと見つめられているアリアの空色は、溢れんばかりの
涙で潤んでいた。

「君の今後のこと、これから先どうするか、それを決めるためにも
一度我々と来て欲しい。君の身分が保障されれば、颯真に要らぬ迷
惑をかけることもない。来てくれるか？」

抑揚はあまりないが、感じる雰囲気は優しく暖かい。
アリアは困惑しながら村正を見て、颯真を見た。
颯真は慥然とした表情で立っていて、アリアからは目を逸らしている。

アリアは俯いて、逡巡する。
結論はすぐに出ようとしていた。
決意は定まらないが、村正が言ったように、颯真に迷惑をかけたくなかった。

迷惑をかけて、嫌われなくなかった。それは 愛情を求める、子供の心理だ。

「いく」

「そう、か 杏子君、百合君、準備を」

村正の言葉に頷くと、二人は車の準備に動いた。
アリアは潤んだ瞳で、はっと顔を上げた。

「おじさん、ふく」

買って貰った服。

少ないけれど暖かい、思い出。

颯真はアリアの言葉に、瞑目して、告げた。

「面倒だ 次にも、“取りに来い”」

「あ うん……うんっ！」

アリアは、左手で目元を拭う。

ごしごしと強く拭ったせいで赤くなってしまいが、そんなことは気にせず力強く笑って見せた。

はつきりと“来い”と言ってくれたことが、たまらなく嬉しかったのだ。

一方颯真は、自分で言った言葉に誰よりも困惑していた。
こんな人間ではない。

自分は泣く子供をいたわれる人間ではないということくらい、誰よりも理解していた。

そんな颯真とアリアを見ていた村正は、彼にしては珍しく、ほんの一瞬だけ口元を綻ばせた。

苛々しているといった風にアリアから目を逸らしてはいるが、右手で頭を搔いていない。

苛立っている時の癖に自分で気がついていない颯真は、そんなところから見抜かれているとは思ってもよらないだろう。

颯真としても、自分は面倒なことに苛立っているつもりだった。だから、それが沸き上がる感情を無意識に隠している……その感情の名前に、気がついていなかったのだ。

カウンターから椅子を引っ張り出すと、颯真は荒々しく腰を下ろした。

木製の椅子が軋む音が、椅子にかけた負担の程度を表していた。足を組んで左手で頬杖をつく、アリアが手を引かれる扉の方へ顔を向ける。

アリアは村正の手から一度離れると、颯真に向かって精一杯の笑みを浮かべる。

先ほどまでの悲壮感がないのは、颯真に会いに来ることができる、これからも、合いに行き続けることが出来ると、先ほどのやりとりで解ったからだ。

「またね、おじさん！」

「さっさと行け」

素っ気なく返す颯真に、アリアは満面の笑みを浮かべる。

村正は、素直ではない颯真に肩を竦めると、アリアの手を引いて行くこうとする。

だが、アリアはそれを笑顔で止めて、待って貰う。まだ颯真に貰っていない言葉があった。

颯真にお願いするときは 根気が、必要なのだ。

「またね！おじさん！」

まだ、返事はない。

ため息をついて目を伏せる颯真と、笑顔を崩そうとしないアリア。その二人の様子に、アリアの隣で佇む村正は、とにかく首をかしげていた。

このやりとりの意味が、解らずに。

「またね！おじさんっ！」

颯真は苛立たしげに小さく舌を打つ。

それでも頭を掻くことなく、ただ目を伏せたままじっとしていた。

「おじさんっ」

またねっ！！！！

「ああ、またな」

とうとう、颯真が折れる。

アリアは満足そうに笑うと、村正の手を掴んだ。村正はため息をついて項垂れる颯真と、太陽のような笑みを浮かべるアリアを、三往復程見比べた。

そして、今度こそ確かな笑みを浮かべて颯真を見た。項垂れる颯真は気がつかないが、村正の表情は、穏やかで優しいものだった。

「颯真　私は、今の颯真の方が好きだぞ」

「何気持ち悪いこと言ってたんだ。さっさと行け」

村正は店内に向けて、もう一度笑みを零す。

今度はしっかりと見ていた颯真は、長い付き合いの中で見せたこともないような村正の笑みに、少しだけ驚いていた。

そしてすぐに、目を逸らす。

村正は部下に見せる仏頂面に表情を切り替えると、今度こそアリアの手を引いて出て行った。

アリアは手を引かれながら、力強く颯真に手を振り続けた。

颯真はひらひらと適当に手を振り返すと、灰皿を引き寄せた。

灰色のロングコートからタバコを取り出すと、口に咥える。

銀のジッポを取り出して手で玩ぶと、それをカウンターに置いた。

どうにも吸う気になれずに、火を点けなかったタバコをしまう。

「らしくねえ」

この後、颯真の口座には多額の報酬が振り込まれるだろう。

たった四日、子守をするだけで稼ぐことが出来た金。

たいして労せず手に入れたのだから、気にせず使ってしまうばいい。

颯真はため息を一つ吐くと、頭をがしがしと掻く。颯真は自分が何に苛立っているのか、わからなかった。

「早いが……まあいい」

椅子から立ち上がると、財布の中身を確認する。

満足するだけ飲めるだろう金額は、財布にしっかりと入っていた。

颯真は戸締まりを確認すると、まだ明るい外に出る。積もった雪が足の下でさくさくと小気味よい音を鳴らせるが、そんなところで喜べる程、若くはない。

大きく息を吐くと、車の轍を踏み越えて、繁華街へ繰り出した。

十

百合が運転する黒い車の中、やや硬めのクッションに身を預けながら、アリアは過ぎ去っていく風景をじっと眺めていた。

村正は助手席に座っていて、アリアは後部座席の左側で、右隣には杏子が座っていた。

アリアはもう泣いたりはしなかった。

「アリアちゃんは、強い子だね」

「つよいの？」

アリアは、微笑む杏子の言葉を聞いて、力こぶを作って見る。

だが、二の腕を触ってみてもぶにぶにと柔らかいままで、そのことに首をかしげた。

眉を寄せて一生懸命力を入れようと頑張っている姿は、微笑ましく可愛らしい。

「そうだよー。アリアちゃんは、強いんだよ」

「つよい……おじさんよりも？」

「うん、そうだよ」

自分にとっての優しい騎士様のようなイメージがある颯真。

アリアは、そんな颯真よりも強いと言われても、解らなかった。

杏子が指すのは肉体的な強さではなかったが、そんなことが解るはずもなく、アリアはただ首をかしげていた。

「課長、前方に人が……」

「……避ける気配はないな。ヒッチハイクにしては怪しいが……無視する訳にもいくまい」

急に車が止まったことに、アリアは首をかしげた。

車の前、十メートルほどのところに、一人の男が立っていた。

その男の服装は、病衣のような簡素な緑色のもので、とても冬の往来に居られるようなものには、思えなかった。

また、妙なのは服装だけではなく、容姿もおかしかった。

丸坊主の頭とやせこけた頬、二メートルを超える身長と、異様に長い手足。

太陽の下よりも夜の帳の下の方がずっと似合う、奇妙な男だった。

「百合君。私が話を聞いてくるから、その間に トランクから私の“雅宗”をとってきてくれないか」

神妙な顔つきで静かに告げる村正に、百合はこくりと頷いた。

その空気にただならぬものを感じて、杏子はアリアを守るように抱き締めた。抱き締められたアリアも、理由はわからないが妙な不快感に襲われて、杏子の服の裾を強く握った。

村正と百合が同時に車を降りる。

村正が前に出て男の視線を自分に集めるように、車を背にした形で歩く。

その間に百合はゆっくりとトランクの方へ行き、極力音を立てないように少しだけ開けた。

そして、トランクが開いていることになるべく気がつかれないように素早く手を入れると、中から竹刀袋を取り出した。

男が百合の方に目を向けている様子は、ない。

「どうかしましたか？こんなところに立っただけでは、危ないですよ」

村正は警戒を怠らないように、周囲をよく注意していた。

雪に覆われたアスファルトは滑りやすいため、足下に気をとられな

いように注意する必要がある。これは、厄介だった。

「
なにか？」

男が、小さく何かを呟いた。

焦点の合っていない黒い瞳孔が、ぼんやりと村正を捉える。
村正はその異様な気配に、警戒心を最大限まで引き上げた。後ろに手を回して、ハンドシグナルを送る。百合は頷くことなく、いつでも懐のホルスターに手をかけられるように、身構えた。

「【左腕部接続・因子転換・承認】」

男の言葉を聞き取ると、村正は自分の後方へ手を伸ばした。
百合がそこへ竹刀袋を投げると、村正はそれを器用に掴み取って自分の正面へ持ってきた。男はそこで初めて、狂気に満ちた笑みを浮かべた。

「【モンキーシフト】」

左腕が、茶色の毛で覆われる。

長く鋭い猿の手が、不意打ち気味に村正を襲う。村正はその一撃を、直感でタイミングを計り、竹刀袋で防いだ。だが、想定していたよりも強い衝撃に身体が少しだけ浮き上がって、二メートル程後ろへはじき飛ばされた。

「シフターか！」

村正は確認するように叫ぶと、竹刀袋から素早く中身を取り出す。
漆黒の鞘の日本刀、それをスーツのベルトに刺すと、素早く抜いた。

「周囲を警戒。仲間がいる危険性があるぞ！」

百合は懐から小さめのリボルバー、ニューナンプと呼ばれる拳銃を抜き取ると、周囲に宙をする。

道幅は車二台が通れる程度で、周囲は寂れた民家ばかり。都市開発で立ち退きがあったため、今この周辺には誰も住んでいない。

心置きなく戦えるが、それは向こうも同じと言うことだ。

シフターの犯罪者でも、正体が広まることは恐れている。だから、ここにさえ来られないようにしたら、敵のシフターも存分に非常識な力を振るうことが出来るのだ。

戦闘を始めた村正の後方で、百合は周囲に動きがないか注意を払う。いつでも発砲することが出来るように、安産装置を外しておく。

普通の生物よりも生命力が高いシフターを抑えるには、実弾を用意するしかないのだ。

百合も特課の一員だけあってシフターだが、彼女は支援が得意なシフターで、直接戦うのは苦手だった。

緊張に息が圧迫されるような、感覚。

そんな感覚に折れる程、経験がない訳ではない。

だが、あまり経験がある方ではない杏子が心配だった。

百合は、どこかで物音が聞こえた気がして、銃を構える。

どこに照準を合わせるか、周囲を見ましていると、足に伝わる振動に驚いて、後方に下がった。

ドンッ

土煙が上がって、アスファルトが砕ける。

出てきたのは、巨大な爪と茶色の腕　モグラのものだった。

「避けたか　特課相手に一筋縄とはいかないなあ」

そう言いながら地面から出てきたのは、小柄なスキンヘッドの男だった。

百合はニューナンプを手に、ゆっくりと間合いを計る。拳銃は、撃てば当たる程簡単なものではない。適当に撃つ訳にも行かず、確実に当てていく必要があった。

跳弾して仲間を傷つけることにでもなったら、下も子も無い。

さらに、襲撃はこれだけでは終わらなかった。

風を切る音に、眉をひそめる。モグラ男から注意を逸らさぬようにしていると、跳んできた何かが車の上に着地した。

七三分けに営業スマイルのサラリーマン。

留置所にいるはずの男　遠藤京次が、蛙の足で跳ね上がって、車に着地したのだ。

シフターに襲われている中、車の中に居続けるのは得策ではない。

自分の戦う手段も減らされてしまうし、爆破でもされたら二人ともそこで終わりだ。

だから杏子は、アリアの手を引いて車外に飛び出した。そして、アリアを背に隠してニューナンプを構えた。

三者三様の状況で、すぐに身動きを取ることが出来ない。

その泥沼に発展しそうな硬直を破ったのは、第四の敵の影だった。

高速で空中から滑空して、誰も捉えられないスピードで、杏子の背

後のアリアを浚う。
あっさりとしフターが入り乱れる空間から浚っていったのは、巨大な鴉だった。

鴉はその足でアリアを掴み取ると、そのまま飛んでいく。
すぐに追いかけてようと村正達も動こうとするが、京次たちはそれを許さなかった。

「くっ……通させて貰うぞ！」

事態は、最悪の方向へと、走っていく。

十

昼間の内から酒を飲むとなると、開いている店は限られてくる。
繁華街の裏道、そこをまっすぐ進んだ暗がりには、営業時間外のため光の消えた、寂しげなネオン。閑散とした場所に佇む一件のバー。
ここは、颯真の友人が経営している店だった。

半地下になっているため、右側から少し階段を下りて、何も言わずに店に入る。

自分の店の時は、準備中に入ってくる客に辟易としているくせに、自分も同じことをしていた。この男は、基本的には自分本位である。洒落た彫金が施されたドアノブは、客の入りが颯真の店ほどではなくとも少ないのだろう、新品のそのように堅くて重い。開ける時も木製のドアが軋む音がして、どこか危うげだった。

「邪魔するぞ」

五人から六人程度しか入れないであろう、狭い店内。カウンター席しかなく、寂れた居酒屋のような雰囲気だった。

カウンターの向こう側に所狭しと並べられた酒類は、洋酒和酒だけでなく紹興酒なども置かれている辺り、節操がない棚だった。

この店のモットーは“来る物拒まず、去る物追わず”……物、つまり酒については、なんでも取り入れて、客に出すのだ。だから“者”ではなく“物”としていた。

「あらん？颯真ちゃんじゃない」

店の奥から、裏声のような甲高い声が聞こえてきた。声の主は酒棚の奥にある扉から、木製の床を軋ませる音と共に入ってきた。

金色の馬模様が輝かしい、銀色の派手な着物。

結い上げたプラチナブロンズは、赤いトンボ玉が不自然に二つ付い

たかんざしでまとめ上げられている。頭の一・五倍ほどの大きさがあつて、妙な迫力がある。

体つきは、一言でいうと……“山”だ。筋骨隆々のがっしりとした肉体は、胸元の双丘をより不自然に演出していた。

顔もまた、大きい。真四角のエラばった顔立ちと、剃りたてなのか青々とした口周り。大きく見開かれた目は、ブルーで、紫色のアイラインが毒々しい。

その割りにぶるぶるとした唇に引かれたルージユが、その人物を“妖怪”のごとく仕上げていた。

「西口、前よりひどくなつてねえか？」

「やあ。エミリーって呼んでチヨウダイな。そ・ー・ま・ちゃん

」

弾ませて出てくる言葉は、声で人を死に追いやるといふ妖怪、鶴のようにおぞましい。

彼　　いや、“彼女”の名前はエミリー＝西口。颯真の旧友である。

「きめえ……いいから酒よこせ」

「もウ、イケズなんだからア」

エミリーはくねくねと腰を動かしながら、見た目に似合わない滑らかな動作で熱爛をつくる。和洋折衷もここまでくると、本人の見た目もあつて、まるで魔界である。

そんなエミリーを、颯真は慣れた様子であしらう。

左手で頬杖をつきながら右手でしっしっしと手を振る動作が、板に付いていた。

エミリーは、しなやかな動作でお猪口に酒を注ぐ。熱い湯気を立たせてお猪口に渡る透明の液体は、颯真の心を癒す程澄んではいなかった。その理由は、水面に映る颯真の顔が波紋で揺らぎ、物悲しそうに歪んで見えたからだろう。

「で、どうしたの？颯真ちゃん」

相変わらず、奇妙な裏声だ。

だがその声は、暖かい。顔さえ直視しなければ、落ち着くことが出来るだろう。

もちろん颯真は、エミリーの顔を直視しようとは、しなかった。賢明である。

「なんでもねえよ」

颯真はそう呟くと、不機嫌そうな自分の顔ごと、熱燗に注がれた酒を飲み干した。

喉を通る熱は心地よく、身体を芯から温める。その熱に身をゆだねてしまえば楽になるのだろうか、颯真はそんな気分になれず、空いたお猪口ただ眺めていた。

「思うようにすれば、いいと思うワ」

見透かしたようなエミリーの言葉に、颯真は苛立たしげに頭を掻いた。

エミリーと颯真は、同じ釜の飯を食べた友人。付き合いが長すぎるのだ。

そのため、表情から、仕草から、颯真の心情を読み取っていた。本

当に女だったら、エミリーは“佳い女”だっただろう。まともならいい男、で済んだのだが。

「俺は思うように生きてるよ。今までも、これからも」

「曲げられた“思うように”は、違うんじゃないかしら？」

間髪入れずに出てくる言葉。

そのタイミングに、やはりエミリーは“男”だと、颯真は小さく苦笑した。

笑えるような心境ではなかったはずなのに、その表情は先ほどまでよりも晴れている。

颯真にとって解決していることは何も無い。

けれど、暗鬱とした気持ちは消えていた。

「解ってるよ。今度こそ………適当にやるさ」

颯真がお猪口を差し出すと、エミリーは穏やかな笑みを浮かべながら注ぐ。

今日は飲もう、そう意気込んで、お猪口を傾けていた。

そんな、落ち着き始めた空気を壊すものがあつた。

最初の購入時から換えていない、機械音。携帯電話の着信音に、颯真は眉をひそめた。

面倒な表情を隠そうともせず、携帯電話を開く。

そこに表示されている名前は、ここに来る前に別れた相手……村正の、ものだった。

「なんだ？」

短く口火を切る。

電話の向こうの村正は、そんな颯真に憔悴した声で要件を告げた。

『

』

「は？お、おい」

『こちらで解決をしたいと思うが、現状では　　っ』

慌ただしく切られた電話。

小首をかしげて目を丸くするエミリーの様子を一瞥することなく、
颯真は苛立たしげに天を仰いだ。

すまない。アリア君が拐かされた。

事態は、大きく変動しようとしていた……。

4th day am 別離（後書き）

次回、第五話を短めに挟んで、スパートです。
そろそろ忙しくなるので、ちょっと時間がかかるかもしれません。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次回も、よろしく願います。

七月十二日、追記

五日目、と構成していた話を見たら、四日目の時間軸だったので
イトル変更。

次回も四日目です。

4 t h d a y p m らしく在るために

緩やかに、意識が浮上する。

最初に感じたのは、冷たいタイルの感触だった。

寒さに震える身体を抱き締めて、丸くなる。どうしてこんなに寒いのか考えて、アリアは勢い良く目を開けた。

「どっ?」

か細い声は、打ちっ放しのコンクリートに反射して、鈍く響いた。薄暗いため、どこにいるかは解らない。最後の記憶は、何かに捕まれて空を飛んだ、その眼下の風景だけだった。

「めがさめたの? だぶるおー、えー」

拙い口調。呂律の未熟さから、幼いことが解る声。

アリアよりも少し低い声がして、アリアは座り込んだ体勢のまま顔を向けた。

完全に闇に閉ざされている訳ではない。薄暗いだけだから、目を凝らせば見ることが出来る。だから、アリアは眼を細めて、必死に姿を見ようと試みた。

闇に溶け込むような、黒い鉄格子。

冷たいタイルとコンクリートの鳥かごの、その奥。

小柄な身長は、アリアとさほど変わらない……年下か同年代。

すくなくとも、年上ではないだろう。声から判断すれば、女の子だ。

無造作に流した漆黒の髪と、病的な程白い肌。その肌を覆うのは、幾重にもベルトを巻かれた、拘束服のような着物だった。

何よりも目を引くのが、少女の目元だった。真っ白な包帯で、ぐるぐる巻きにされた両目。

前が見えるような構造では、なかった。

「だぶる？」

アリアは、自分に向けられたのであるという言葉に反芻した。

その意味がわからず、首をかしげて呻る。こんな状況なのに、未知に対する疑問を解明しようとする姿は、どこか脳天気な様子を少女に見せていた。

「それはあなたのしきべつめいしょうのはずだ。えー、あーるわん、だぶるおー、えー」

識別名称。

少女はアリアに、そう伝えた。

アリアはそれでも意味がわからずに、右手の指をこめかみに当てて、ぐにぐにと押し始めた。だが、飽きっぽいのは子供の特権。

アリアは早々に思考を投げると、今度は目の前の少女に笑いかけた。人と話すときは、まず相手の目をしっかり見る。

それが常識であると知識により知っていたが、目の見えない相手にどうしたらいいか、解らなかった。

だからとりあえず、笑って見せたのだ。

当然ながら、少女にアリアの笑顔は届かない。

だが、急に気配が“柔らかく”なったアリアに、首をかしげていた。感覚が抜け落ちている人間は、補うように他の感覚が優れている。

少女が突出して優れているのは、触覚。

風を肌で感じて気配を読むという、特殊なものだった。

「わたしはアリア」みなもと！あなたは？」

「アリア？　わたしは、えす、けーつー、おーつー、あーる」

少女が名乗ったのは、アリアに告げたとと同様で、識別名称だった。

アリアは少女の名前を呼ぼうとして、口をぱくぱくと動かす。けれどもどう呼んで良いか解らず、腕を組んで首をかしげた。

名前を教えて貰ったのに、呼べないのは心苦しい。

颯真からは、名前を聞いたのに呼んでいないことは、記憶の彼方だ。

「えす、けつおつ？」

アリアが、絞り出すようにそう言った。

その言葉に、少女は戦慄する。

暗がりでも良くわからないが、口を半開きにして固まっていた。

このままアリアを放っておけば、自分はものすごい名前と呼ばれるようになってしまう。少女はそのことに半ば確信して、必死で呼ばせる名前を考え始めた。

「えーつ、えるす、　　あるつはいまー？」

「さくら、とよべばいい」

男性の名前、それも、その言葉は大抵痴呆症の人に用いられる。

少女はアリアと同様、微妙に偏った知識で、その単語をぼけてしまったお婆さんのことだと認識していた。

そこで、自分の識別名称である“S・K2・02・R”をもじって、アリアに告げたのだ。

「うんっ、よろしくね、さくらちゃん！」

「べつに、なかよくなるひつようはないし、なれない」

明るく笑うアリアを、さくらはそう言っただけで冷酷に切り捨てた。

アリアはそれに眉根を寄せて、不満げに頬を膨らませた。初めて出会う同年代の子供と、友達になりたいのだ。

颯真とも、仲良くなれた。

だから、諦めてたまるかと、アリアは小さく胸を張った。

「なれるよっ」

「なれないよ　　だってあなた、はかせのものだもの」

さくらが言った“博士”という単語。

その言葉を聞いたとき、アリアの頭に緩やかな頭痛が走った。

それに伴い、原因を思い出そうとすると頭痛がひどくなり、アリアは頭を抱えてぎゅっとうと目を瞑った。

ここには、ならない。

そんな感情だけが、記憶のない胸の裡で渦巻いていた。

「もうすぐあなたは、はかせの“いちぶ”になる」

「いちぶ？」

さくらの言葉の意味がわからない。

解らないはずなのに、アリアは沸き上がる不快感に肩を震わせていた。

聞いたことがないはずなのに、前にも言われたような感覚。思い出せない安心感と、言いようのない喪失感。

そして、理由の見えない、恐怖心。

気がつくと、アリアは己の両腕で、自身の身体を抱き締めていた。震えが、治まるようにと、ただ必死に。

「わからない？すべての“しがらみ”や“つながり”をすてて、こうしようなそんざいに生まれかわるということだよ。いずれ、わたし“も”」

所々解らない単語があつたが、そんな中でも理解できたことがあつた。

アリアはそれに気がついて、愕然とした。

空色の双眸をいっばいに開いて、朱色の唇を震わせる。

両手は力なく下がり、元々白かった肌は血の気が引いたように青白くなっていた。

「もう おじさんに、あえない？」

「おじさん？……いままであなたをあずかっていたというひと？そう、たしか」

さくらは顎に手を当てると、思案げな表情を見せた。

自分の中の記憶を探り当てるように、少しだけ時間を置く。

すると、すぐに思い至ったのか、手を叩いて口を開いた。

「はかせのいつていた“けっかんひん”か。もう、かれにはあえないよ」

アリアは答えない。

信じたくないという両耳に手のひらを当てて、潤んだ目を瞑り首を振る。

さくらはそんなアリアの気配を感じ取ってもなお、淡々としていた。

「より“こうしようなそんなさい”になれる、はかせはそういつていた。だから、そこでまっつていなさい。もうすぐ、“ささいなこと”は、きにならなくなるのだから」

踵を返して去っていくさくら。目が見えないというのに、その歩みに躊躇や不安はない。

そんなさくらの後ろで、アリアはただ震えていた。

安全靴のような硬い靴で廊下を叩く音が、遠ざかる。

やがて反響することもなく音が消え去るのを感じ取ると、アリアは顔を上げた。

その瞳に、先ほどまでの涙はなく、その身体に、先ほどまでの震えはない。

アリアは、颯真から教わったことがある。

言葉にして教えて貰ったのではない。生活の中で、颯真がアリアに教え続けたこと。

それは、通したい意志があるのなら、決して退いてはならない。叶えたい願いがあるなら、決して諦めてはならないということだった。

我が儘を言えば、颯真は露骨に嫌な顔をした。

荒々しく舌を打つこともあれば、青筋を立てて睨み付けることもあった。

かっこいいとは思いつつも、アリアはまだ子供。強靱な握力で机を軋ませるところを見せられたら、さすがに“ひやり”とすることもある。

それでも立ち向かえば、願いも意志も、通るのだ。
傲慢な考えかも知れない。

それでも、それが間違ったことならば、颯真は止めてくれる。
怖い顔で、拳骨を落とすのだ。

アリアはそこまで複雑に考えられている訳では、ないだろう。
せいぜい、“頑張ればなんとかなる”程度かも知れない。

だが、アリアの胸の裡を見るのなら、確かにアリアはそう“思って
”いた。

大好きな“おじさん”が、身体を張って教えてくれたこと。
アリアはそれを守るために、堅い鉄格子を睨み付けた。

鉄格子に切れ目のようなものは見えない。

けれど、それを“些細なこと”だと頭から追い出して、両手を鉄格
子に向けた。

思い浮かべるのは、敵がよく言っていた、魔法のような言葉。
その言葉を思い浮かべながら、大きく息を吸った。

「【わんぶせつぞく・いんしてんかん・しょうにん】」

思い出しながら、言葉を紡ぐ。

その後何を言えればいいか解らず、結局中途半端に続けた。

「【しふと】」

だが、それだけで意味が通じたのか、鈍い音と共に鉄格子が上がっ
ていく。

やがて鉄格子の全てが天井に飲み込まれたことを確認すると、アリ
アは大きく息を吐いた。

「やったっ」

アリアは小声でガッツポーズをとると、眼を細めて笑った。そしてすぐに真剣な表情を作ると、牢から出てひたすら進む。

道は解らないが、歩みを止めるよりもずっとマシだ。

アリアの胸に宿るのは、颯真が自分に教えてくれた“意志”の数々。それを無駄にしないためにも、アリアはひたすら前を向いていた。

これを一言で表すのなら、そう　　盛大な“勘違い”である。

遠く離れた場所で、颯真のなけなしの良心が、きりきりと痛んだ。

S H I F T

夕暮れの中、村正は黒の覆面パトカーにもたれかかった。

黒のスーツは所々破れて、左肩は赤黒く染まっていた。

荒い息を整えるように、銀色のシンプルな携帯電話を取り出すと、短縮番号に指を置く。

だが、そのボタンを押すことが出来ずに、顔を曇らせていた。

一瞬の隙を突かれてアリアを拐かされただけではなく、モグラのシフターの攪乱により、猿のシフターの攻撃に対応しきれなかった。その結果が、肩口の怪我と状況の停滞だった。

百合と杏子の攪乱によってモグラと蛙のシフターから二人を逃がすことが出来たのは、曙光だろう。

真冬の気温が車体を冷やし、もたれかかっている村正の背中から、熱を奪っていく。

寒さに震える場面なのかも知れないが、怪我の痛みが麻痺するため、この冷たさが今だけはありがたかった。

今、車の周りにいるのは、村正のみ。

猿のシフターがどこかに隠れているため、気は抜けない。百合と杏子の二人は、既に本部に向かわせてある。だから、応援が来るまでは、どうにか持ちこたえないとならなかった。

「知らぬところで失わせる訳には、いかんか」

村正は、そう言うつと自嘲する様に顔を歪めた。

出来れば、颯真には“力”を使って欲しくない。だが、粗雑で、乱暴者で、案外優しいところのある友人を傷つけたくは無かった。大人の大人に、と言われるかも知れないが、村正にとって颯真は、数少ない友人なのだ。

短縮ボタンを、押す。

すると、コールが六度程繰り返されて、颯真が出た。

「すまない。アリア君が拐かされた」

『は？お、おい』

「こちらで解決したいと思うが、現状では　　っ」

会話の最中に、何かが飛来する音を聞きつけて、村正は左に首を曲げる。

すると、高速で飛んできた石が、携帯電話を粉々に砕いた。

破片から顔を庇いながら左に飛ぶと、拳大の石が飛来して、車体を凹ませた。

村正は警視庁御用達の特殊鋼鉄製の日本刀　愛刀・雅宗　を構える。

左足を引いて右足を半歩前に出し、鞘に収めたまま左の腰に日本刀を添える。

俗に謂う、居合抜きの型だった。

耳を澄ませて、獲物を捕らえる。

風切り音から方角を捉えて、肌を感じる独特な“威圧感”から位置を特定する。

「っ」

煌めきたる銀刃が、石を斬って砕いた。
夕暮れの陽光を吸い取り、茜色を宿す銀刃が、右側に流れた。
だが銀刃はそれだけでは止まらない。
返す刃で、左側に滑らかなに流れる。

「二つ」

更に砕かれた石。

割れた石が村正の足下に転がり、ただ小石が積まれていく。
その様子は、賽の河原に積まれる石の山の様だった。

「三つ」

三つ、四つ、五つ。

六つ、七つ、八つ、九つ。

不意を打たれた訳ではなく、ただ打ち克てばいい。

その状況で敗退するほど、彼は弱くはない。

むしろこの状況こそ、村正が一番力を発揮できるのだ。

村正としては、百日手は好ましくない。

だがそこは、村正の相手がこらえ性のない性格だったことが幸いした。

物陰から、毛むくじやらの両腕を持った長身瘦躯の影が、ぬうっと現われた。

いつの間にか右腕も転換している辺りで、彼の奇立ちがわかる。

「何故」

男は、小さく呟いた。

口をほとんど動かさず、喉からひねり出すようなくぐもった声。
何故先ほどまでよりも強いのか、何故まだ生きているのか、そんな、
暗い声。

「私としたことが、忘れていたよ」

そんな男に、村正は雅宗を鞘に収めながら、そう言った。
構えは未だに、居合いの型を崩していない。

「警察病院から抜け出して来られたのは、モグラ男のおかげか？
殺人狂、津田友也」

男 友也は答えない。
ただその目は、泥のように濁っていた。

「見せてくれ」

通り魔殺人犯として逮捕され、そのまま警察病院に入院させられた
異常者。

六年前の事件のことだったため、村正も今の今まで思い出せずに
いた。

おそらく、入院中にシフターとして覚醒したのだろう。

「犯行の動機は “潰えるところが見たい” だったか？」

友也は、顔を歪めた。

笑みの中に浮かぶものは、期待という名の欲望だった。

「【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

濁りきつた声は、時折ひどく高い。金属を擦り合わせたのような不快音が、一瞬にしてその場を支配する。

村正は少しだけ鞘から刃を抜くと、それを強く納めた。

「【モンキーアウト】」

キーンッ

そして、その暗く濁った声を　　鍛えた鉄が放つ、澄んだ音が
かき消した。

友也の身体が膨張し、全身が毛むくじやらの怪物へと変態していく。
両腕は丸太のように太く、地面に付く程長い。

茶色い毛皮の下は傍目からでも解る程引き締まっっていて、目は真っ赤に充血していた。

全長二メートル強はくだらない、欲望から顔面を紅潮させた、巨大な猿。

それが友也の、転換因子の力だった。

『見せる』

友也がそう口を開く。それと同時に、その姿がかき消えた。

腕で地面を掴んで走る、猿という動物独特の四足走行。

丸太のように太く筋肉の詰まった腕は、人間の目では捕らえられない程に友也の身体を加速させていた。

「ぬうっ！」

ガギンッ

金属が碎ける、甲高い音。

村正は持ち前の動体視力と直感で、頭上に刀を持ってきて盾にした。たったそれだけで、雅宗は鞘ごと叩き折られた。それだけではなく、金属片が村正の額を斬り裂き、白い雪に真紅の斑を散らせた。

「まだ」

ひゅう、と息を吐く音と共に、友也の腕が迫る。

村正はそれを半ば地面に転がるようにして避けた。

腹部と額の怪我がずきりと痛むが、村正はそれを顔に出さない。戦闘において、弱みを見せると言うことは、得策ではない。だから、ポーカーフェイスを貫いて、無表情で睨んで見せた。

「それじゃない」

「知らんな」

村正は、友也の顔面に向かって、折れた日本刀の柄を投げた。

生物は、基本的に“目”に対する攻撃に過敏に反応する。

友也もそれは例外ではなく、村正に向かって伸ばした右腕を使って、大きさに弾いた。

その一瞬の隙を突いて、村正は大きく後ろに飛んだ。

「……なんのツモリだ」

「見てわからんか？ 居合いだ」

村正は、刀を失っているのにも関わらず、居合いの構えを作る。当然その腕の中に、銀の刃は存在しない。

「【右腕部接続・因子転換・承認】」

『今更、ムダなコとヲ!』

村正と友也の間合いは、奇しくも最初に退治したときと同じ、十メートル程だった。

友也は一足飛びで五メートルの間合いを詰めて、更にもう一步踏み出そうと左腕で少し前側の地面を掴んだ。だがそれよりも、村正の方が僅かに早い。

キンッ

『あれ?』

短い音が、友也の耳に届く。

動こうとしない自分の身体を見下ろすと、茶色の毛皮を縦に走る裂傷があった。

傷が出来たことから、遅れて鮮血が舞う。

やがて感じてきた痛みに襲われる中、目にしたのは振り抜かれた村正の“右腕”だった。

身長よりも長く伸びる、鎌。

緑色の甲殻に覆われた、銀の刃。

「【マンティスシフト】」

切り札として村正が温存しておいた力。

それを見抜くことが出来なかった友也は、真紅の雪に埋もれながら、視界を閉ざした。

「ふう……まずは合流せねば、な」

そう言いながらも、膝をつく。

ぼろぼろの車体に縋り付くように、村正は息を荒くする。

ここにきて疲れが出たのだろう。

村正はなるべく早く回復するように、外よりも少しだけ暖かい車内
に乗り込むのだった。

十

バーの席に座ったまま、颯真は切れた電話を睨み付けていた。

物に当たっても仕方がないのは解っているし、連絡が取れなくなる
ことは困る。

だから握りつぶしていないだけで、心境としてはぎりぎりだった。

何故自分が苛立っているのか。

それをそろそろ認めなくてはならないような気がして、颯真はがし
がしと頭を搔く。

再びお猪口に満たされた酒を飲み干しても、心地よい熱は感じない。
こんな気分で飲んだ酒が、旨いはずもなかった。

「行つてきなさいナ」

そんな颯真に、エミリーは薄く微笑みながら、そう言った。その笑顔は、慈愛に満ちていた。あらゆる意味で怖い、気にしてはならない。

「うじうじするの、嫌いでしょウ？」

続けて放たれた言葉に、颯真は肩を落とした。

落胆ではない。ただ、力を抜いて腕をだらんと下げたのだ。カウンターに手を置いて、ゆっくりと立ち上がる。

その大きな背中に翳りはなく、唯我独尊の空気を醸し出していた。

「フフ、心配なのネ」

「煩わしいものを放っておくと、酒がまずくなる
それだけだ」

灰色のコートを翻し、一直線に出口へ歩く。

それからもう、振り返りはしなかった。

彼は正義の味方ではない。

だから、歩く先は、温かな陽光ではなく、冷やかな宵闇だ。

大義名分など必要ない。

傲慢に、未だ自分の所有物のようなもの、と断じている少女を浚いに行くのだ。

「素直じゃないンだから。もうっ」

エミリーは出したお猪口を片付けながら、そうぼやく。

そして、ふと気がついた。

「颯真ちゃん お代は？」

追いかけられる空気でもなく、エミリーはすっかり調子が戻った颯真の様子を思い出して、大きなため息をつくのだった。

4 t h d a y p m らしく在るために（後書き）

当初は一日一話で七話構成だったので、長引く話があったので増えます。

けれど、基本的に一週間の出来事、という扱いでお話が進んでいきます。

ご意見ご感想のほど、お持ちしております。

それでは、ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次回も、よろしく願います。

5th day 奪還作戦スタート

眠ることを知らない夜の街は、煌びやかなネオンと客寄せのホスト、ホステス達で飾られていた。

誰も彼もが仕事終わりの夜の街に、安寧と安息を求めて彷徨い歩く。真冬の寒空の下、家族を持たない人間は、こうして暖を得ようとしているのだ。

厚い化粧と金銀宝石の数々で装飾された女が、客を得ようと通りかかった男に近づく。

すらりと高い身長と、風を切って進む堂々とした姿。

その様子は、女をして声をかけたいと思わせるのには充分だった。

「ねえ、お兄さん。ちょっと遊んで ひっ」

夜の蝶を思わせる、派手でしなやかな動きで、男の背に声をかけた。男はその声に歩みを止めると、首だけ傾けて女を見る。

たった、それだけ。

それだけの動作で、女は息を呑んだ。

刃のように鋭く伶俐な視線。

肩越しにまっすぐと放たれたその視線は、仕事柄“その手の人間”の相手にも慣れていた女を、竦ませた。

飢えた猛獣を思わせるその視線は、女の心を容易に貫く。

女は小さく悲鳴を上げると、腰を抜かしたのかその場でアスファルトに座り込む。

何があるうと他者に感心なく、かつ喧嘩が始まるとはやし立てる夜の住人達が、その身体を固まらせて成り行きを見ていた。

ここは他国よりもずっと治安が良い国、日本だ。
なのに、男は気まぐれに懐から拳銃を引き抜いて女を撃ち殺してしまいいそうなの、そんな威圧感があった。

呼吸も忘れる程の圧迫感の中、ついに女は泡を吹いて倒れた。
同じ店の仲間が駆け寄り、その女達は勇敢にも男に立ちふさがっていた。

男はその様子を欠片も気にすることはなく、前を向いて歩き出した。それを眺めていた街の住人達は、安心したように息を吐くと、再び行動を開始させた。

割れる人垣を威風堂々と突き進む男　颯真は、女のことなど既に忘れて、目的の場所へ向かって歩いていった。

黒塗りの携帯電話をポケットから取り出すと、短縮ボタンを押す。友人が少ないため、ワンタッチの登録も楽だった。

「俺だ。アリア、遠藤京次、蛙のシフター……これに関わることを全部調べておいてくれ」

『え？そ、颯真？』

「頼んだぞ」

情報屋である友人のヴィヴィアンに頼むと、電話の向こう側から困惑を滲ませた声が颯真に届いた。

颯真は自分の要件だけさっさと伝えたと、別の場所へも電話をしていく。

自分の持てる限りの人脈を利用するための電話だったのだ。

そして、今向かっているのも、その中の一人の場所。
ネオン街を外れた寂れた時計屋を視界に納めると、颯真は躊躇いな
くその店へ、まっすぐと歩くのだった。

SHIFT

大きな磨りガラスの嵌められた木製の扉。
その銀色のドアノブを回すと、甲高い金属音が颯真の耳に響いた。

こちらもエミリーの店と同様に、人が来ていないのか、さび付いた
扉は重い。

だが、特に抵抗を感じることもなく開くことが出来た。

実は家主は、この正面の入り口を使わなくなって久しく、蝶番が動かなくなっていたので放置していたのだが、颯真の筋力で開けられないはずもなく、抵抗むなしく開いたのだ。

扉の向こうは、薄暗い。

大きな古時計が針を回す音だけが、チクタクと狭い部屋に響く。壁に掛けられたいくつものアンティーク時計は、その活動を停止させている物も少なくはない。だが、時間がずれている物は一つもなく、ぴつたりと同じ時間を刻み続けていた。

「工房か」

颯真はぐるりと見回すと、そう呟いた。

予想が付いていたためか、その声に苛立ちはない。

まっすぐと奥へ進むと、家主に声をかけてみるという仕草など見せず、当然のようにカウンターの奥へ入る。

そこで再び颯真に軽い抵抗を見せる扉を開くと、そこには四畳半の何もない部屋があった。

颯真のすぐ正面にも扉があり、こちらが家主が使っている裏口だ。

颯真は部屋の端まで歩き、足下のタイルを見る。紺色のタイルだ。タイルの窪みを見つけると、迷うことなく指をかけて、そのまま引きはがした。

するとそこには一から九までの数字が並んでいて、それはさながら金庫のようにも見えた。

入れる数字は、一九九九 七 七。

ノストラダムスの預言が的中した日だ。

それを打ち込むと、番号横の赤いボタンを押す。さらに二秒以内に青いボタンを押した。これでロックは解除される。

颯真はその手段に、面倒な表情を隠しもせずのため息をついた。自分が頼み事をする立場だと言うことを、忘れている。

ロックが解除されると、部屋の中央が横へ開いていく。その動作に音はなく、静かに開いた。

中には階段があり、地下に続いている。そう、隠し通路である。

颯真は灰色のコートを翻すと、仏頂面を崩さないまま階段を下りる。薄暗い階段だが、迷うことなく下りる。

この男、夜目が非常に効くという、悪人によく似合いそうなスキルを持っていた。

階段を下りきると、今度は横開きの扉があった。金属が重ねられたそこへ指をかけると、右にスライドさせて開け放つ。

するとそこには、大広間があった。

時計屋のスペース以上の空間を使っているが、無断使用だろう。颯真の友人ならやりかねない。

どうみてもがらくたにしか見えない機械や、無頓着に置かれた薬品類。

白い蛍光灯が光る天井は高く、ここが二階分のスペースをとって

ることが解った。

ウェイター服に似合ったローファーが、アスファルトを打ち鳴らす。カツカツと音を立てて奥まで歩いていくと、作業机の上で何かをいじくり回す男の影が見えた。

所々にシミや汚れの目立つ、よれよれのワイシャツに、漂白剤が何かで色落ちしてしまっている黒のズボン。

髪はぼさぼさで、手入れをしているようには見えなかった。

「和彦」

颯真が小さく彼の名を呼ぶ。

すると、その声に反応して、男は小さく肩を跳ねさせた。

手に持っていたパイプのような金属を落しかけて慌てて拾うと、緩やかに振り返った。

健康的な生活を送っていないのだろう、肌は病弱かと思う程に白い。

その顔は煤だらけで、造形は解らない。

また、顔半分を隠すぐるぐるの瓶底眼鏡が、彼の人相をより不明瞭なものにしていた。

彼 和彦は、振り向いた先に颯真が居ることを見ると、満面の笑みを浮かべた。

両手を広げて歓喜を表している辺り、感情表現がおおざっぱな性格なのだろう。

「颯真君っ！君から来てくれるなんて、嬉しいよ！」

足をもつれさせながら、走り寄る。

途中で何度も転びそうになっている辺りで、日頃の運動不足が伺え

る。

「力を貸してくれ」

「へっ?……何かあった、みたいだね」

言葉こそ頼んでいるが、口調に懇願の感情は見あたらない。当然頭を下げている訳ではない。慇懃無礼にもほどがある。

それでも和彦は、颯真の口調から真剣な物を感じ取って頷いた。彼も颯真の友人だ。これくらいのは、何度もあった。

「君は僕の恩人だ。そうでなくても、友達だ。力くらい、いくらでも貸すよ」

和彦はそう言うと、力強く笑った。

颯真の友人を続けて、もうすぐ十年。

颯真のことは、理解できるつもりだった。

そしてそれは、間違いではなかった。

「ああ、頼む」

彼がこうして重ねて言うのは、本当に珍しい。

和彦はその言葉に口を開いて驚くと、すぐに嬉しそうに笑った。

常に独りで臨む友人が、こうして自分を頼ってくれる。

そのことが、和彦は何よりも嬉しかった。

黒の安全靴をかちやかちやと鳴らしてアスファルトを走る。

先ほどまでよりもずっと動きが良くて、今度は転びそうになることもなく奥の扉へ入っていった。

上の土地から考えると、その場所は先ほど颯真に睨まれて卒倒した

女の居るクラブだ。

おそらく店の従業員は誰も、地下にこんな怪しげな空間が広がっているとは考えてもいないことだろう。

少しすると、和彦は台車に棚を乗せて、戻ってきた。

短い距離を引いてきただけなのに、もう額に玉の汗をかいていた。

息も荒く、このまま倒れてしまいそうなほどふらふらだった。

「で？」

颯真は、そんな和彦を労ったりはしない。

この男が“頼む”と口にしただけでも奇跡なのだ。これ以上は望めないだろう。

「ふっふっふっ……まずは、これだ！」

白い棚の一番下の引き出しを開ける。

そしてそこから、颯真の履いているものと変わりがないように見える、ローファーを取り出した。和彦はそれを、両手で抱えるように持っていた。重いのだ。

「特殊合金仕込みのローファー型安全靴“必殺君”だよ！」

颯真は胸を張る和彦を一瞥すると、無言でそれを受け取った。

そのまま履いていたローファーと換えて、履き心地を確かめる。

「悪くねえな」

「ありがとう！さあーって、次は」

今度は中段の引き出しを開ける。

そこから一メートル近くある、銀色の大きな箱を引つ張り出した。棚の横幅一杯まであるので、何故棚に入れたのかわからない。よほど重いのか、持っているだけでふらふらとしている。

「こ、これが」

それを辛うじて持ち上げると、近くの作業机の上に置いた。鈍い音がしている辺りで、和彦の体力に関係なく重い物だと言うことが解った。

和彦がその箱を開ける。

するとそこには、一丁の拳銃が入っていた。

回転弾倉、リボルバー式の銀色の銃だ。

「S & amp ; WM 500 五十口径の弾丸を発射する世界最強の化け物銃。長さは四十センチを越え重量も十キロはくだらない。装填数は五発でクイックローダー付きだよ。本来は一発撃てば鉛が銃身に張り付いて威力が低下するんだけどそこは僕が手を加えて更に」

「いいからよこせ」

蘊蓄を披露し始めた和彦から、その銃をもぎ取る。

片手で悠々と扱っている辺りで、颯真がいかに怪力か、その片鱗が見て取れた。

「試し打ちは？」

「あつち」

躊躇無く壁を指さして、和彦は耳を塞いだ。

この地下室は、なんともそんな実験が行われてきたのだろう。

和彦が指した壁は、一カ所だけ妙に頑丈にしてあって、ぼこぼこの鉄板が取り付けられている。

颯真は拳銃を片手で構える。

左手はコートのポケットに突っ込んでいて、その余裕を感じ取れる。

ガウンッ！

引き金を引くと撃鉄が持ち上がり、弾倉を回しながら撃ち下ろされる。

強力なマズルフラッシュと硝煙が持ち上がり、颯真の視線の先では壁が“抉れて”いた。

ゾウを撃ち殺すのにしか使えないと言われているだけあって、その威力は圧巻の一言に尽きる。

颯真はそれを何食わぬ顔で、五発全弾撃ち切って見せた。

「それ、三発撃てば手から痺れが取れなくなって、五発で骨折するって謂われてるんだけど……さすがだね、颯真君」

「たいしたことねえな」

そう言つてのけるのは、颯真くらいなものだろう。

使用者の安全をまったく考えていないと説明書に書かれるような銃を、軽々と使いこなしていた。

もっとも、狙いはばらばらで、命中精度は低いようだったが。

和彦は満足そうな颯真の様子に小さく笑うと、今度は棚の上段、ガラス戸を開けた。

そこから銀色の懐中時計を手に取ると、眉根を寄せながら、それを眺めて逡巡する。

だが、すぐに小さく首を振ると、和彦はどこか寂しそうに笑った。

「颯真君、これ」

「あ？……なんだ、これ？」

懐中時計を掲げながら首を捻る颯真に、和彦は説明をする。

そのために、この場に引き留めなくなる衝動を、抑えながら。

「それは警察に依頼されて作った品でね、完成品第一号さ。用途は簡単、服を一セット収納することだよ。あらかじめ、颯真君の好きそうなウェイター服を入れておいたよ」

颯真はここにもふらりと来て、飲んで泊まって帰ることがある。

そのため、自分の着替えをここに置いていたのだ。

それを一セット、和彦は懐中時計型収納装置の中に入れていたのだ。

シフターの能力、その全てを使えば服がダメになる。

そんなことで躊躇する颯真ではないが、人目に付かないために変身したままでもいることもあるだろう。

使わせたくないが、そう言って使わない性格ではない。

だからせめて使用時間を短くしようという、和彦の悪あがきのような、抵抗だった。

颯真はその意図を読み取ったのか、皮肉下に小さく笑った。

「ありがとうよ」

「うん　気をつけてね、颯真君。僕も妹も、君のことが心配なんだ」

「ハッ
」

真剣な顔でそう言う和彦を、颯真は鼻で笑った。
そして、コートを翻して背中を見せた。

「誰に向かって、言ってるやがる」

背中で語る、大きな自信。

それを見て、和彦は顔綻ばせた。

「そうだね。うん……そうだ」

颯真はコートの裏側に拳銃をしまい、ポケットに弾丸をありったけ詰め込んだ。

そして、懐中時計をズボンのポケットに放り込むと、大きく歩き出した。

その背中に、迷いも気負いもなく。

ただ、堂々たる雰囲気だけが、漂っていた。

「さて、と　僕は僕に、出来ることをしようか」

和彦は、颯真を見送るとそう呟いた。

そして、颯真に渡した懐中時計よりも一回り大きいケース、試作品の収納装置を持って、颯真からは見えない位置にあったモニターを見る。

それは、建物周辺の監視カメラの映像だった。

颯真に気がつかれないように、和彦も外へ出る。
彼のために出来ることは、まだ残っているのだ。

人々の喧噪が響く、繁華街。

そのビルの一つの屋上で、遠藤京次はほくそ笑む。

冷たい風に晒されているが、そんなものは気にならない。
名誉挽回の機会が、転がり込んできたのだ。

その自分の幸運に、京次は舌なめずりをした。

まんと女性警察官を取り逃がし、特に敵を見つけられる訳でもなく、京次は手ぶらで帰ることも出来ない。と繁華街を彷徨っていた。

そこで偶然、一番邪魔になりそうな男　　颯真を見つけたのだ。

建物に入っていく後ろ姿を見送り、出てきたところを襲う。

そのため、こうしてビルの屋上で待ち伏せしていたのだ。

ここならば、人気がないところに入るまで、見張ることができるのだ。

「出てきましたね……クックッ」

前回は、油断があった。
だが今回は、それが無い。

颯真が進んでいく先を、じっと見る。

なにやら携帯電話で誰かと会話をすると、表通りを外れていった。

これで、チエツクメイト。

本気な上に奇襲なのだ。

間違いなくその一撃は、颯真を轢殺してみせるだろう。

「【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

「【フロッグアウト】」

スーツが破けて、紺色のネクタイのみが残る。

白と緑のコントラストに黒い斑。

油でぬめつと、てかった身体。

黄色い瞳孔に口から垂れる真っ赤な舌。

二メートルはあるだろう巨大な蛙が、ビルの屋上に鎮座していた。

『この間の借りは、返して貰いますよ』

「そういう訳にも、いかないんだよね」

『っ！』

耳に響く声に、京次は跳び上がって身体ごと振り向いた。

屋上のドアから入ってきたのだろう。

ぼさぼさの髪に瓶底眼鏡の男　和彦が、そこに立って京次を見ていた。

『誰でしょうか？』

「扇和彦、科学者」

簡潔に名乗る。

どこか抜けたような雰囲気はそこになく、冷徹な空気さえ醸し出していた。

和彦は収納装置を地面に置くと、京次に一歩踏み出した。京次はそれだけで言いしれぬ不安を感じて、一歩下がる。

「へえ？ 野生の勘、かな」

『な、なんですか、あなたは』

ただの人間に、シフターである彼がこうも怯えることはない。相手がシフターだったとしても、同様だ。

京次は自分の力に自信を持っている。

油断さえしなければ、負けることはないだろうという自信だ。

全身を転換させれば、シフターでも捉えられないスピードで跳ね回ることが出来る。

更にガマの油で加速させれば、大抵の敵は屠ることが出来るだろう。

そんな自信があるのにも関わらず、京次は一步退いていた。

だがそんな自分でもわからないような警戒心に、京次は屈しない。

目の前の男を轢き殺してやるのだと、前屈みになって飛びかかる体勢をとった。

「あーあ……野生の勘って、大切だよ？」

和彦はそういうと、肩を震わせて笑う。
そして、眼鏡を外して、放り投げた。
目に垂れかかる前髪で目元を見ることは出来ない。

だがその雰囲気は、明らかに変わっていた。

「【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

京次は、和彦に変身させることを恐れた。

だがそれは手遅れで　京次は最悪のタイミングで飛びかかることになる。

「【コブラアウト】」

身体がブラウンの鱗に覆われて、手も足もなくただまっすぐと伸び上がる。

金色の瞳孔は縦に割れていて、時折真つ赤な舌がちらちらと見えていた。

これが和彦の転換因子。

立ち上がれば、身の丈三メートルを超える巨大な蛇。

コブラの因子を持つシフターは、丁度飛び込んで来た京次を絡め取る。

嫌な予感がした時点で、京次は逃げれば良かったのだ。
だがそれは叶わず、蛇に睨まれた蛙は締め上げられる。

『あがががが……げふっ』

短い断末魔。

それとともに、京次は身体から力が抜けたように動かなくなる。死んだ訳ではなく、締め上げられて気を失ったのだ。

和彦はするすると京次から離れると、長い舌でケースをたぐり寄せた。

そして、変身を解いて、すぐにケースから出した替えの服に着替える。

「気をつけてね、颯真君」

和彦はそう呟くと、携帯電話を取り出した。

「もしもし、警察ですか？　ビルに、全裸の男が……」

社会的に地位を失うだろう京次を一瞥すると、和彦は屋上から去る。変態に仕立て上げて警察に通報する辺り、彼もやはり颯真の友達らしい人だった。

和彦のビルから出た颯真は、人混みに苛立ちながら歩いてきた。まずはどこかで、ヴィヴィアンと落ち合って情報を聞き出す。それからでないと、動くことは出来ないだろう。

そうして歩いていると、コートから機械音が鳴る。

携帯電話を取りだし、そこに表示されるヴィヴィアンの名前に、颯真は顔を歪めて笑った。

瞬間、モーゼの十戒の如く人垣が割れる。その笑顔があまりに怖く、人々が退いたのだ。

『今どこにいるの？』

「和彦のところに居た」

『そう、それなら近くまで行くわ。国道の方へ出て頂戴』

「わかった」

簡潔に会話済ませると、表通りを外れて裏通りから国道へ抜けようと歩く。

そして、人目が付かなくなると、コートの裏側に縫い付けられたホルスターから拳銃を引き抜き、背後のビルの屋上に照準を合わせた。

だが、すぐに屋上から大きなコブラが見えて、銃をしまう。

殺気に気がつくという映画の俳優じみた真似をして見せたのだ。

はからずとも、京次は撃ち抜かれて死ぬことなく、締め上げられて社会的に死ぬだけで済んだのだ。

どっちがマシとは言わないが、生きていればいいことだってあるだろう。

颯真は右手で頭を搔くと、再び歩き出す。

今度は先ほどまでよりも早く、大胆に歩く。

背中を守る友人がいるのなら、警戒をする必要はないからだ。

裏通りを抜けて、居酒屋や寂れた映画館を通り越し、線路の下のトンネルを潜る。

やがて人が無くなると、周囲にあまり建物がない、国道に出た。東京と言ってもぎりぎり、この辺りは畑があったりする。

その小さな街灯の下に、オープンカー　ルージュのポルシェが停止した。

左ハンドルの運転席には、ヴィヴィアンが座っている。

さらに、二人乗りのポルシェの、後ろの狭いスペースにはヴァンがいた。

「こつちよ」

「ああ」

颯真はヴァンを一瞥して、すぐに右側に回り込んで座る。

ヴァンにも協力要請はしていたので、おそらく道すがらヴィヴィアンが拾ったのだろう。

「話は移動しながらで、いいわね」

「ああ、そうしてくれ」

一言も喋らないヴァンを気にした様子もなく、話を進める。

ポルシェが発進すると、高級車らしい心地よい揺れが颯真にも伝わる。

金があるのならベンツくらい欲しいなどと、颯真は取り留めもない

ことを考えていた。

だが、それは止めておいた方が良かったらう。周辺住民の精神の平穏的な意味で。

「遠藤京次から周辺を調べてみたら、どうも最近S県の怪しげな研究所に通っていたことが解ったわ」

颯真は話を聞きながら、タバコを取り出す。

店やアリアの前では吸わなくなったが、他人の車なら別だ。特に吸わない理由もない。

「タバコの臭いを服につけて、会いに行くのか」

「ちっ……火、忘れた」

ヴァンの言葉に気がつかないフリをしながら、颯真は言い訳じみたことを言ってタバコを窓から投げた。環境破壊である。

飛んでいくタバコをヴァンが掴み取り、コンビニの袋に入れて車内の端に置いておく。妙に律儀である。

「その研究所の主は、永戸天人っていうんだけど、裏の事情に関わりのある学会で“シフターは世界を支配すべきだ”って嘯いて、追放されたみたいね」

「牢屋にぶち込んでけよ。イカしてんだろ、どう考えても」

颯真がうんざりとさういうと、ヴィヴィアンは「犯罪行為の痕跡はなかった」と苦笑しながら付け加えた。危ないことを言い過ぎたため、取り調べは徹底的にされたようだ。

「で、何年か前からその付近で失踪事件が起こるようになったんだ

けど、疑われても証拠がないから野放しにされてきたみたい。で、
どうやら結婚したみたいなんだけど、近くの街に住む人は、誰も奥
さんを見たことがないそうよ」

この上なく怪しい情報だ。

颯真は禁煙用のパイプを啜えると、苛立たしげに頭を掻く。
そこまで怪しければ、行かない手はない。

「カチコんで確かめればいいか」

違ったらどうしようとは考えない。

ここまでお膳立てされて、違うと言つこともないだろう。

頬に当たる冷たい風を気にすることなく、颯真はバックミラーを見
る。

ヴィヴィアンも気がついているのか、ため息をついて見せた。

「どうする？」

「俺が行こう」

ヴィヴィアンが小さく問いかけると、後ろのヴァンが頷いて見せた。
ポルシェの背後から迫る、一台の黒いバン。

研究所が近づいてきたため山道に入り、周囲に人影は無い。

颯真はコートから拳銃を引き抜くと、振り向きながら狙いをつけた。

「また、そんな化け物銃を用意して……まったく」

運転しながらため息をつくヴィヴィアンを一瞥することもなく、引
き金を引く。

夜の闇に光るマズルフラッシュと、それによって一瞬浮かび上がる硝煙。

至近距離で放たれてはたまらないと、ヴィヴィアンは危険を承知で発射の一瞬だけ両手をハンドルから離して耳を塞いだ。ヴァンも同様に、両手で耳を塞いでいる。

多少ぶれながらも、弾丸はバンのタイヤを貫いた。

スリップを起こす車から人影が飛び出すのを見ると、ヴァンも車から飛んで追いかけた。

シフターならば、無力化しておかないと後顧の憂いとなる。

そして、スリップした車から飛ぶことができるような人間は、シフターだろう。

「頼んだ」

「任せろ」

短い会話。

それだけで全て伝わったのだろう。

それきり振り向くことなく前を向く二人に、ヴィヴィアンは少しだけうらやましそくに微笑んだ。

目指すは山奥。

永戸天人の研究施設である。

空気を揺るがす、爆発音。

夜の闇を彩る真紅に、男は肩を震わせた。

筋肉質で小柄な体型、サングラスをかけたスキンヘッドの男。

彼の名は小山三成といい、天人に二束三文で雇われた小悪党だった。

警察を時間稼ぎのために足止めしろと言われたのに、妙にすばしっこい女性警察官二人をまんまと逃がしてしまった。

小柄で素早いシフターと、移動速度は遅いが飛行能力とこちらの視界を潰してくるシフター。

その二人を京次と協力した上で逃がした。

このままでは報酬も貰えない。

危ない端を渡ったのだから報酬が欲しくて、三成は何か手土産はないかと探していた。

そこで見つけた颯真を遠くからこそそそと尾行して、車に乗り込んだところを見た。

盗んだ車で追いかけて、あわよくば体当たりをしてやろうと迫る…
…そこまでは、順調だった。

それが、たった一発の弾丸で、覆された。

それだけではなく、身軽な男が自分を追いかけているという恐怖感。スリップしたバンが爆発する音で過剰に驚く程、三成は周囲を警戒していた。

よく考えれば、京次達の脱走の手引きなどで報酬は貰えそうなものだが、三成はそれに気がついていなかった。ひとえに、京次の焦りに釣られたのだ。

足場の悪い山を走る。

だがやがて、自分が地中に潜ることが出来ると言つことを思い出して、地面に両膝を付いて頂垂れた。どうやら、そこまで焦っていたようだ。

「【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

「【モールアウト】」

全身をモグラに転換させる。

鋭いかぎ爪のついた両腕と短い足。黒いサングラスがチャームポイントだ。

身長は三成の時と変化が無く、百五十センチあるかないか程度だ。

早速、穴を掘ろうと地面に腕を突き立てる。

だが、それは叶わなかった。

「逃がすとしても、思ったか？」

『ちっ！』

低い声が後ろから聞こえて、思わず跳ぶ。

前方へ宙返りしながら跳ぶ、大きなモグラの姿は、必死さに反してどこかコミカルだ。

いくら素早く掘れると言っても、流石に敵の目の前で穴を掘ることは出来ない。

こうなったら、ヴァンを打ち倒すしかないだろう。

「【腕部・脚部・頭部接続・因子転換・承認】」

構える三成に対して、ヴァンもまた前屈みに構える。その顔面と両腕両足に白い体毛が生えて、形を変えていく。

「【ウルフシフト】」

『狼の、シフターか!』

白い体毛の狼。それが、ヴァンの転換因子だ。

低く呻り声を上げる、その姿。両腕両足に頭部だけ狼になっているため、まるで狼男のよう見えた。

『グルルル ガアッ!』

『嘗めるな!』

飛びかかるヴァンに、三成は叫びながら爪を地面に突き立てた。そして地面の土を、礫のように用いてヴァンを攻撃した。

『ガウッ』

ヴァンは低く呻ると、左にステップをして避ける。

そのまま反復横跳びのように左右に動きながらも、速度を緩めるとなく突進してくる姿は、恐ろしい。

三成はその威圧感に押されて、一歩退いた。

ヴァンは敵の精神が乱れたことをその一歩で読み取ると、速度を上昇させる。

『く、くるなあッ!?!?』

ついに背を向けて走り出そうとした三成に易々と追いつく。そして、混乱から振りかざした短い右腕に、鋭い牙を持って噛みついた。

『い、いたいッ』

そのまま強靱な背筋と顎でもって、持ち上げた。頭上でわめく三成を一瞥すると、ヴァンは握り拳を作る。そして、手を離されて自由落下する三成の腹を、打ち据えた。

『ギャフッ』

小さく悲鳴を上げて、倒れ伏す。ヴァンはその三成を左足で踏みつけると、両手を広げて遠吠えをした。

踏んだのは、ノリである。

あっさりと打ち勝ったヴァンは、そのまま三成の上に座る。椅子としては、中々座り心地の良いものだった。

人間の姿に戻ると、ヴァンは空を見て大きく息を吐いた。月を見ながら願うのは、ただ友人と少女の、安全だけだった。

夜がゆっくりと、明けようとしていた。

5 t h d a y 奪還作戦スタート（後書き）

五日目終了です。

残すところは、六日目と七日目。

七日目は扱いとしてはエピソードになります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次回も、よろしく願います。

追記。

三月十六日九時四十七分、こっさり誤字修正。

6th day break destiny

S県、とある山奥、永戸研究所地下研究室。

暗い部屋に、ぼんやりと緑の光が灯る。

音のない静かな空間に、機械の駆動音が緩やかに響き始めた。

ブウウウウ……ウウウン

駆動音が大きくなるにつれて、緑の光も強くなる。

やがてその光が空間全体を照らす程明るくなった頃、光の発生源

緑色の液体で満たされたカプセルが、その“中身”を解放した。

水の流れる音と共に、一つの影が地面に滑り出した。

「っ……はあっ、はあっ……出てくるシステム、もう少し考えた方がよさそうかな」

一糸まとわぬ影は、男性のものだった。

声はやや幼く、成人はしていないだろう。

白い肌は、健康的にはとても思えない、病的な青白さ。

髪も真っ白で、眼は両目とも瞳孔まで白い。

全身から色素という色素を抜ききったらこうなるという、標本のよ
うな身体だった。

ややあばらが浮いているものの、肉付きはそこまで悪くない。適度
に筋肉が付いている。

そのことが、病的な容姿と比べて、少しだけアンバランスだった。

「まあ、成功だったみたいだし、これ以上は言わないでおこう」

くつくつと笑うその姿は、玩具を得た子供のように無邪気だった。事実そうなのだろう。彼は、とっておきの玩具を手に入れて、ご満悦だった。

「さて、待っていてくれよ　私の愛しい子供達よ」

作業台の上に置いてあった白衣を手にとると、それを羽織る。まずは服を着て、それから“出迎え”の準備をせねばならないのだ。

今年で六十を超えるはずの、科学者。

永戸天人は、十七から十八歳程度の肉体で、独り研究室で笑い続けた。

S H I F T

暗い廊下は、人気もなく不気味な様子を呈していた。

その廊下の曲がり角に、白銀の頭が、ひよっこりと顔を出した。

右を見て、左を見る。

上下も確認して頷くと、そつと進んだ。

その顔は、真剣そのもの。

だが、どこか冒険をしているような興奮が、弾む足から見て取れた。

「むむむ、いじょうなしであります」

小声でそう、アリアは言う。

脱出してどれくらい経ったのか、未だにゴールは見えない。

それどころか、自分がどんな場所にいるのかも、解っていないかった。

アリアは今、永戸研究所の地下にいる。

ただ、天人がいる最下層 地下五階 ではなく、地下一階、階段を見つけることが出来れば地上一階に出ることが出来る、という位置だった。

牢屋があったのは地下三階で、アリアは順調に上ることが出来たのだ。

そう、ここまでは。

だが、この階に辿り着いたとたん、階段が見つからなくなってしまったのだ。

実はこの研究所は、地下室を隠すために地下への階段が隠されていて

る。

そのため、上るのにも隠し階段を出現させる必要があるのだ。だが、当然アリアはそんなことは知らない。

そのため、とにかく地道に散策するしかなかったのだ。

一歩進んで左右を確かめて、一歩進んで上下を確かめる。

今の彼女なら、アマゾンの古代遺跡だって踏破できるだろう。気分は探検家だった。

とはいえ、そんな悠長にしてられないのもまた、事実だ。

アリアは、助けを待っただけのお姫様でいる気には、なれなかった。

ひたすら進んで、自分も頑張ったと諦めなかったと颯真に言いたいのだ。

やがてアリアは、不自然に大きな扉を見つけた。

スライド式の銀の扉。アリアは読むことが出来なかったが、その扉には“中央研究室”と書かれていた。

「あやしい」

確かに怪しいが、入ろうとは思わない怪しさだ。

それでもアリアはその扉の前に立つ。

そして、ぐっと指に力を入れると、その扉が左右に開いた。

「よしっ」

頬を両手でぺちんと叩くと、部屋に踏みいる。

だがその部屋は真っ暗で、手探りで歩くよりも他に方法がなかった。つまりいたりしないように、慎重に歩く。

すると、前に付きだした腕に触れるものがあった。

「うづん？」

首を捻って、ぺたぺたと触る。

冷たい金属の感触だが、壁があるようには思えなかった。

まるで、金属製の大きな棚が、ぽつんと立ちふさがっているような、不思議な感覚だ。

押せども引けども動かない。

仕方がないのでそれに沿って移動しようとしたとき、急に部屋が明るくなって、アリアはぎゅっと両目を閉じた。

「うづ、なに？」

そう呟きながら、前を見る。

それは、アリアの予想どおり棚だったのだが、壁でもあった。

壁に、無数の引き出しが取り付けられていたのだ。

「これは？」

「それは、わたしたちの“きばん”だよ」

後ろから響いた声に、アリアはゆっくりと振り向いた。

そこには、電気を点けたのであるうづ、さくらがぽつんと立っていた。ついでによく周りを見ると、小さなカプセルやモニター、それに作業机や本棚が大量にある部屋だということがわかった。

「えーれつの、あーるのいちの、ぜろぜろの、えー。それがあなた
のいでんし」

さくらは、アリアにそう、淡々と告げた。

当然、アリアは今一よくわかっていない。

さくらは解らないアリアの様子が理解できずに、アリアと同じように首をかしげていた。

「わたしとあなたは、“けいかく”でかたちをもつことができた、えらばれたそんざい」

それでもさくらは、淡々と続ける。
表情はなく、感情も感じられない。

だがその存在は決して薄いものではなく、この空間に確かな存在感を持っていた。

「だから、わたしたちはここまでじゆうに“させて”もらえたことをかんしゃして」

さくらは一步前が出る。

アリアはその仕草に唾を飲み込むと、それでも負けるものかと一步前に出た。

「はかせの“いちぶ”として、はかせに“どうか”しなければならぬ」

難しい言葉が混ぜられていて、理解は少し遅れる。

だが、その意味が“自分を失う”ことだと、アリアは真っ白な過去の記憶の中で、理解していた。

颯真に会いたい。

颯真ともっと、話がしたい。

颯真ともっと、一緒に居たい。

そんな純粹な気持ちだが、アリアの顔に優しい笑みを浮かべさせていた。
ここで退く訳には行かない。ここで自分の意志を通さなければなら
ない。

こんなところで、諦めたく、ない。

だからアリアは決意する。

「わたしはここには、いられない」

「なぜ？」

「じゃあさくらちゃんは、それでいいの？」

自分を失って、それでいいのかわからない。

そう問うたアリアに、さくらは本当に理解できなさそうに、首をか
しげた。

「わたしはおじさんといっしょにいたい。だからそとへでる」

「それだと、はかせがこまる」

「さくらちゃんは？」

アリアが続けた言葉が理解できずに、桜は再び首をかしげた。
感情を表現する手段が少ないのは、盲目故だろうか。

いや、おそらく 施された“教育”故だろう。

「さくらちゃんは、こまらないの？」

「わたしに“いし”はひつようないと、はかせはいつていた」

「そんなこと、ないよっ」

意志を持つと碌なことにならない。

そう吐き捨てた天人が漂わせた、苛立たしげな空気。

さくらはそれを感じ取っていたからこそ、それが本当に不要なものだと思っただ。

「たくさんわらって、たくさんないで、たくさんおこって、たくさんたのしいっておもおう！」

アリアは更に、一步前が出る。

右手を自分の胸に当てて、その声を　その言葉を、届かせようと喉を振るわせる。

「それってきつと、すつごく“すてき”なことなんだっ！」

その音が、振動としてさくらに伝わる。

天人としか接したことがなかったさくらの耳に、胸に、心に響く。

「わたしはさくらちゃんと、いっしょにいたい。ともだちになりたいから」

静かな声。

一転して感じる優しさに、さくらは胸の高鳴る音を、感じていた。

「だから　だから、いっしょにいこう！さくらちゃんっ！」

「あ」

小さく漏れた声が、自分のものだと気がつくまで、時間がかかった。さくらは咄嗟に口元を押さえて、首を振る。

惑わされていることが、知らない感情で満たされていくことが、さくらにはなによりも怖かった。

「しらない。わたしはそんなかんじょう、しらないっ！」

頭を振って、否定の声を発する。

だがその言葉には、なんの力も込められていなかった。

「わたしを、これいじょう　まどわすなっ！」

「さくらちゃんっ!!！」

さくらは包帯の下から、涙を流す。

それが何であるか解らずに、混乱して、激昂した。

「【わんぶせつぞく・いんしてんかん・しょうにん】」

両腕を広げる。

その姿はまるで、空を飛び立つ鳥のようだった。

「【くるっしふと】」

キーワードと同時に、さくらの両腕が大きな黒い翼に轉換される。

さくらの轉換因子は鴉。アリアを浚った、鴉のシフターだった。

「わたしはからす、もうもくのからす。ひかりはみえなくとも、えものはしつようにくいっばむ。わたしは、からす。しっこくの、からす　「!!」

子供だから、ぶれることもある。

それを見越した天人が保険程度に教えた、自己暗示の言葉。

その言葉を信じるうちは、さくらは冷静でいることが出来る。

そう、 “信じるうち” は。

「わたしはあきらめないよ さくらちゃんっ」

シフターは、自分の能力には自分で気がつく。自分しか、能力を開花できるものはいない。

アリアの心に溢れる“想い”が、アリアの頭にキーワードを浮かべさせる。

自分がなんであるか、その正体を繙ひもといていく。

「【わんぶせつぞく・いんしてんかん・しょうにん】」

天人が執拗に求めて、経歴からその答えを導き出した警察が守ろうとした、力。

その力を持っていたからこそ 颯真との出逢いは、“運命”
だったのだろう。

「 【いまじんしふと】 」

イマジン “幻想”の転換因子。

この世界に“存在しない”因子を持つ……“特別”。

“幻想のシフター”。

それが、アリアという少女の持つ“力”だった。

見た目はほとんど変わらない。

だが、その両手は、透明の光に包み込まれていた。
それは生命の輝きを想わせる、優しく力強い光だった。

「でゅあるふあくたー？ だったら、わたしも」

それが何であるか理解できなかったのか、さくらは首をかしげながらも、自分を納得させた。さくらもまた、重核因子を持つ存在だったから、理解できる範疇で思考を止めたのだ。

後ろに仰け反りながら、翼を前方へ羽ばたかせる。

それだけで突風が起こり、風のハンマーとなってアリアに襲いかかる。

これがさくらの重核因子の能力、風を起こす力だ。

「おねがい　ふせいで」

アリアは両手を前に突き出して、たった一言だけ、そう呟いた。

すると、クリスタルのような美しいヴェールが出現し、突風を防ぎきる。

「くっ……そんな、もの！」

さくらはその翼を以て上に飛ぶ。

二階分ほどある高い天井だが、閉鎖空間であることには変わらない。そのため、さくらは本来の動きで戦うことが出来なかった。

この不利な条件が、アリアの経験の少なさを埋める、アドバンテージとなっていた。

「きて」

アリアは、右手を空に掲げた。

右手の平、その中から溢れるようにあられた光がクリスタルとなる。アリアの手に握られた、アリアの武器。

さくらを傷つけずに倒そうと考えた結果、できあがった形。

それが “ピコピコハンマー” である。

「いっくよーっ！」

アリアはそれを大きく振りかぶり、投げた。

ハンマー型のものを投擲したことを感じ取ったさくらは、警戒しながら軌道を読む。

回転していて速度はあるが、動きは単調だ。

横に弧を描きながらさくらに向かっていくハンマー。

当然、そんなわかりやすい攻撃が避けられないさくらではない。

翼で軽く羽ばたいて、身体をずらすことで軌道から外れる。

それだけで、ハンマーはさくらを通り過ぎていった。

「そんなこうげき」

「あたるよ」

アリアの小さな声に、さくらは下半分しか見えない顔で怪訝そうな表情を作った。

眼が見えていれば、アリアが不敵に笑う姿をその瞳に映すことができただろう。

アリアのその笑みは、どこか颯真に似ていた。

……あくまで、雰囲気である。颯真のように恐ろしい顔ではない。

さくらを通り過ぎたはずのハンマーは、空中でぴたりと静止した。そして、更に速く回転しながらさくらに迫る。

「なっ！」

「おって！もっど、はやく！」

狭い空間で機敏に避けるさくら。

そんなさくらを逃がさないために、アリアは更に力を込める。回転速度が上がる度に、移動速度も格段に上がる。

眼で視ていたのなら捉えることは出来なかっただろう。

だが、感じ取っているさくらにとって、ハンマーがどこから来ようが同じようなもの。

だから、さくらは危なげながらも避け続けていた。

「【ぜんいんしせつぞく・いんしてん」

「させないっ！」

全身の因子を転換することによる“変身”を、アリアは止める。

左手を掲げてもう一つハンマーを生み出してそれを投擲することにより、さくらの余裕を潰していく。これで、さくらは大きな隙を作る変身を、迂闊に行うことが出来なくなった。

「ならっ！」

それならばと、さくらは翼を大きく羽ばたかせて、更に突風を起す。

その際に真空状態を生み出して、風の刃を作ってアリアを襲う。カマイタチである。

「はねかえしてっ」

アリアがそう声を上げると、クリスタルのヴェールが半球状の盾になった。

そして、カマイタチが衝突した瞬間にクリスタルが波紋を描いて弛み、弾力を以て跳ね返した。

カマイタチが跳ね返るといふ不思議現象に、さくらは動揺と焦燥をその口元に滲ませた。

「いっしょにいこう！さくらちゃんっ」

その焦りを感じ取り、アリアはもう一度誘いの声を上げる。

さくらの心は、確かに揺らいでいた。

アリアの言葉で、自分が“知らない”感情が胸に溢れていくことに戸惑っていた。

だが元來受動的だったさくらは、その最後に踏ん切りをつけることが出来ずに、ただ拙い風を生み出していた。

「わたしをつれていきたいのなら　わたしをたおせばいい！」

倒してくれという、意志。

さくらは拒絶の言葉として発したつもりだった。

だがその音には悲壮の色が混じり、さくらの想いを乗せていた。

アリアはさくらが出した“譲歩”を、確かに感じ取っていた。

「うん　いくよ、さくらちゃんっ！」

目を瞑り、頷く。

眼を開き、見据える。

蒼天の如く、広く深い空色の双眸が、さくらの姿を呑み込んでいた。

アリアが右手を掲げると、そこにハンマーが戻ってくる。

もう一つのハンマーも同化して、一つのハンマーになっていた。

それを大きく後ろに振りかぶると、前に飛ぶ。

背中に振りかぶったハンマーを両手で持つと、ハンマーは次第に大

きくなつていく。

「なっ」

さくらは、その姿を感じ取って、小さく声を漏らした。

アリアの身長どころか、部屋のサイズぎりぎりまで肥大化した巨大なハンマー。

それが、振り下ろされようとしていた。

「でやああああああああっっっ！！！！」

避けられる範囲ではない。

そのハンマーを前に、さくらは全身の力を抜いた。

抵抗は無駄だと悟った　きっと理由は、それだけではない。

ズドンッ！

不思議と痛みを感じない、緩やかに眠りに落ちるような、感覚。

その透明の抱擁に、さくらは薄く微笑んで、ゆっくりと意識を手放した。

「っ　　はあっ、はあっ、はあっ」

後に立つアリアは、肩を落として息を切らしていた。

初めてのきちんとした能力の使用に、疲労感と倦怠感がアリアを包み込む。

それでも、暖かい表情で眠るさくらの姿に、アリアは頬を緩ませた。

ふらふらとさくらに近づくと、軽く能力を使ってさくらの身体を浮

かせた。

長時間使用することは、疲れにより出来そうにない。だからアリアは、さくらの身体を背負う。更に足下がおぼつかなくなるが、それでも降ろそうとは思わない。

気合を入れて歩き出す。

だが、それは思わぬ事態に妨害された。

ド…… オオオンツツ

大きな爆発音と共に足下が揺れる。

同時に、アリアの背後の床が、下からの爆発で抜ける。

「え？」

その爆発の衝撃で、アリアの足下が崩れる。

アリアは独特な浮遊感を感じ取り

暖かいものに、包まれた。

自分を包み込む、その姿に眼を瞠り、アリアは空色の目に涙を溜めて微笑んだ。

夜と朝の狭間。

空が紫の天蓋に覆われる時間に、颯真は古びた研究所の前に立っていた。

門の窓口から見える研究所。

ひび割れたアスファルトから突き出た雑草の数々は鬱蒼と茂り、くすんだ色の研究所の壁は、緑の蔦で覆われている。

鉄の門だけはなんとか開けられた形跡があり、少しだけ雑草が少ない。

颯真はためらいごとく無く鍵のかけられた門を蹴り破ると、灰色のコートを翻して敷地の内側へ進んでいく。

そして、ヴィヴィアン経由で渡された地図を広げた。

ちなみに、当のヴィヴィアンは、門の外で車を止めている。

逃げ出すときの“足”である。

「地下室への階段、か」

調べ上げられた情報。

それに基づいて制作された地図には、地下室へと続く階段が示されていた。

研究所の裏手に回り込み、壁を探る。

一カ所だけ蔦のないところを見つけると、颯真はその場所に手を当

てた。

そのまま壁を撫でるように動かすと、窪みを見つけて手を止める。

「ここか」

そこに指をかけると、引つ張る。

それだけで壁の一部分が外れて、中からレバーが出てきた。

颯真がそれを引くと、小さく地響きがする。

「わかりやすいな」

颯真の背後で地面が割れて、鉄で出来た階段が顔を見せる。

深淵の闇へ続くような陰鬱な雰囲気を醸し出す、地下への入り口。

それを見て、颯真は呆れたように息を吐いた。

苛立たしげに舌打ちをして、頭を掻きながら階段を下りる。

地下一階部分に辿り着いたところで一気に面倒になり、颯真はホルスターから銃を抜いて床に照準を合わせた。

引き金を引き、撃鉄が落ちる。

大きな破裂音と共にマズルフラッシュが輝いて、床に大きな罅を入れた。

それを等間隔でもう四発打ち込むと、熱で煙の上がる薬莖を捨てて弾丸を装填した。

コートの至る所に弾丸が詰め込まれているため、無くなる心配はあまりしなくても良いだろう。

罅だらけの床を、颯真は足で強く踏む。

罅が大きくなったことを確認すると、更に力を込めて踏み抜いた。

ここまですると、転換もしていないのに、化け物じみていた。

まだ下には降りずに、上からもう五発打ち込む。

それから降りることで、落下の力も乗せて踏み抜く。

これももう二階分繰り返すことによって、颯真はあっさりと最下層に到着した。

……こうして横着をするから、最速でエリアに遭遇するチャンスを逃がしてしまうのだ。

地下五階は、他の階に比べて暗い。

陰気な雰囲気がなにより嫌いな颯真は、苛立たしげな様子で進む。

このスペースは謎が多く、地図には載っていないので、虱潰しに探すしかないのだ。

地道な作業もまた、颯真が嫌いとするのだ。

料理や掃除といった自分のためになることならば、好きでやっているのだからと妥協はしない。けれど、この状況は別だ。助けるのならさっさと助けて逃げたかった。

なのにこのような面倒なことまですることになり、颯真は犯人を殴らなければ気が済まなくなっていた。

そうやって五分ほど歩いていると、不自然に大きな扉を見つけた。

そのあからさまな場所を置いておく姿勢に、颯真は嫌そうに息を吐いた。

こういう自信家は、煩いのが多いのだ。

嫌々ながらも扉の前に立つ。

どうやって扉を破ろうかと、まっとうに開けることなど考えもせず
に颯真は悩んでいた。

だが、それも杞憂に終わる。

颯真の前で自動的に扉が開いたのだ。

あからさまな誘いに、苛立ちを通り越して呆れを感じていた。

目立ちたがり屋で自信家。

陰鬱な老人に違いないと、颯真は当たらずとも遠からずなことを考えていた。

静寂と漆黒に覆われた部屋を進む。

すると、大きな空のカプセルが見えた。

ぼんやりと光るそのカプセルの前には、よく見ると白衣の男が立っていた。

白のスーツに白衣という時点で、センスが欠片もないことが解る。

この不気味な男を見て、そんな的外れな感想を抱く颯真も颯真だが。

「良く来たね、待っていたよ」

男 天人の浮ついた声に、颯真は答えない。

出方を見ているというよりは、経験上この手のタイプは反応しなくても勝手に続けるので放って置こうという考えだった。

「君には一言、感謝の言葉を贈りたくてね」

案の定、天人は颯真が反応をしなくても話し続ける。

天人は颯真が反応しないのは自分を警戒しているからだと思っているが、単に無視しているだけである。この二人には、妙な温度差があった。

「私の“一部”となる存在を丁重に預かってくれたみたいだから、そのお礼を、ね」

天人は、その場で手を掲げると指を弾いた。それを合図にして、空間に電気が点いた。

沢山の機械と、立ち並ぶカプセル。

天人の後ろにある一際大きなカプセルだけが、仄かに光を発していた。

その他のカプセルは、全て緑色の液体が入っている。数は、視界に入るだけでも三十はくだらないだろう。

「不思議そうだね、ククッ」

天人はそう言うが、颯真は表情を崩していない。

だが、普段なら既に攻撃を仕掛けているだろうことを考えると、颯真は確かに耳を傾けていた。

「アレ”は私が造ったのだよ。世界から集めた遺伝子を組み上げて、胎盤を用意して形を作り、その中でも選ばれた者が、私と一つになるために」

「一つ、だと？」

天人は指揮者のように手を振りかぶり、前屈みになって哄笑する。その不快な声に、颯真は眉根を寄せた。

「そうさッ」

ダンスでも踊るように、その場でぐるりと回転する。手を広げて語る姿は、どこか滑稽だった。

「完成し覚醒された遺伝子を溶解しッ我が身に取り込むこの装置こ

そ、私の最高ッ傑ッ作ッ！覚醒しなければ何のシフターとなるか解らないこの“賭け”に私は勝った。勝って、最高のシフターを手に入れたッ」

興奮のしすぎで、喋りながら舌を噛んだのだろう。

口の端から血液がこぼれ落ちるが、天人は気にも留めずに続けた。狂人として追放された彼は、どこまでいっても狂人だった。

「この世界に存在しない因子を持ち、能力を使う度に“種”として強靱になっていくッ！」

前髪を書き上げながら体勢を起こす。

背を仰け反り、甲高い声で笑い続ける。

「そう、使う度に命を削る、君とは“真逆”の超越種。……同じ存在だとも思つて、同情でもしていたのならお門違いだ。何せアレは、君のような“欠陥品”ではないのだからなアッ！！」

颯真は答えない。

右手に持たれた拳銃も、銃口を天人に向けることもなく、だらんと地面に降ろしていた。

その表情は、影になって何うことが出来なかった。

「本来なら私が直々に“教育”を施すはずだった。だがそれも、あの女が 胎盤に使つてやった程度で図に乗つて、アレを持ち去り中途半端な意志を植え付けて、余計な手間をとらせたッ！」

ばきん、という小さな音。

憤怒に顔を歪ませた天人が、歯を食いしばるあまり、自分の歯を噛み砕いた音だった。

それにより再び血が溢れて、天人の歯とスーツを、徐々にだが真紅に染めていった。

「探しだし、追い詰めて、漸く手に入るというところでッ！身を挺すなどという愚かな方法で逃がして！おまけに記憶喪失だとッ？！」

そこまで話して血液が気管に入ったのか、天人はその血を地面に撒き散らしながら咽せる。

それによって冷静さを取り戻し、天人は口元を拭って落ち着いたように笑った。

「だが、まあ、その女も今では私の一部。自分自身を貶すのは、建設的ではないしね。と……それなら私は、ある意味でアレの“母親”ということになるのかな？」

遺伝子を持ってきて、子供を“造る”といっても、一番確実に安全なのは、胎盤……“母胎”を用意することだ。

だから天人は女を“買って”母胎とした。

その女がシフターだったから選び、生ませた。

その後も何度か、生ませるために。

だが、彼女は産んだ子供を連れて逃げ出した。

そのせいで次は試験管の中で造ることになり、失敗を重ねて造った子供は、重核因子だが盲目になってしまった。

だから天人はシフターの破落戸を雇って追い詰めた。

なんとか抑えることには成功したが、そのせいで子供を逃がすことになってしまったのだ。

捕まえた女を、天人は“吸収”した。

それはつまり、子供　アリアの“母親”は、もう……。

「アレを我がものとする前に、見せてあげよう。私の研究の、成果をッ！」

何も答えない颯真の前で、天人は白衣を脱ぎ捨てた。

「【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

めきめきと音を立てて天人の姿が変化していく。

赤黒い蟻の胴体に、毛むくじやらの蜘蛛の足。

胴体から生える純白の、鳩の翼と、獅子の首。

そして、獅子の頭、その右上に瘤のように張り付いた、天人の顔。

アントシフター、スパイダーシフター、レオンシフター。

アリアの母親である……ピジョンシフター。

そして、天人が元来持っていた“役立たず”の能力……ヒューマンシフター。

五種類の転換因子を掛け合わせた、造りモノのシフターだった。

「【キメラアウト】」

なるほど名前は“キメラー　合成獣”だろう。

天人は張り付いた顔を歪ませて、狂ったように笑い声を上げていた。

『さて、どうする？君がアレを助けたいのなら、私を倒すしかないぞ？もつとも、君のような欠陥品が、私のような超越種に勝て』

「　黙れ」

颯真は、ありつたけの殺意を込めて、天人を睨む。

天人は顔を引きつらせたが、自分が既に“特別”なのだと思い出して、余裕の笑みを浮かべた。

『は、ははっ。何を』

「知らねえのか？……自分の悪事をガキみたいにペラペラ自慢するようなヤツのことを」

そして颯真は、自分よりも高い位置にある天人の顔を、心でもって思い切り見下した。

「“小物”っていうんだよ」

一瞬、天人は言葉の意味が理解できずに、硬直する。だが、所詮相手は欠陥品……“劣等種”なのだと気を取り直した。

『それは、全てにおいて君たちよりも存在が上である私への、嫉妬かい？』

「あ？テメエみたいな“虫”野郎が、人間以上？……生まれ変わって出直してこい」

確かに見た目は虫に近い。

そんなものよりもずっと醜悪な姿なのだが、颯真の中では既に、天人の評価は“虫”で固定されていた。

『君はどうやら、私を始祖とする理想郷に』

「気持ち悪い……俺に虫の繁殖を語るな」

自分は相手よりも優越な存在である。

天人は自分にそう言い聞かせて、冷静に努めようとする。

『フフ、私の高尚な目的が理解できない、と』

「虫の言葉なんか理解できるかよ、くせえんだよ、虫。俺の近くで呼吸すんな、虫」

小学生の悪口のような口ぶりだ。

天人は深呼吸を始めているが、その口から気管に繋がっているのか、謎だ。

冷静であろうとはしているが、その青白い顔は、憤怒の赤に染まっていた。

『私を虫呼ばわりしたことを訂正し、神と呼ぶことを誓うのなら、楽に殺してやるよ』

「ハッ……訂正してやるよ　害虫」

結局虫である。

しん、と二人の間が静まりかえる。天人は不自然な笑みを浮かべたまま動かず、颯真は拳銃を肩に担いで欠伸をしていた。

『クッ……ハッ、ハハッ、ハハハハハハハッ』

「だりい」

大きく笑い、そして急に顔面から感情を消した。

颯真はなおも気にせず面倒そうな表情を浮かべていた。

『殺す』

「単純だな」

天人の身体が、前に傾く。

そして、その場からかき消えた。姿を見せないほどの高速移動である。

それを颯真は、並外れた動体視力で見切り、身体を半身にずらして突撃の軌道からずれた。

そしてそのまま、右側に来た天人の顔面を狙って引き金を引く。

撃鉄の落ちる音とマズルフラッシュと同時に、天人の向こう側から炸裂音が聞こえた。

おそらく咄嗟に避けたのだろう。

天人は蜘蛛の足の一本を使って、颯真を貫こうとそれを伸ばす。颯真はそれを銃底で叩き落とし、今度は獅子の額に銃弾を撃ち込んだ。それすらも避けられて、颯真は小さく舌打ちをした。的は大きいのに、早すぎて擦らせることもできなかった。

このままでは、千日手。

弾数に限りがあることから、颯真の方が倒れるのは近いだろう。

そう考えた、一瞬の間。

そのタイミングにつけ込んで、天人は獅子の口から蜘蛛の糸を吐き出した。

「ちっ」

『捕まえたアッ』

それが左手に巻き付いて、そのまま颯真の左手を食いちぎるために引き寄せられる。

獅子の口の中には、肉食獣の牙だけではなく、蟻の顎が納められていた。

「【左腕部・簡易接続・半因子転換・承認】」
『ぐうっ!?!』

颯真の左手が、黒い“鱗”に覆われる。

刃を重ねたような、漆黒の腕。爪も鋭く伸びていて、少しだけ腕が太くなっている。

だが、それだけだ。

他のシフターに見られるような劇的な変質ではなく、鎧を纏った程度に見えた。

だがそれでも、よほど硬くなったのか、天人はその腕に牙を突き立てることが出来なかった。

『ハッ、なんだその中途半端な転換はッ！命を削るのが怖いか?!』

天人の挑発。

だが、それに乗って相手を満足させるような真似はしないのが颯真だ。嫌がらせのために、挑発を聞き流していた。

「捕まえたぞ、虫」

『ッ!……グガアッ』

避けようのない超至近距離からの弾丸。

天人は獅子の額にその弾丸を受け止めて、悲鳴と共によけた。だが、颯真の左手はまだ、獅子の口内の、蟻の顎を掴んでいた。

ドンドンッ

『……ガウッ、グルウアッ!?!』

更に二発打ち込む。

獅子の左目と蟻の胴体の心臓部分。

く。
首根っこを捕まれたさくらは、首が締まっているのか顔が蒼白になっている。

崩れていく研究所。

瓦礫を避けて飛び回り、颯真は青空の下へ飛び出した。

「颯真ッ！」

自分を呼ぶ声に、颯真は眼下を見る。

正門の前に止まったポルシェ。

その側で、ヴィヴィアンが颯真を呼んでいた。

颯真はそこまで降り立つと、アリアを地面に降ろして、さくらをヴィヴィアンに渡した。

ドオンッ！！

爆発音に背後を振り向くと、五階建ての建物ほど巨大化した天人が、虚ろな目で笑っていた。もう、意識は残っていないようだ。

「なんだアレ？暴走か？」

「そうみたいね。あんな巨大化する暴走、見たことがないけれど」

制御しきれないシフターは、稀に暴走することがある。

せいぜい凶暴になって暴れる程度だが、遺伝子を掛け合わせて誕生した天人のキメラシフターは、それだけでは済まなかった。

颯真は大きいため息を吐くと、巨大化した天人を呆然と見つめるアリアを一瞥した。

その瞳に、本人でも理解できない恐怖心が浮かんでいることを見て

取ると、颯真はほんの少しだけ目を瞑った。

「ちょっと、颯真？」

ヴィヴィアンの怪訝そうな声を無視して、颯真は一步進んだ。ここまで来たら、最後までやる。アリアに暗い感情を抱いて欲しくない。

そう考える自分の気持ちを認めて、颯真は自嘲の意味で笑う。

だがその顔は、本人が思っているよりも、ずっと穏やかなものだった。

颯真は翼をしまうと、穴の開いた灰色のコートと、懐中時計と拳銃をヴィヴィアンに預けた。

「アリア」

「おじさん？」

声をかけられて、呆然とした思考から抜け出したアリアが颯真の方を向く。

穏やかな表情の颯真を見て、アリアは嫌な予感を胸に抱いた。

「そこで大人しくしている」

「え？」

そう言う颯真に、アリアは首をかしげた。

解っていないような返事をしたのに、その小さな右手は、颯真のズボンを掴んでいた。

颯真はその手を振り払うのではなく、自分の手でそっと離させた。

どこかへ行こうとしている。
だから何かを言わなければならぬ。
それが解っているのに、言葉が見つからず、アリアは先へ行こうとする颯真に追いつがる。

止められない。

止められないことは、理解できてしまった。

だからといって、何も言わずに見送ることなんか出来なかった。

だから、せめて、この背中に 伝えたい、“想い”を放つ。

「っ がんばって！……… “おとーさんっ” ……！！！！」

颯真の歩みが、ぴたりと止まる。

何か言い返そうかと逡巡し、結局口に出たのは、短い一言だった。

「おっ………任せとけ」

颯真はアリアたちから十メートルほど離れた位置で、足を止めた。
そして、未だに地団駄を踏むように暴れる天人を見上げた。

「【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

颯真の身体を漆黒の鱗が覆い尽くし、瞳孔が縦に割れて金色に染まる。

背中からは巨大な蝙蝠の翼が生えて、尻尾が生え、額からは角が伸びる。

やがてトカゲのような顔つきになり、その身体は天人以上に巨大化していく。

「 【ドラゴンアウト】 」

世界に“存在しない”因子を持つシフター。

颯真の転換因子は “龍” だった。

『オオオオオオオオツツツ!!!』

顔も思い出せない“だれか”が、アリアに教えたおとぎ話。

お姫様を浚った悪い龍は、勇者と戦って、最後には勇者を助ける。
不器用で優しい“漆黒の邪龍”。

「おとーさん、カツコイイ」

呆然と呟くアリアの声。

龍と化した颯真は、超越した聴覚を以てその言葉を聞き取り、
邪悪な表情で笑って見せた。

『ミツ、ケタ、アアアアアアアアアアアアツツツ!!!』

天人は颯真の姿を確認すると、雄叫びを上げた。

その声は二重三重に音がこもり、甲高い不協和音を生み出していた。

蜘蛛の足が動く、身体がぶれるようにかき消える。

巨大化しても、目視できないほど速い。サイズが大きくなった分だけ
周囲にもたらず影響は大きく、少し動いただけで大地は陥没し、
衝撃波で山が削れる。

『オオオオツ!』

颯真はその突進を、漆黒の鱗で覆われた右腕を突き出すことで、受

け止める。

龍の腕力は、それだけで天人の動きを拘束した。

颯真の後ろには、アリアたちが居る。

ならば、天人をここから先へは、進ませない。

左手を張り手のように突き出す。

その一撃は獅子の喉に食い込み、鋭い爪で引き裂かれて鮮血が舞った。

だが天人は痛みを感じていないのか、瘤のように張り付いた顔は薄気味悪い笑顔を浮かべたままだ。

『クダラナイ、コノセカイヲ、ワタシガ』

天人は白い翼を羽ばたかせると、浮き上がる。

翼が上下する度に発生する突風は、颯真はともかく眼下のアリア達にとってはたまらないだろう。

『ワタシガ、カエテ、ツクルノダアアアアアア！！！』

天人は上空から糸を吐き出した。

その糸は颯真の腕に巻き付き、颯真を上空に引っ張り上げようとする。

だが、龍となった颯真の力は、なにも怪力だけではない。

『 邪魔だ』

腕に巻き付いた糸を、睨み付ける。

すると、左腕が深紅の熱を帯びて、その高熱を以て糸を焼き切った。引っ張り上げようとしていた対象がいなくなり、天人は大きく体勢

真正面から受け止める。
その獅子の顔面を掴むと、颯真はその異常な怪力を以て上空へ投げた。

巨体が宙に浮かび上がる。

颯真はそれに顔を向けると、口の中に灼熱の宿らせた。

『燃え尽きる』

たった一言。

それだけで放たれた真紅の炎が天人を覆う。

そしてその蒼天の空を朱色に染め上げて、ほんの一瞬、空に巨大な太陽を浮かべた。

それだけで 空には塵も、残らなかった。

人里離れた山の奥。

蒼天の下、漆黒の龍が勝利の咆吼をあげた。

6 t h d a y b r e a k d e s t i n y (後 書 き)

編集、七月十九日、十一時十二分。
戦闘シーンに加筆。怪獣大決戦にしてみました。

last day ここより続く未来へ

繁華街の外れ。

寂れた時計屋の地下室で、颯真はシャツのボタンを留めていた。

その正面では、和彦がパイプ椅子に座りながら、悲壮な表情でカルテを見ていた。

「颯真君」

その声には、後悔にも似た悲しみが含まれている。
颯真はそれを、承知しているとばかりに聞き流す。

「君の身体はもう、ぼろぼろだ」

和彦は、眼を伏せて唇を噛む。

颯真はそれに答えずに、黒のベストを着る。

「それこそ、あと十五年も生きられたら、奇跡としか」

「関係ねえよ」

颯真は灰色のコートを羽織ると、それを翻して和彦に背を向けた。
和彦はその背に何か言おうと立ち上がる。だが、すぐに口をつぐんで座り込んだ。

「俺はギリギリまで、好きに生きるだけだ」

「本当に、君らしいね」

和彦はそれきり、何も言わない。

颯真はそんな和彦に振り向くと、気負いのない表情で不敵に笑って

見せた。

「そう簡単に、くたばらねえよ」

その顔に、和彦は頷いた。

そして自分も、なんとか笑ってみせる。

「簡単には死なないって、約束だよ 颯真君」

「ああ、おまえとの約束も、たまには守ってやるよ」

颯真はそう言うと、今度こそ歩き出す。

その大きな背中に背負うものは、今までとは比較も出来ない、重くて大切なもの。

だからその背中は ずっと頼りになる、力強いものに見えた。

燦々と光る太陽が、雲一つ無い空に昇っている。

四月の初め、春一番で桜吹雪が舞うこの季節は、温かかったり寒かったりと落ち着かない。

三寒四温とはいうけれど、まだまだ一週間の半分以上は寒かった。

ピンクのラインの入った運動靴で、アスファルトを叩く。

その気持ちの良い反動に、アリアは顔を綻ばせた。

空色のスカートが風でふわりと翻る。

真冬ほどではないが風は冷たい。

その風に、アリアは両手で身体を抱いた。

背中はず赤いランドセルのおかげで温かいが、身体の正面は守れない。首や手も寒いがマフラーを巻くほどではない気温に、アリアは唇を尖らせた。

「ふう、さむいよー」

「そう?」

アリアがそう呟くと、隣から返事が返る。

アリアよりも低めの声。その声の主は、シンプルな黒のパーカーに紺色のプリーツスカートという、特に寒くも温かくもない格好だ。

「さくらちゃん、さむくないの?」

「うん。アリアが、さむがりすぎ」

眼を細めて唇を尖らすアリアに、声の主　桜が答えた。
現在の彼女のフルネームは、香川桜。村正の、養子である。
アリアは、源アリア。正式に、颯真の娘となっていた。
ちなみに、アリア＝源ではないらしい。

通常は、結婚歴がないと養子は取れないのだが、そこは村正がどうにかしたようだ。
聞かない方が良さそうな類の方法で。

そんな桜の背にも、真っ赤なランドセルが背負われている。
彼女たちは二人とも、今年度から地元の小学校の一年生になっていた。

桜の両目には、現在は何も巻かれていない。
目を瞑っていられるので、そうしているのだ。

怪我をしている訳ではないのだから、包帯で気負う必要もない。

アリアはそんな風にして顕わになって桜の顔を見て、嬉しそうに笑う。

友達になりたいと思った少女と友達になって、同じ学校の同じクラスで授業を受けて、こうして一緒に下校している。

そのことが、嬉しくてたまらないのだ。

「わたしだけじゃないよ。りつとは、はんそでだったし」
「りつくんはべつだよー」

よく話す、クラスメート。

ちよつと意地悪な男の子で、そのことが後ろめたいのか颯真を見る度に顔を青くしている少年だ。

「それじゃあ、わたしはこっちだから」

「うんっ！さくらちゃん、またあした！」

曲がり角で手を振って、桜と別れる。

一人になったアリアは、変わらず笑顔で歩いていた。

帰って始めに見られるだろう顔を思い浮かべて、アリアは嬉しそうに笑う。

足取りも自然に軽くなって、小走りになった。

車もろくに通らない道の、曲がり角。

改装されて綺麗になった木製の扉と、白い羽の絵がアクセントになった、看板。

窓ガラスは空の青を反射して、向こう側まで天そらが続いているように見えた。

扉に手をかけて、押し開く。

額より少しだけ高い位置にあって大変なのだが、もうコツは掴んでいる。

最初の頃よりは、大変ではない。

「ただいま！おとーさん！」

満面の笑みを浮かべてアリアがそう言うと、カウンターの向こうで皿洗いをしていた颯真が顔を上げた。

颯真はアリアを一瞥すると、一言「おう」と返事をした。

「手を洗ってこい。ケーキがあるぞ」
「ほんとっ?! やったっ!」

喜び勇んでカウンターの裏に入り、皿洗いをする颯真の横で、手洗いとうがいをする。
それから、生活区の方へ駆け足で行くと、高い階段に苦戦しながら二階へ上った。

一番最初にアリアが目覚めた部屋。
颯真が使っていたその部屋の扉には「ありあとそーま」と拙い字で書かれた札が、かけられていた。

ドアノブに飛びつくようにして扉を開ける。
質素だった部屋には、可愛らしい勉強机が置いてあった。
アリアはそこにランドセルを乗せると、足音を立てながら部屋を出た。

「けーき けーき」

颯真は、決してアリアに市販のものを出さなかった。
ケーキもチョコレートもクッキーも、全て颯真の手作りだ。
市販のものよりも美味しく、健康にも配慮されている。
さらに、アリアの好みにも合わせてあって、颯真の本気さが伺えた。
デレ期である。

「おとーさんっ! けーき!」

皿洗いを追えてカウンターを拭いていた颯真は、アリアの後ろ側に回ると、両脇に手を入れて持ち上げた。そして、カウンターの上に

座らせると、厨房に回って冷蔵庫からケーキを取り出した。

ふわふわのスポンジと、真っ白なクリーム。

スライスされた苺がのっけていて、見た目でも楽しむことができる。

大抵の子供が喜ぶ、定番のショートケーキ。

それを、颯真がオリジナルアレンジしたものだ。

チョコレートソースが、アリアの食欲をくすぐる。

「わあ……いただきますっ！」

フォークを突き刺して、ほおばる。

一口目で目を輝かせて、二口目で満面の笑みを浮かべた。

口元にクリームをつけて食べるアリア。

颯真はカウンター越しに手を伸ばして、その頬についたクリームを指でぬぐい取って、そのまま舐めた。そして、今日も良い出来だと頷いた。

「えへへ、ありがとっ、おとーさん！」

「いいから大人しく食ってろ」

颯真はそう言うと言った手を洗って、自分のためのコーヒーの準備を始めた。

無邪気にケーキを楽しむアリアを見ながら、少しだけ息を吐く。

いずれはアリアに、その出生のことについて教えなければならぬだろう。

鳩のシフターだった母親の末路も、颯真が伝えるべき事柄だった。

熱いコーヒーをブラックで飲む。

苦みが口に広がり、吐きだした息が白くなる。

コーヒーを置くと、今日の夕飯を考えるために、料理本を開いた。

アリアはそんな颯真をじっと見ていて、颯真もすぐにその視線に気がつく。

「夕飯、何が食いたい？」

「えへへー……はんばーぐっ！」

その無垢な笑顔に、颯真は頷く。

アリアがもう少し、大人になったら。

命が尽きるその前に、颯真はアリアに伝えようと決めていた。

アリアが成人するまで一緒に居られるか、解らない。

だが、高校卒業までだったら、ギリギリかも知れないが、なんとなくなるだろう。

颯真はアリアの頭をかき回すように、撫でる。

アリアは手の動きに合わせて頭を動かすことになり、目を回していた。

「おとーさんっ！」

「なんだ？」

だが、もうしばらくは。

この、太陽のような笑顔のそばで。

「だいすきっ！」

共に笑い、共に泣き、共に過ごそう。

いつか訪れる、“別れ”の日まで

後書き

これにて、全八話で、この中編は終了となります。

日々を無為に過ごしていた男と、日々を平穩に過ごすことが出来なかった少女。

この二人が絆を結び、人間として成長していくお話でした。

コンセプトとしては、親子の絆、となります。

これでいったん、本編は終了となります。

完結設定はしますが、この後は不定期更新で“ほのぼの日常編”を書きたいと思います。

時間軸設定もあつてないようなもので、時折更新される、後日談的番外編になります。

この中編という本編がなければ書くことが出来なかった、二人が日常の中で紡ぐお話です。

ほとんどはアリアサイドになるとと思いますが。

番外編を上げて登場人物が増えてきたら、人物紹介なんかも書こうと思います。

シリアス非日常編では、ツンデレおじさんだったので、ほのぼの日常編では親ばかおとーさんな颯真を書いていけたらいいな、と考えています。

全八話、アリアと颯真の七日間にお付き合いしてください、ありがとうございました！

ご意見ご感想のほど、お待ちしております！

のんびりとした更新になりますが、是非、今後ともよろしくお願
い
します。

執筆日時 七月十六日三時十二分

投稿日時 七月十六日九時三十六分

太陽が西に傾き始めた頃。

時計の針が午後の三時を指し示し、子供達にとっての“楽しみ”であるおやつ時間がやってきた。

この時間は、颯真から顔を逸らしながらも、冷えた身体を温めようと常連の客が入る。

三時に来れば、おやつを食べるアリアを見て、身体だけではなく心も温まるのだ。

颯真と目があって心が冷え切らない限りは、温かく過ごすことが出来る。

常連客にとって、如何に“運”が試されるかという勝負の時間だった。

アリアは学校から帰ってくると、笑顔で颯真に「ただいま」を言って、おやつを食べる体勢を作る。つまり、手洗いうがいに荷物を置いて、カウンターへやってくるということだ。

だが今日は、いつもとは少し様子が違うようだった。

まずは帰って、「ただいま」を言う。

だが、今日はいつもよりも元気がない。次に手洗いうがいをする。

この後、いつもは生活区に走るのだが、今日はそれがなかった。

アリアは期待の籠もった目で、颯真を見上げる。

「あの、あのね、おとーさん」

アリアは言葉を紡ごうと、口をもごもごと動かす。颯真はそんなアリアを、ただじっと待っていた。

「あのね　これ、なんだけど、ね」

アリアが颯真に差し出したのは、一枚のプリントだった。颯真はそのプリントに目を通すと、大きくため息をつく。その様子にどこか怯えたように顔を上げたアリアの頭を、颯真はそっと撫でた。

「はあ……明後日、か。わかった」

「あ　うんっ！」

満面の笑みを浮かべるアリアに、颯真は苦笑いを浮かべて見せた。その雰囲気の柔らかさは目を瞠るものがあつた。

そうしていると男前なのだが、この雰囲気味わうことが出来るのはアリアだけである。親ばかを嘗めてはいけない。

そんな颯真の手に握られたプリントには、大きな活字で主題が綴られていた。

その題は　　“授業参観のお知らせ” だった。

春の日差しが、大きな窓から教室に差し込む。

その暖かさに身を任せるように、アリアは机の上にぺたんと顎を乗せていた。

正面から見れば、机の上に乗ったアリアの顔という、シユールな光景が拝めることだろう。

「はふう」

「アリアちゃん、きもちよさそうだね」

そんなアリアに声をかけたのは、黒い髪を姬カットにした少女だった。

少女は、丁寧な物腰でアリアの顔を覗き込み、口元に手を当てて小さく笑っていた。

一々の仕草が上品なことから、良いところのお嬢様であるというこ

とが、伺えた。

「みみちゃんも、する?」

「わたしはいいよー」

少女　月見里七海やまなしは、アリアの提案を笑顔のまま拒んだ。
嫌な訳ではないが、少し恥ずかしいのだ。

そんな二人の様子を見ていた桜は、少し考えてから自分もアリアに倣った。

机の上に垂れてみて、その予想以上の心地よさに、動けなくなる。
ひんやりとした机と暖かな日差しのハーモニーが、桜に和みの感情を与えていた。

「みみも、するといい」

「さくらちゃんまで……や、やってみようかな」

七海は机に垂れる二人を見て、息を呑む。

そのあまりに気持ちよさそうな体勢に、好奇心が打ち克った。

「おお、これは、なかなか」

そして、行動に移す。

教室の窓側、一番前の席がアリア。その隣が桜で、アリアの後ろが七海だ。

こうして三人で「L」字に垂れる姿は、なんともシユールなものだった。

「なにへんなことやってんだよ。ばっかじゃねーの?」

そんな三人に、幼い少年の声が届いた。

その声で初めて気恥ずかしさを覚えた七海は飛び上がったが、アリアと桜は依然として垂れたままだ。その様子に短髪の少年 向日坂律人は、顔を赤くした。

「むししてんじゃねえよ！ババア！」

ババアという言葉は、アリアに向けて放たれたものだ。

律人はアリアの銀髪を“白髪の老婆”と揶揄して、こう呼んだのだ。子供らしい、安直なからかい文句である。

「りっくん、おんなのこにそんなこといっちゃだめだよっ」

そんな律人を止めたのは、薄茶の天然パーマの髪を持つ少年 城島巧巳だった。

巧巳は暴言を吐く律人の後ろに回り込み、羽交い締めにしていた。

「はなせ！たくみ！」

「やだっ！どうせ、かえりうちにあつのはりっくんなんだよっ！？」
「うっ」

そう、律人は実は、この中では一番弱い。

もちろん力ではない、口である。口論になっただら涙目で逃げるのは律人だというのに、彼はちよっかいをかけるのをやめなかった。この年頃の少年に、よく見られる心理である。

そう、すなわち “好きな人に、構いたい” という。

あらゆる意味で茨の道であると言うことにも気がつかず、律人はアリアに懸想をしていた。

彼にとつての障害は、シフターの的なものではない。言うまでもなく、颯真である。

「おい、きいてんのかっ!」

「やめなよ、りっくん!」

完全に無視を決め込むアリアの反応に、律人は涙目だった。

意地悪をしてくる少年に構ってあげるほど優しくはない。のではなく、日差しに包まれて和むことの方が、律人に反応することよりも遙かに優先順位が高い。

ただ、それだけの話だった。

「もうーなに?りっくんうるさいよぉー」

アリアはそういうと、嫌々ながらも起き上がった。

それに続いて、桜も起き上がる。

律人は漸くアリアが起き上がったことに嬉しく思い、早速からかうとするが、すぐに言葉を詰まらせた。

アリアとの和やかな一時を邪魔された桜が、無表情ながら恐ろしい雰囲気で見つめていたのだ。

「それで、なにかようがあったんじゃ……りっくん?」

律人は小首をかしげて己の名を呼ぶアリアを、“可愛い”などと思っていた。

……現実逃避である。

顔色は、颯真に塵芥ちりあかにされた某マッドサイエンティスト並に青白い。

「だいじょーぶ？かぜ？」

そんな律人と桜の事情など気がつきもせず、アリアは律人の顔を覗き込んだ。

そして、熱を測るつもりなのか、自分の額を律人の額に合わせた。

「あう」

「ちよつと熱い？」

律人の顔が、白から赤に変化した。

紅白というめでたい色だが、アリアの後ろで般若の顔をしている桜のことを考えれば、素直に顔を赤くしたままではいられなかった。

「アリア、わたしはりつとと、ちよつとはなしをしてくるから」

「あ、うん」

桜はそういうと、必死に桜から目を逸らしていた律人の後ろに回り込んだ。

そしてその首に手を添えると、少しだけ力を入れた。

「ぐえっ」

蛙の潰れたような声を出して、律人は蒼白な顔で身体を傾かせた。

桜は、律人の身体が倒れきる前に羽交い締めにして、そのまま引きずっていく。

「ねえたつくん、りつくんだいじょうぶかな？」

「どうだろう……」

アリアの心配そうな呟きに、巧巳は肩を落としてそういった。

そんな巧巳の肩を、七海が同情するように叩く。
実際同情するだけで何のフォローも入れない辺り、このメンバーで一番の苦勞人が誰であるか、指し示しているようにも見えた。

十

授業開始前には、律人は桜と一緒に戻ってきた。
律人の言葉は何故かカタコトになっていて、その姿に巧巳がひっそりと涙を流していた。
律人はまるで別人のような爽やかな笑顔で席に着くと、妙に良い姿勢で授業の準備を始めていた。不気味である。

「りっくん、なんかへんだね」
「そんなことないとおもう」

桜が間髪入れずにそういうと、アリアは戸惑いつつも頷いた。
あまりに迷いのない返答だったために、丸め込まれてしまったのだ。

アリアは、気にするべきではないのだろうと自分を納得させると、授業の準備を始めた。

これから行うのは、算数だ。アリアの得意な科目の、一つである。

「はい、皆さん席についてくださいね」

教室の扉が開き、女教師が入室してきた。

赤茶のセミロングに、焦げ茶の目の若い女性だ。

彼女の名前は“式浜奈々子”……アリア達の、担任教師である。

やや気弱だが、若いながら熱意溢れる、子供達から人気の教師だった。

「あれ？今日は大人しいね、律人くん」

奈々子は教科書を広げながら、教壇の正面の席に座っている律人を見て、そう思った。

律人は普段、授業が始まるギリギリまで騒がしい。それなのに今日は、奈々子に怒られるまでもなく大人しくしていたのだ。

奈々子はいかに自分の気持ち伝わったのかと密かに喜んでいたが、勘違いである。

「それでは、今日は」

春の日差しにくるまれると、頭と身体がふかふかの枕とベッドを要求してくる。

その意識を奪おうとする羊の群れをなんとか退治しながら、アリアは授業に耳を傾けるのだった。

眠気に耐えきつた、放課後。

大きく腕を振り上げて背筋を伸ばすと、アリアの耳に背中の中の鳴る心地よい音が届く。
ぐっと止めていた息を吐き出すと、自然と強ばった身体から力が抜けた。

「おっわりー」

学校は楽しいし、勉強も好きだ。

けれど、放課後に友達と集まったり、颯真と一緒に居たりすることの方がずっと好きだった。だから、この終業のチャイムは、他の児童達同様心地よいものだった。

「アリアちゃん、かえろー」

「かえろっ」

七海と桜に右手を差し出されて、アリアは両手で以てそれを掴んだ。

「うんっ」

すると、七海と桜の間にアリアが立つ形になった。手を繋ぐときに感じる、友達の温もり。アリアはそれが、好きだった。

アリアが歩き始めると、それについて行くような形で律人と巧巳も歩き出す。

彼らも、なんだかんだと言ってこうして一緒に帰っていた。

律人は少し意地悪なことも言うが、それも“日常”の内になっっているので、アリアは気にしていなかった。

そもそも、律人は本当に嫌なことは言わない人間だった。

少したが過ぎたことを言ってしまうことは確かにあるのだが、すぐに謝ることが出来るのだ。

そう、本当に嫌なことを言う。

そんな人間が　この学校には、いるのだ。

「源！」

廊下を歩くアリアの背後から聞こえる、男性の声。

アリアの顔が強ばり、桜と七海が眉根を寄せる。

律人と巧巳まで、あからさまに嫌そうな顔をしていた。

「　やまうちせんせい」

手をほどき、嫌々ながらも振り向いた。

髪を短く刈り上げた、筋肉質な男性。

服は白いラインの入った青いジャージで、首からはホイッスルを提

げていた。

その目に宿るのは、蔑みの色。強調してこそいないが、目でアリアを疎んでいた。

「まだ”染めているのか！早く染め直してこいと言ったはずだ！」

幼い子供相手にそう怒鳴りつける。

この男の名前は“山内健吾”　この小学校の体育教師で、生活指導の先生である。

「せんせー、アリアちゃんのは“じげ”です」

「そめてねーっていつてんだろ」

ジト目でそう告げる七海と、アリア側に立って嫌そうに言い放つ律人。

律人はさりげなく、アリアを庇う位置に立っていた。さりげなさ過ぎて誰も気がついていないが。

「地毛で灰色になんかなるはずがないだろう！そんなこともわからないのか！」

自慢の白銀色の髪を貶されて、アリアは眉根を寄せた。

アリアの周りの大人達は、アリアの髪を褒めてくれる。颯真は声にこそ出さないが、嫌なことは嫌と言ってしまえる人なので、嫌ではないと知っていた。

「おいしやさんのしょーめいしょだつてあるよ！」

「医者がそんなことまでするか！いいから黒に染め直せ！最近のガキは何を考えているんだ……」

その見下す目が、アリアはなによりも嫌だった。
颯真にも“ガキ”と呼ばれたことはあったが、これほどの嫌悪感
はなかった。

その“嫌な目”から逃げたくない一心で、アリアは健吾を真っ向か
ら見上げて見せた。

「なんだその反抗的な目は？子供のくせに、大人に逆らうのか？…
…来い！たっぷりと指導してやる！」

生徒指導室に連れて行こうと、アリアに手を伸ばす。

それを防ぐために七海と桜がアリアを庇うように立ち、それと同時
に巧巳と律人が動いた。

アリアに掴みかかろうと近づくと、巧巳が足を引っかける。

そして、体勢を崩した健吾の後ろに回った律人が、その背を押した。

「おおっとてがすべったっ！」

「あしがすべりました！」

「うわっ！？」

アリアにひれ伏す形で、健吾はその場に転んだ。

それを見届けてから、律人と巧巳が走る。

「いくぞっ！」

「りっくん……うんっ！」

律人の言葉に従い、アリア達も走る。

膝を打って痛みで立てないのか、健吾はまだ蹲っていた。

そんな健吾に、七海が一言だけ残す。

「そこはおふとんじゃありませんよ。ゆかでねないてください」

「ぐっ……、き、貴様らっ！待て！」

大人しい七海から吐かれた自然でキツイ毒舌に、健吾は顔を真っ赤に紅潮させた。

眩かれるように言われたその言葉はアリア達には届かなかったが、偶然近くにいた巧巳は聞いてしまい、顔を引きつらせていたのだった。

十

喫茶店へ続く道のりで、アリアは大きく息を吐いて、肩を落としていた。

明日は授業参観。だというのに、不安で胸がいっぱいだった。

颯真が来ないかも知れない。

実のところ、そんな心配は欠片もしていない。

それよりも、健吾が颯真に嫌なことを言うかもしれないということの方が、ずっと苦しかった。

桜達とも別れて、一人で歩く。
やがて見えてきた喫茶店の看板を見て、胸に広がった不安を覆い隠す。

曇った顔を、颯真に見られたくはなかった。

嫌な気持ちに蓋をする意味も込めて、走って帰って、大きく声を上げた。

「ただいまっ！……あれ？」

だが、ドアを開けても颯真の姿は見えなかった。
そのことに首をかしげながら、アリアは店内を歩く。

「お帰り、アリアちゃん」

奥の席から聞こえた声に、アリアは顔を上げた。

黒い髪にセミロングの女性。この喫茶店の、本当に数少ない常連客。地元の大学生で、“御條莉奈”という名前だ。

「りなさんっ……おとーさんはどこにいるか、しっていますか？」

身体の前で手を合わせて、一生懸命丁寧な口調で訊ねる。

背筋をまっすぐ見せようと頑張っている姿は、この顔の怖い店長の居る喫茶店の、オアシスと言えた。

「店長さんなら、買い出し」

客を残して、である。

あの顔で“任せた”と言われて断る勇気は、残念ながら備わってい

なかった。

そしてそのまま“任された”莉奈は、やってくる人に颯真が買出しに行っただけということを伝えるために、こうしてここに残っていた。

「あう……ごめんなさい」

「うん、別にいいよ」

莉奈はそう、笑って許す。

アリアは申し訳なさそうな顔を戻して、安心したように息を吐いた。莉奈は時折、こうして“任される”のだが、報酬なのか、たまに試作メニューを無料で味わうことが出来る。

味が気に入って、通い始めたのだ。この報酬は、莉奈としても望むところだった。

「なんだか、浮かない顔してるね」

莉奈は、見かねたようにそういった。

アリアのやせ我慢など、お見通しだ。それは颯真だって、同じだったことだろう。

「え？」

だが、気がつかれると思っていなかったアリアは、困惑していた。隠し通せたと思っていた自分に恥ずかしくなり、少しだけ頬が赤くなる。

莉奈はそんなアリアに笑いかけると、立ち上がってアリアの後ろに回った。

そして、抱き上げて自分の正面の席に座らせた。

「さて、と。源さんが帰ってくる前に、お姉さんにちょっとお話し

てみよう?」

颯真が帰ってくる、前に。

その言葉を反芻して、考える。

このままこんな表情をしていたら、見破られてしまう。

心配を、かけてしまう。

そのことが心苦しくて、アリアは逡巡してから、口を開いた。

「あのね、がつこうで」

その思いの丈を、アリアはゆっくりと語り始めた。

そして、話が進む度に、莉奈はアリアに感づかれないうちに怒りを抱いていた。

小さい子に“当たる”不条理で理不尽な教師。

これならば、小さい子に優しいという分だけ、彼女の幼馴染のロリコン学生の方が何倍もマシだった。

「源さんが、嫌な気持ちになっちゃうんじゃないかって、心配なんだね」

「うん……」

もしかしたら、授業参観に呼ばない方が良いのかも知れない。

そんな感情を抱いているのであるうアリアに、莉奈は優しく語りかけた。

「でもさ、そのことを言わないっていうことの方が、源さんはずっと“嫌”だと思つよ」

首をかしげるアリアに、莉奈は正面から言葉を重ねていく。

「大切なアリアちゃんに、頼られないって思ったら、源さん、悲しくなっちゃうんじゃないかな？」

「おとーさん……かなしくなるの？」

莉奈は「そうだよ」と言い、続けていく。

その言葉は優しく、アリアの胸に響いていく。

「アリアちゃんが嫌だって思ったら、源さんに頼るんだよ。助けてって、しっかり言うの。そうしたら、源さんも嬉しいと思うんだ……だって、大好きなアリアちゃんに、信頼されているって感じられるから、ね」

「だいすき、な……うん……うん　　ありがとうっ！りなさん！」

一転して明るい表情になる、アリア。

扉に背を向けているアリアは気がつかないが、莉奈の視線の先では、入るに入れない大きな影が見えていた。この親子の様子が温かくて、莉奈は好きだった。

「ちっ……今帰った」

「あっ、おかえり！おとーさん！」

椅子から飛び降りると、走って颯真に飛びつく。

颯真は足にしがみつくアリアを持ち上げると、右手一本で抱き上げた。

「おとーさん、あんまりりなさんにめいわくかけたらだめだよ！」

「迷惑だったか？」

「いいいいいい、いいいいっ！……！」

ちぎれるのではないかと心配したくなるほど首を振る莉奈に、アリアは安心していた。
颯真から威圧感を感じなかったので脅しはしていないだろうと思いついたのだが、実のところ照れ隠しの強い視線は送られていたため、怖かった。

「試作品のケーキがあるから、御條と一緒に食べ」
「うんっ！ありがとうございます、おとーさんっ」

多少恥ずかしくても、娘の悩みを聞いてくれたのは事実。
だから颯真は“いつも”のように、気合いの入れたケーキを振る舞うのだった。

十

授業参観日、当日。

児童達が、今日この日を緊張と気恥ずかしさを覚えながらも、心待

ちにしていた。

普段見せることが出来ない、学校での様子。

ここで張り切り、お小遣いアップを目指すのだ。

そうして気合いの入った子供達の様子に、奈々子は顔を綻ばせた。

子供が子供らしく、楽しそうに笑っている。

そのことが、奈々子はなによりも好きだった。

子供の笑顔が好きで、子供を笑顔にしたいくて、結果として子供を導く小学校教師になった。

その本懐が、ここにはあるのだ。

前の席で目を輝かせる、銀髪の少女を見る。

この少女……アリアからは、日頃から“おとーさん”の自慢話を聞いている。

格好良くて、頼りになって、ちょっと照れ屋で、力強く、すごく優しい。

子供からそんなにも好かれる“素敵なる人”に合うのが、子供を導く人として、奈々子は楽しみだった。

この小学校 董ヶ丘すみねがおか小学校の授業参観は、一日通して行われる。増えてきた共働きの両親の家庭でも、時間を調整しやすいように、という配慮だった。

一時間目から、子供達の保護者が顔を見せ始めていた。

学校でどのような生活をしているか、両親が居る以上普段の気が抜けた態度を取ることが出来ないが、それでも勉強をしている姿勢を見ることは出来る。

その様子を、保護者である大人達は、優しい笑みで見ている。

授業を進めていくと、奈々子の耳に足音が届いた。革靴でタイルを叩く音に、一時間目にしっかりと間に合わせる事が出来なかった親御さんなのだろうと、奈々子は苦笑した。焦るあまり、足音を立てしまうことを抑えきれない。そんな両親は、数多くいる。

やがて、教室の後ろの扉が、開く。

その姿に　　誰かの、息を呑む音が聞こえた。

オールバックの髪は、宵闇を思わせる夜の色。

黒曜石の様な漆黒の双眸は、刃を思わせるほど鋭い。

高い身長を包む、喪服のように黒いスーツは、死神の風貌で。

その上から羽織る灰色のコートは、くすんだ色の死装束。

その“道”の人でも凍り付くような威圧感を放つ男が、場違い極まりない姿で立っていた。

「おとーさんっ」

笑顔で手を振るアリアの姿に、奈々子は現実に引き戻された。

アリアに向かって気怠げに手を振り返す姿こそ、彼女と彼が親子であるという証明だった。

アリアの語る、格好良く、素敵なお父さん。

その真実に、奈々子は密かに胃の痛みを感じていた。

そして、ぎこちなくも授業を再開する奈々子の様子に、颯真の後ろに立っていた村正が、小さくため息を吐いてから、桜に手を振っていた。

授業参観はまだ、始まったばかり。全てが全て、“これから”である。

元来気弱な奈々子は、その事実にも、突然胃薬が欲しくなるのだった。

だが、そうは言っていられない。

自分は教師で、今は授業中。だったら、やることは一つだ。

「それでは、この問題がわかる人は……」

三足す二という簡単な算数の問題を、黒板に書く。すると、少年少女達が元気よく手を振り上げた。

「はいっ！」

その中でも、一際強い瞳で奈々子を見るアリアの姿に、奈々子は頬を緩ませる。

大好きなお父さんに、良いところを見せたい。

そんな幼い願望が、明るい双眸に込められていた。

「はいっ、それではアリアさん」

「はい！っ、です！」

「正解です。良くできましたね」

奈々子がそう言って褒めると、アリアは満面の笑みで振り向いた。視線の先にいた颯真は、周囲に気がつかれない程度に薄く笑うと、すぐに表情を引き締めて頷いた。

笑顔に気がついたアリアは、頬を紅潮させて、微笑みながら座る。

教壇に立つ奈々子も位置の関係上その笑みに気がついていて、心が温かくなるのを感じていた。

見た目で判断してはいけない。

間違いなく彼は、アリアの“素敵なお父さん”なのだから。

だが、そんなに簡単に割り切れるはずもなく。

「はい、律人くん」

「えーと……ろく！」

「正解ですっ」

「巧巳くん、どうぞ」

「なな、ですか？」

「正解ですよ」

「桜さん、七足す三は？」

「じゅう、です」

「はい、良くできましたっ」

他の子供を当てる度に増していく、威圧感。

その内殺気に変わるのではないだろうかと思わせるその重圧感に、奈々子は教師としてのプライドだけで耐えていた。胃薬が保健室に置いていなかったら、倒れそうである。

そんなことを考えながら、奈々子は笑顔を引きつらせまいと頑張るのだった。

休みの度に、奈々子は保健室で貰ってきた胃薬を飲んでいた。

それも漸く終わり、やっと放課後がやってきた。

今日は、両親と家に帰るために、多くの保護者と子供が帰宅の用意をしたまま待っていた。

大人同士の会話も子供同士の会話も、時間がかかるのだ。

颯真が村正となにやら会話をしている間、アリアは桜達と人の少なくなつた廊下で話をしていた。今日は存分に活躍することが出来て、嬉しかったのだ。

そんなアリア達の気分を、壊す声があった。

「まだ直していないのか!」

その声を張り上げる体育教師の言葉に、眉を寄せる。

健吾は、直接親に言いに行く前に、説教をしてやるうと思っていたのだ。

ちなみに、まだ颯真のことは、見ていない。

「両親はどこにいる？」

「おとーさんは」

いざとなったら、頼る。

信頼しなければ、颯真を悲しい気持ちにさせる。

だから、詰まった言葉を呑み込まず、どこにいるのか告げ……ようとした。

「お父さん？母親は？」

「いないもん」

その言葉に、一緒に居た桜達は厳しい表情をした。

大人の言うことではない。それくらいは、解る。

「いない？ ああ、そういうことか」

ニュアンスから判断したのか、健吾は“いない”の意味を汲み取った。

だが、汲み取ることが 必ずしも“良いこと”に繋がるとは、限らない。

「はあ……それも、片親“だから”……か」

その目に宿るのは、憐憫だった。

哀れみの込められた目に、アリアは唇を噛みしめた。

桜の周囲には風が渦巻き、七海も顔を強ばらせる。

律人と巧巳も、良く意味はわかっていなかったが、怒っていた。

「ちつ、仕方ない。それなら、父親のところに」
「今、なんと言いましたか？」

見下し続ける健吾の背後から、凜とした声が響いた。

健吾が怪訝そうに振り向くと、そこには奈々子が立っていた。

奈々子はそのまま歩いて、アリア達を庇うように立ち、頭二つほど高い健吾の顔を睨み付けた。

「おや、式浜先生。まったく、貴女が甘やかすから子供達がこつやつて」

「取り消してください」

颯真に怯えていた女性とは思えないほど、強い声。

その声に、健吾は首をかしげた。

「はあ？」

「彼女は朗らかに笑い、友達を大切にする、普通の少女です。誰よりも心優しい女の子です」
“片方しか親の居ない、可哀相な子供”ではありません。取り消してください」

矢継ぎ早に、そう告げる。

気弱な彼女“らしく”ない、想いの込められた強い“言葉”に、健吾は身じろいだ。

「な、何を言っ……」

「取り消しなさい！」

見上げられているはずなのに、自分よりもずっと大きい。

健吾はそんな錯覚を感じて、身体を引かせた。その時点で、彼の負けだ。

健吾は、負けたのだ

奈々子の“想い”に。

「う　　あ……………ぐ……………わかり、ました。申し訳、ありません」

そういつて、軽く目を伏せて、小さく頭を下げる。

アリア達はずっと、健吾が大きく見えていた。

だが、こうして見ると、奈々子の方がずっと大きいように見えていた。

「謝るべきなのは、誰にですか？」

「ぬぐ……………源……………すまん」

アリアに向かって頭を下げた健吾に、一番驚いていたのは、他ならぬアリアだった。

アリアは戸惑いながら奈々子を見上げ、奈々子はそんなアリアに柔らかに微笑んだ。

「わかってくれたなら、いーよ」

そういつて、アリアは謝罪を受け入れた。

健吾が肩を落としてその場を去ると、奈々子はしゃがみこんで、アリアと視線を合わせた。

「アリアさん……………良くできましたね」

奈々子はアリアの頭に手を乗せると、優しく撫でた。

アリアは頬を赤くしながらも、嬉しそうに頷いた。

「すっげーっ！せんせーかっこいいー！」

「ぼんやりとしたひとだとおもっていましたが、すごいんですね！」
「うん、せんせい！すごい！」
「みなおしました」

上から、律人、七海、巧巳、桜である。

七海は、さりげなく非道いことを言っていたが、好意からの言葉だとは解っていたので、奈々子は顔を引きつらせるに止めた。

子供達の笑顔。

それが奈々子は、何よりも好きだった。

だから この笑顔のためならば、頑張ることが出来るのだ。

十

健吾は、人気のない廊下をぼんやりと歩いていた。
瞼を閉じて浮かべる姿は、小さい身体で自分に啖呵を切った、女性
だった。

「はあ 奈々子先生」

そういつてため息を吐く。

頬に朱を刺すその姿は、控えめに言っても“気色が悪い”様子だった。

「素敵だ」

そう、先ほどの一件で、健吾は奈々子に惚れたのだ。

惚れたの女のためならば、もっと子供に優しくしよう。

健吾はそう考え始めていた。

人間、そんなに簡単には変われない。

だからこの日は、健吾にとって大きな“転機”だった。

それは、奈々子に惚れたと言うことだけが、理由ではない。

これまでに感じ取れた訳ではない これから、感じるようになるのだ。

主に、彼の後ろに迫る、邪悪な影によって。

「俺の娘が、何か粗相をしたようで？」

後ろからかけられた声に、健吾は夢見心地のまま振り向く。

アリアの父親だろう。健吾はそう思い至っては居たが、一言二言小言を言っつて、笑って許そう……そんな、上から目線なことを、よりもよってこの男に考えていた。

「ああ、源の うひっ」

自分よりも高い身長。

百九十はあるだろうその背から、見下されている。

それも 視線だけで人を殺せそうな、鋭い目で。

「それで、俺の娘が何をしたか……三十秒以内に答えろ」

「へ……あ、あの、そそそれ」

「一、二……面倒だ。三十」

始めから聞く気がないのか、颯真は早々に切り上げた。

実は、丁度奈々子が健吾を呼び止めた辺りから、見ていたのだ。

「片方親が居ないのは可哀相らしいな？」

「いいいい、いえ、そそそ、それは」

「どれ、まずは経験してみるのはどうだ？上も下も、片方ずつにしてやるよ、親指」

颯真は額に浮かんだ青筋を隠そうともせず、ホルスターから銀色の銃を取り出した。

実はまだ持っていたそれを、颯真は「足からか」などと呟きながら照準を合わせた。

「た、たすけっ」

「死にはしねえよ……手が滑らない限り」

「へひっ」

颯真はそう言いながら、わざとらしく手を滑らせて、照準を健吾の股間に合わせた。

そして、既に涙を流していた健吾を一瞥することもなく、引き金を引いた。

ガンッ
「ひうっ」

だが、鳴ったのは、撃鉄の音だけだった。弾切れである。当然わざとなのだから、そうとは思えないほど凶悪な表情だ。

健吾は情けない声を出すと、その場に崩れ落ちた。気を失っているのだろう。目に生気がない。

「終わったか」
「ああ」

そんな颯真に声をかけたのは、村正だった。片親発現は、当然だが桜にも届いている。だから、村正はわかりにくいが怒っていた。この怒りを感じ取ることが出来るのは、目で見てはいない桜くらいだろう。

「言葉はあの“先生”がやってくれたみたいだからな。なら、“こつち”は俺の仕事だ」

そつは言うが、奈々子が言わなかったら、健吾は死にたくなるような毒舌に晒されていたことだろう。さりげなく、奈々子は健吾も救っていた。

颯真はホルスターに銃をしまつと、村正を伴って歩き出す。手を挙げた先にいるのは、娘達の、明るい笑顔だった。

余談だが、その後、爽やかで心優しく生徒思いな、熱血体育教師の姿が見られるようになったらしい。

ついでに、さりげなさを装って奈々子を食事に誘い、撃沈する姿もあつたとか……。

長らくお待たせしました。

番外編その一“授業参観”でした。

律人はやればできる男の子。

でも、やっても気がつかれない不憫な子。

彼らを主軸にしたお話も、いずれ書きたいと想います^^

ですが、今のところ次に何をするかは決まっています。

何か良いアイデアが思い浮かべば、少しずつでも書いていこうと考えています。

ご意見ご感想のほど、よろしく願います。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございます。

何時になるか解りませんが、次回もよろしく願います。

董ヶ丘小学校の教室に、自慢げな声が響いた。

胸を張って“その話”をする律人の前で、アリアは頬を膨らませていた。

「それで、ちゃんと“にんむ”をこなしたってわけだ
「むう」

天狗っ鼻になつて自慢し続ける律人の前で、アリアは反論することも出来ずに呻り声を上げていた。

そんな律人とアリアの間で、巧巳は青い顔をしていた。

アリアの後ろで真っ黒な空気を醸し出している桜と七海に気がついて
いるためだった。

「り、りつくくん、そろそろ……」

「ほら、たくみも“はずかしい”っていつているぞ！」

そんなことは、一言も言っていない。

だがそんな事実は関係なく、黒い空気が巧巳の方にも注がれた。

巧巳は既に涙目になっていて、今にも崩れ落ちそうだ。

「わたしだつて、やればできるもん！」

「やれば、ねえ？」

「むうっ」

膨れるアリアに、律人は胸を張っていた。

子供らしい虚栄心。初めてやって出来たことを、好きな人に自慢したい。

その方向がからかう方に走ってしまうから、彼は良いところが目立たないのだ。

不憫だが、これも自業自得と言えた。

「いいもん！わたしも、おとーさんにたのんでいってくるもん！」
「できないことは、やめておいたほうがいいーんじゃねえのか？」

いつになくうざい様子の律人に、桜の額の血管は切れそうだ。

実は律人は、この空気に気がついて開き直っていただけだった。そこで止めておくのではなく開き直るから、ダメなのだ。

「むう……わたしだって “おつかい” くらいできるもん！」

そう、律人は、母親に頼まれた“お使い”が出来たということをも、自慢していたのだ。

その発端は、偶然頼まれてこなしたと巧巳が話したためなので、巧巳も一緒に怒られることだろう。おそらく、桜が律人、七海が巧巳という役割分担だ。

未だにらみ合うアリアと律人。

その後ろで動き出した、桜と七海。

巧巳は自分の未来を思い描いて……一滴だけ、涙を流した。

五月の始め、そろそろ暑くなってきたこの季節。

禁煙を始めて口が寂しくなっていた颯真は、アリアにタバコの代わりにと勧められた棒付きキャンディーを舐めていた。似合わないこと、この上ない。

骨張った手で丁寧にコップを洗い、片付けている。

冷房を点けるにはまだ早く、暖房を点けるほど寒くはない。

けれど厨房近くは熱が籠もるので、仕方なくドアを開けて風を取り入れていた。

ドアを開ければ、ある程度涼しい。

最近はマスコット（アリア）のおかげで客の入りが良くなってきたので、店にも活気が出てきた。

そうになると、人口密度の関係で暑くなるため、まだ夏にはなっていないというのに“ある程度”しか涼しくならないのだ。

かといって客を追い払うような行動に出る訳にも行かず、颯真は胡乱げにキャンディーを噛み砕いた。

その硬いものを砕く音に客の何割かが肩を竦ませて怯える。

何か気に障るようなことでもしたのだろうか、自分の人生を振り返り始めた客の戸惑いなどに気を向けることもなく、颯真は洗い物を再開していた。

「ただいまーっ」

鈴の転がるような、柔らかく綺麗な音。

この喫茶店最大の“癒し”である、アリアの声だった。

アリアは小さな歩幅で走る。

スニーカーが床を叩く度に鳴る、リズムカルで可愛い音が、客の心を和ませる。

まずは颯真に並んで、手洗いとうがい。

それから生活区の方へ走り、着替えて戻ってくる。

この一連のプロセスは、喫茶店“konzer”の、名物である。

元気の良い足音を立てて部屋から戻ってきたアリアの姿は、綺麗な洋服だ。

カッターシャツに紺のプリーツスカート。

赤と銀色の、チェックのネクタイがワンポイントだ。

いつもより少しだけ、気合いの入った服装。

今日は特別なことでもあっただろうかと、颯真は顎に手を当てて考えていた。

そんな颯真を、アリアは小さく息を吐くことで気合いを入れて、見

上げた。

「おとーさんっ」

「……どうした？」

強い意志の炎が灯る、空色の目。

颯真はその色に“面倒ごと”の気配を感じ取りつつ、しかし顔には出さずにアリアの言葉を待った。

アリアは大きく息を吸うと、頼み事を口にした。

「わたし……“おつかい”がしたい！」

「特に頼みたいものはない」

「っ!？」

颯真は、反射的にそう答えていた。

そもそも、七歳そこそこの子供を一人で出歩かせるのは、色々と危ない。

そんな親ばかな思考を、颯真は顔に出すことなくつらつらと重ねていた。

にべもなく断られたアリアは、大きく目を見開いていた。

こんなにあっさり断られるということが、予想外だったのだが、ここで諦める訳にはいかない。

このままでは、律人に胸を張ることが出来ないのだ。

「おとーさん!わたし」

「ハイ、颯真……っつて、あら？」

アリアが再度挑戦しようと、言葉を紡ぐ。
だがそれも、突然の闖入者によって、あっさりと遮られた。

「ヴィヴィアンか……」

「ええ、ちよつと近くまで来たからコーヒーでもって思ったのだけれど……お邪魔だったかしら？」

褐色の肌にブロンドの髪。

紺のスーツに身を包み、胸元を艶やかに広げた大人の女性。

颯真の友人である、ヴィヴィアンだった。

ヴィヴィアンはカウンター席に座ると、困ったような笑みを浮かべてアリアを見た。

アリアは目を瞠ったままヴィヴィアンに顔を向けて、ヴィヴィアンをますます苦笑させていた。

「そんなとはねえよ。待ってる」

颯真はそんな二人の様子に気を払うそぶりも見せず、コーヒーを煎れる。

一気にタイミングが掴めなくなり混乱するアリアに助け船を出したのは、ある意味元凶ともいえるヴィヴィアンだった。

「何か困りごとがあるのなら、お姉さんに話してみない？アリアちゃん」

そう言って優しく笑うヴィヴィアンに、アリアは幾ばくかの逡巡を見せる。

そして、自分一人の力ではミッションの遂行は難しいと思いつたのか、アリアはゆっくりと頷いて見せた。

「じつは」

話すのは、“事”の顛末から。

今日、学校で起こったアリアの事件。

すなわち、律人の自慢話だ。

「わたしも、りっぱに、おとーさんのやくにたちたい！」

そう言つて自分を見上げるアリアに、ヴィヴィアンは小さな“ときめき”を覚えていた。

小さい子が、顔の怖い旧友のために一生懸命になっている。

ここで力を貸さなければ、女が廃ると意気込んでみせる。

「やらせてあげればいいじゃない、颯真」

「必要ない」

颯真は煎れたてのコーヒーを、静かな手つきでヴィヴィアンの前に置いた。

いつもの颯真ならば、適当に仕事を与えてさつさと“面倒”なことを終わらせるだろう。

なのに今日は、頑なに拒むだけで、一番簡単な解決策を提示しようとしていない。

そのことに、ヴィヴィアンは小さな“違和感”を感じていた。

「まさか、変質者に狙われでもしないかと低い確率を想定して、お姫様を守るように、目の届くところに置いておきたいとか考えている訳でもないでしょう………し？」

ぴたりと動きを止めた颯真に、ヴィヴィアンは声を詰まらせた。まるで凶星だったかのように顔を逸らす颯真の姿は新鮮で、新鮮すぎて気まずかった。

ヴィヴィアンは大きく、大きいため息を吐く。颯真によく、聞こえるように、と。

「アリアちゃん、颯真が“お使い”してほしいもの、思い出したって」

「え？……ほんとっ！？おとーさんっ！」

「なっ、ヴィヴィアン!？」

目を輝かせて、颯真を見上げる。

その純粹な輝きに、颯真は怯んで後ずさった。

清めの塩をまかれた悪霊のような反応に、ヴィヴィアンは小さく苦笑していた。

「あー……っはあ、わかったよ」

「わあーいっ！ありがとっっ、おとーさんっ！」

満面の笑みで、アリアは飛び上がった。

そんなに嬉しそうな仕草をされると今更無かったことになど出来るはずもなく、颯真は右手で頭をがしがしと掻いた。思えば、この仕草をするのも久しぶりである。

ヴィヴィアンと手を合わせて喜ぶアリアを尻目に、颯真はメモと地図と財布を用意する。

一度生活区に戻り、自分の部屋から地図とメモを用意して、続いてがま口の財布を箆笥の奥から引っ張り出した。

何かの折りに購入したのだが、使わなかったその財布に、急ごしら

えで紐を縫い付ける。
縫い物までできるのはすごいが、ギャップがありすぎて違和感を感じる画だ。

それを持って店に戻ると、アリアが行儀良く姿勢を正して待っていた。

大人用のがま口財布は大きめで、畳んだ地図くらいなら入ったので、他に何か持たせる必要はない。

颯真はその紐をアリアの首にかけると、メモを手渡した。

「それに書いてある物を買ってこい。いいな？」

「うん！おとーさん！」

元気よく返事をするアリアに、颯真は満足げに頷いた。

その様子は“血の繋がった親子”と言われても納得することが出来るほど温かい光景だ。

ヴィヴィアンもそんな二人を、目を眇めて優しく見ていた。

気合いは充分。

アリアは、大きく深呼吸をして、初めての“お使い”を開始する。爛々と光る太陽を一身に受けて意気込むその姿は、どこか力強い。

「いつてきますっ！」

「ああ、気をつけていけ」

「うんっ！」

優しいやりとりの後に、アリアは歩き出す。

残された店の者達にとっては、心配はあるが微笑ましい、少し特別な日常のワンシーン。

その余韻に浸ろうと、ヴィヴィアンはコーヒを口にした。

「さて」

おもむろに、颯真がコートを手に取った。

その行動が理解できず、ヴィヴィアンは首をかしげた。

「莉奈」

「あ　　は、はいっ！なんですか？」

ヴィヴィアン同様、端の方の席で余韻に浸っていた莉奈が、突然声をかけられて飛び上がった。もうこの時点で、“嫌な予感”が止まらない。

「“任せた”」

そう一言だけ零すと、颯真はコートを羽織ってサングラスをかけた。そして、そのまま店を出ようとする颯真を、ヴィヴィアンが慌てて引き止めた。

「ちよ、ちよっと！どこ行くのよ！」

「散歩だ」

振り向いたときに、僅かに鳴った金属音。

それがコートに隠された拳銃のものであることに思い至り、ヴィヴィアンは顔を引きつらせた。散歩の目的など、今更問いただすまでもない。

「はあ……私も行くわ」

一人で行かせたら、何をするか解らない。
気分は、手のかかる弟を持つ姉のそれだ。

「ちっ　　勝手にしろ」

そう言って、踵を返す。

離れてしまっ前に追いかける必要があるから、焦っていたのだ。

ヴィヴィアンは一度だけ振り向くと、固まる莉奈に申し訳なさそうな視線を送った。

その視線に莉奈は、ただ悲痛な表情で、首を振った。

アリアを中心とした、波乱の一日は、こうして幕を開けるのだった
……。

学校へ行くにも街へ行くにも、この街で一番大きな川である“竜胆川”を渡る必要がある。

川幅三百メートル余りのこの川に架かるのは、コンクリート製のアーチ橋で、名称を“紫陽花橋”という。

爛々と光る太陽と、突き抜けるような青空の下。

その紫陽花橋の中央で、アリアは地図を広げた。

目的地は、全部で三カ所。

橋を抜けて直進した場所にある八百屋。

八百屋の角を曲がって、公園を抜けた先にある果物屋。

そして、川側へまっすぐ歩いて、通りを抜けた場所にある肉屋だ。

歩くべき道筋に、アリアは小さな白い指を這わせる。

そして、その道程を確認すると、引き締まった表情で頷いた。

気合いは充分。颯真からの任務をこなす準備が、ここに整った。

「よしっ！みつしよんすたーとっ、おーっ！」

地図は左手に持ち、勢いよく右腕を振り上げた。

気分は困難な任務に立ち向かう、秘密のエージェントだ。

意気揚々と歩き出すアリア。

その様子をじっと見つめる影があった。

灰色のロングコートに黒いサングラス。

ウェイター服に、すらりと伸びた背。

黒い髪をオールバックに撫でつけた、三十路間際の男
颯真だ。

もう一人は、女性。

カシミアのコートに、胸元の開いた艶やかなスーツ。
タイトスカートから覗く褐色の足が艶めかしい、ブロンドヘアの女
ヴィヴィアンだ。

建物の影からアリアの様子をじっと伺う二人の姿は、一言で言っ
て“怪しい”。

颯真だけならば、すぐに通報されていただろう。
だが、隣で周囲に謝るヴィヴィアンのおかげで、国家権力を行使さ
れることなく尾行できていた。

色々と問題のある光景だが、気にしてはならない。

「もつつ……信じて待つてあげられないの？」

「俺は散歩をしているだけだ」

「素直じゃないんだから」

颯真が素直でないせいで、ついて行く必要が出てきてしまったのだ。
颯真はもつつ少し、この苦労人の美女を労るべきだろう。

「動いたか」

「隠すなら、もう少し隠そうとして頂戴」

尾行をしていることを隠そうともしない颯真の様子に、ヴィヴィア
ンは眉をひそめた。
眉間の皺を指先でほぐす仕草が、彼女の面倒見の良さを表している
ようだった。

一人、お使いに挑むアリアと、尾行を続ける颯真とヴィヴィアン。
長い一日は、まだ始まったばかりである。

十

橋を渡って一直線。

アリアは大きな道路の前で、立ち止まる。

左を見て、右を見る。

もう一度左を確認すると、笑顔で頷いた。

「かくにんよーしっ！しゅっぱっしんこーっ！」

白い部分の上しか渡ってはいけない。

そんな自分ルールの下、スキップで歩道を渡る。

「ほっぶ、すてっぶっ、じゃんっ、ぶっ！」

向こう側に辿り着くと、両手を挙げてバンザイポーズ。

これで今日一日は良いことのある日だと、アリアは満足げに頷いた。

「うんしょ、こらせ」

八百屋は近いと意気込むアリアだったが、すぐにその足を止めた。大きな荷物を背負った老婆が、おぼつかない足取りで横断歩道を渡るうとしていたのだ。

任務と老婆、二つを天秤に……かけるまでもなく、アリアは老婆に声をかけた。

「おばあちゃんっ」

「うんせ……おや、どうしたんだい？お嬢ちゃん」

柔らかな微笑む老婆に、アリアは太陽のような朗らかな笑顔を見せた。

「おにもつ、おもちしますっ！」

「ほう、立派な子だねえ……それじゃあ、お願いしようかのぉ」

「うんっ！」

アリアは老婆の後ろに回ると、風呂敷袋を両手で支えた。これだけいぶ、楽になるだろう。

信号が青になるのを待って、歩き出す。

黒いところも歩いてしまうことになるが、老婆の方が大切だ。お年寄りには、大事にしよう。奈々子から教わったばかりの、“大切なこと”である。

渡りきって、老婆と和やかに別れるアリア。

その温かい風景を離れたところから見ていたヴィヴィアンは、大きなため息を吐いた。

そして、アリアの行動に感心して頷いている颯真を見た。

「どうして颯真の娘があんな良い子に　　ああ、反面教師ね」

「何か言ったか？ヴィヴィアン」

「いいえ、な・に・も」

それだけ聞くと、興味を無くしたのかアリアに視線を戻す颯真。

真逆の思考パターンでどうしてあんなに仲が良いのか、ヴィヴィアンは理解できずに額を抑えた。頭の痛い限りである。

とにかく、アリアは一つの困難を乗り越えた。

続く活躍をせめて優しく見守ろうと、ヴィヴィアンもアリアに視線を戻した。

視界に収まる、八百屋の看板。

まだこの漢字を読むことは出来ないが、陳列されている青々とした野菜で、この看板に書かれている漢字は“やおや”なのだ、アリアは判断した。

がま口財布から取り出したメモを見て、口の中でもごもごと暗唱する。

メモを見て言えばいいのだが、見ない方が“カツコイイ”と思ったのだ。

「やおやさんっ!」

「へいらっしゃい!……っつて、おお?」

捻りはちまきの中年男性が、響いた声を聞いて奥から出てきた。

だが見あたらない客の姿に首を捻り、そしてすぐに声が幼かったことに思い至って下を見た。

「おう、らっしゃいっ!お使いかい?嬢ちゃん」

「うんっ……えーと、うーんと……」

このやりとりで頭から抜けてしまったのか、アリアは渋々とメモを見た。

第一ラウンドは、アリアの負けである。

「にんじんと、じゃがいもと、たまねぎくださいっ!」

「あいよ!」

男性はビニール袋に注文の野菜を入れると、それをアリアに渡す。

「全部で六百万円!」

「ええっ!?!」

男性は、大きな声で値段を言った。
浪速のおじさんがよくやる冗談。子供のお使いで、誰もが一度は経験する道だ。

「うーんと、えーと……ま、まかりませんか？」

安くしたいと思ったら、こうすればいい。

常連客の一人に教わった、上目遣いの攻撃だ。

混乱から潤んだ空色の目は、男性の父性を刺激した。

「だめ？」

口元に手を当てて、不安げに首を傾げる。

男性はその姿に屈したのか、鼻を抑えて顔を逸らした。

「六……いや、四百円だ！」

「ほんと!?! やったあ! ありがとう、やおやさん!」

「おつよ! 毎度あり!」

アリアは財布から、銀色の硬貨を四枚取り出した。

それを自分の左手の平の上で広げて、念のため数える。

「いちまい、にまい、さんまい、よんまいっ! はい、やおやさん!」
「へい、確かに!」

可愛らしい小さな手から硬貨を受け取ると、男性はだらしない顔で笑った。

そして、元気よく手を振りながら去っていくアリアを、笑顔で見送

った。

「ふう、可愛い嬢ちゃんだなあ」

「辞世の句は、それでいいか？」

底冷えするような、声。

その声に、男性は足がその場に縫い付けられたような感覚を覚えた。頭の後ろに当たる、冷たい感触。

映画でしか見たことのないシチュエーションに自分が立っていると
いうことに、男性は脂汗を流す。

「そうか じゃあな」

声帯は動いてくれず、悲鳴どころか遺言すら残せない。

せめて最後に可愛い奥さんが欲しかったなどと、自分の人生に涙する。

だが、可愛い奥さんと考えてつい先ほど別れたアリアが思い浮かぶ
辺り、この男も相当“ダメ”な分類の人間である。

ちなみに、可愛くない奥さんなら、いたりする。

大きく目を瞑って、その衝撃を待つ。

だが、いつまで経っても訪れない自分の最後に、男性は首をかしげ
た。

それどころか、威圧感まで消えている。

「あれ？」

「アンタ！そんなところでなにぼうつと突っ立てるんだい！」

「へあつ、か、かあちゃん!？」

奥から出てきた恰幅の良い女性に引きずられて、男性は店の中へ戻っていく。

彼女は、男性の“可愛くない”女房だった。失礼である。

そしてその、未だ疑問に包まれながら引きずられていく男性を見る、人影があつた。

言うまでもなく、颯真とヴィヴィアンである。

ヴィヴィアンは大きく息を切らせながら、慄然とした表情で立つ颯真を見た。

「何を考えているのかしら？」

「あの男が、死にたそうに」

「それまさか、言い訳のつもりじゃないでしょうね？」

縦に割れた瞳孔で自分を睨む、ヴィヴィアンの視線。

後ろ暗いのか、颯真はその視線から目を逸らした。

「アリアちゃんの父親を、犯罪者にするつもり？」

二人続けて父親が犯罪者。

そのことに言われて気がつき、颯真は気まぎれに頭を掻いた。

アリアを一々絡めないとろくに説教も出来ないが、アリアを絡めれば聴く分だけ今までよりはマシだろうと、ヴィヴィアンは大きくため息を吐いた。

「あー 次からは、上手くやる」

「その思考回路をどうにかしなさいっ！」

だが結局変わらず、ヴィヴィアンは思わず声を張り上げる。
ヴィヴィアンにとって颯真は、頼りない兄か大きすぎる弟なのだ。
そう、少なくとも、今は。

「さて……置いていくぞ」

「っ……もうっ、待ちなさい」

振り返ることなく歩き出す、颯真。

ヴィヴィアンは額を指でほぐしながら、そんな颯真の後を追いかけた。

十

八百屋で野菜を購入したアリアは、満足げに歩いていた。
野菜の入った袋は重い、足取りは軽い。

「ふぁーすとみっしょん、くりあっー！」

眩く言葉は、映画の受け売り。
ダンディなエージェントが、映画の幕間でそう眩くのだ。

アスファルトを踏みしめて歩いていると、公園にさしかかる。
地図を開いて確認すると、公園を抜けると近道になることが解った。
思わぬ抜け道に、アリアは顎に手を当てて笑う。

この仕草も、映画の受け売りだった。
エージェントが、敵の要塞への抜け道を見つけたとき、こうやって
笑うのだ。

「よーしっ、れっつごーっ」

秘密の抜け道を通るのなら、声は潜める。
興奮が抑えきれないせいか、声は大きいままだが、そのトーンで意
図はわかる。

ひっそり行こうという、心構えであった。

アリア達の暮らす菊ノ瀬市で一番大きい公園が、この芍薬公園しやくやくこうえんであ
る。
アスレチックに噴水、小さなメリーゴーランドと、子供達にとって
の絶好の遊び場所というだけでなく、近所のカップルのデートスポ
ットでもあった。

そのため、アリアは昼間からいちゃつくカップルや、元気に遊ぶ子
供達の合間を縫って進まなければならなかった。

これは、遊びたい盛りの子供にとっては、大きな試練でもある。

「むむむ」

噴水の側で遊ぶ子供達。

男女の遊びに拘らず楽しいことが好きなアリアは、混ざりたい気持ちをぐつと我慢する。

天真爛漫な人柄のおかげか、知らない子供達ともすぐに溶け込むことが出来るのだ。

「あう」

縄跳び、サッカー、ケイドロ。

おままごとやあやとりも好きだが、バスケットボールなんかも好きだ。

「あれー？アリアーつきょうはあそばないのっ？」

「おーい、こっちにはいれよ、アリア！」

「むう、アリアちゃんはわたしたちとおままごとするのっ！」

そうやって輪に加わり、一緒に遊んで仲良くなった子供達。

沢山の友達からの誘惑に、アリアの心は傾きそうになる。

ふらりと足が向き、感情よりも深い本能が、アリアを遊びの誘惑へと導く。

けれど、アリアは……ぐつと踏みとどまった。

いつもと変わらない、朗らかな笑顔。

それを浮かべて、友達に手を振る。

「ごめんねーっ、わたしいま、みっしょんのさいちゅーなんだっ！」

そう言つて、拙いウインクをして見せた。
すると、男の子の何割かは、顔を赤らめて引き下がる。
女の子はそんな男の子達をジト目で見ながら、アリアの笑顔を見て
やはり引き下がった。

「またあそぼうねーっ」

「やくそくだかなあーっ」

「サッカーボールもつて、まってるぞ！」

「アリアちゃんは、わたしとあやとりするからだめっ！」

口々に、子供達はまくし立てた。

アリアはその勢いに、負けじと大きく頷いた。

「うんっ！またねっ！」

手を振つて、歩く。

未練を残さないためか、今度はさっきまでよりも早足だ。

決断したのなら、即行動。それが、任務遂行への近道なのだ。

誘惑を振り切り、歩き出すアリア。

……その姿を、木陰から見守る、颯真とヴィヴィアン。

ヴィヴィアンは、草木に身体を隠す自分の情けなさに、泣けてきて
いた。

せめて颯真にアリアの十分の一程度でも優しさや思いやりがあれば、
こんな気苦労は必要なかったのだろう。

そう思うと、ヴィヴィアンとしてもやるせない。

「いや、多いわね。百分の一でもいいわ」

思わず、声に出してそう呟いた。

十分の一もあつたら、それは颯真ではなく、颯真の皮を被った別のイキモノだ。

ヴィヴィアンも、たいがい失礼である。

巻き込まれている以上、言う資格はあるのだが。

ここでふと、ヴィヴィアンは颯真が大人しいことに気がついた。伏せていた目を開き、顔を上げる。

そして……視線の先に颯真が居ないことに、顔を青ざめさせた。

慌てて周囲を見回すと、颯真の姿はすぐに見つかった。

「もうっ……本当に、手がかかるんだからっ」

子供に対して言うように呟くと、颯真の後を追いかける。

今度はアリア関連で何が起こったのかと、颯真の視線の先にいる男の言葉に、耳を傾けた。

「ハアハアッ……銀髪美少女……ハアハアハアッ」

真性だった。

ヴィヴィアンは、颯真を止めようとした手を引いて、ついでに脂ぎった男から顔を逸らした。

なるべく視界に納めない。それが、精神衛生を保つコツである。

「な、なんだおま……へぶっ」

「ちょ、ちょっと、まっ……ふんぐっ」

「な、ななな、なん、なん……あるぶっ」

数回の、打撃音。

その後すぐに聞こえてきた、サイレンの音。

これは、変質者として脂ぎった男が通報された為なのだが、そんなことは知らない颯真は慌ててその場から立ち去った。

「あ、ちよつと！」

ヴィヴィアンは、勢いよく走り出す颯真を追いかけた。

颯真が去った後の公園。

そこで、一部始終見ていた子供達が、小さく呟いた。

「だーくひーろーだっ」

あながち、間違いではない。

この後、この子供達は、親に一部始終を話して、暴力はいけなさとみっちり教え込まれるのだが……それはまた、別の話である。

公園の誘惑を振り切ったアリアは、何度か角を曲がりながら順調に進んでいた。

塀の上にいる猫に和み、吠えてくる犬に飛び上がりながらもめげずに進むと、目的地の一つである果物屋に辿り着いた。

「みつけたっ」

陳列されている果実。

その色とりどりの果物は、アリアの食欲を促す。

だがその誘惑を、アリアは頭を振ることで払った。

思い浮かべるのは、颯真の料理。

颯真の作る料理を待った方が、絶対に“おとく”なのだ。

「くだものやさんっ！」

「はいよっ、おや？お嬢ちゃん一人かい？」

出てきたのは、口調に反して若い女性だった。

薄茶色のショートヘアの上から、トラ柄のパンダナを巻いている。

この女性は果物屋の一人娘で、次期店長である。

「えーと……りんごっ」

と、そこまで言って。言葉に詰まってしまっ。

暗唱できたのは、名称だけ。数は頭から抜けてしまっていたのだ。

「りんごを、ふたつくださいっ」

結局メモを見てしまったので、判定負けだ。だが、勝利には一步近づいた。アリアは、前向きなのだ。

「お使いか……偉いねえ。ほらっ、りんご二つで百七十円だよ！」
「ありがとうっ、おねえさん！」

アリアはりんごの入った袋を受け取ると、がま口財布を開いた。百円硬貨を一枚出して、それを女性に渡す。それから、穴の開いた五十円硬貨を一枚渡して、今度は銅色の十円硬貨を二枚、自分の手のひらに載せた。

「いちまい、にまい、はいっ！」
「おっ、賢いじゃないか。ありがとうねっ！」
「えへへ……うんっ」

女性に褒められて、アリアも上機嫌だ。

りんごの袋も持つと、想像以上に重かった。それでもアリアは気合いを入れて、運んでいく。

女性はその姿を、和やかな表情で見送った。

「りんごを一つ、貰えるか」
「はいよっ！……っつて、源の旦那」

続いてかけられた声に、女性は驚いたように言った。颯真はここを定期的に利用しているのだが、まだその時ではなかつ

たはずだ。

「はいよ、一個“百円”だ」

「ああ、ほら」

颯真が取り出したのは、一万円札だった。

女性は笑顔で受け取ると、お釣りをレジから用意しようとした。だがそれは、他ならぬ颯真によって止められた。

「釣りは要らん」

「え？そんな、珍しい」

万年金欠で、割と金勘定はキッチリ行う颯真の言葉に、女性は目を丸くしていた。

「“娘”が世話になったからな」

「ふふ、不器用でごめんなさいね」

ぶっきらぼうにそう言つと、颯真はリングを嚙りながらその場を去る。

その後に続くように、ヴィヴィアンが柔らかい笑みを残していった。

「へ？　むすめ、むすめ、むす、め……………娘っ!？」

颯真とヴィヴィアンの後ろから、女性の驚く声が響き渡った。

川側へ近づくと、そこに見えるのは牛の看板。
今日、最後の目的地である肉屋を視界に納めて、アリアは歓喜の笑
みを浮かべた。

一直線に走り、肉屋のケースに張り付いた。
大きく深呼吸をして、今度こそと意気込む。

「おにくやさんっ!」

だが、返事はこない。

アリアは、押し負けそうになる心に渴を入れて、立ち向かう。

「おにくやさんっ!」

これが“ぶれっしゅー”かと、アリアは小さく呟いた。
意味は理解していないが、大体あっている。

「おにくやさんっ!」

「はいっ!ねねね、ねてませんよっ!」

若い男性の声がした。

アリアは漸く届いた声に、一息吐いて安心した。

黒いぼさぼさの髪 of 男性。

アリアは何処か見たことのある顔に首をかしげて、男性はアリアを見て頬を染めた。

肉屋でアルバイトをしているこの男性は……十二月の雪の日に、颯真に撃退されたロリコン学生だった。

「君、アリアちゃん、だよな？」

「あれ？おにーさん、わたしのことしってるの？」

事前に調べておいた名前を、口にする。

情報源は、彼の幼馴染だった。

「俺はね、莉奈のお友達なんだ」

「りなさんの？」

アリアは思い至ったのか、両手を打って頷いた。

男はその仕草に、密か和んでいた。

だが、警戒されては元も子もないので、顔には出さない。

「りなさんが、“りなのおともだち”ってなのおとこのこには、ちかづくなって！」

「ぬぐ……莉奈め、余計なことをっ！」

身を引かせるアリアを見て、男性は呻り声を上げた。

実はアリアは、莉奈から“こついう態度”をとるようにと言われていただけで、実際のところよくわかっていなかった。

「ま、まあいい、これからチャンスは、いくらでもあるんだ」

そつぶつぶつと呟く姿は、はっきりと言って不気味だった。

「お兄さんは、笹上政臣っていうんだ。よろしくね、アリアちゃん」
「うんっ！まさおみさんっ」

銀髪の美少女から“さん”づけで呼ばれるという状況に、新しいものを感じて悶える。

すぐに通報されてもおかしくはない姿だった。

「それで、今日はどうしたんだい？」

「あ、うんっ……………えーと、うーんと」

間に濃厚なやりとりを挟まれてしまったせいで、アリアの頭から情報が抜けかけていた。

だが、ここで諦めるアリアではない。

自分は、百戦錬磨のエージェントなのだと言いつける。

「あつ　ぎゅうばらにく、にひやくぐらむくださいっ！」

三ラウンド目は、アリアのKO勝ちだ。

粘りに粘った左アッパーが、見事に炸裂した瞬間だった。

要望を聞き、政臣はガラスケースを見る。

牛バラ肉、残っているのは国産和牛で少し値段が高い。

だがここで安めに売れば、親にも伝わって自分の印象が変わるかも知れない。

政臣は、その“親”が近くで見ていることも知らずに、そんな打算
を実行した。

……浅はかである。

「はい！二百グラムで、千円だよ！」

「ありがとう、まさおみさんっ」

アリアはがま口財布から、野口英世を一枚取り出した。
そしてそれを、笑顔で政臣に手渡す。

その小さく柔らかい手に胸をときめかせながら、政臣はゆっくりと
受け取った。

一分一秒でも長くこの時間を味わいたいという、死亡フラグだった。

ビニール袋に、牛バラ肉と保冷剤を入れる。

流石に重かったらしく、持った右側に身体が傾いた。

「おっ、ととと、と？」

一歩二歩三歩と、右にステップ。

四歩目で漸く身体を止めて、両足でしっかり立った。
政臣はそんなアリアに、惜しめない拍手を送った。

「えへへ　　またねっ、まさおみさんっ！」

「うん、またね、アリアちゃん！」

照れを隠すように走り去るアリア。

そんなアリアを見て、政臣は幸福の絶頂にいた。

少女幼女の笑顔が、政臣に力を与えるのだ。

「ふう、眼福眼福」

「で？他に言い残したいことは？」

目を瞑り、和んでいると、重い音が耳に届いた。

政臣は目を開けるまでの一瞬の間で、幸福の絶頂からの転落とその後の達観までプロセスを終えて、悟った顔で目を開いた。

「俺は、幼女の泣くことはしません。それはここに、誓えます」

「若いのに……どうしてこんなことに」

ヴィヴィアンの悲痛な声が、政臣に突き刺さる。

それでも政臣は、ただ穏やかな目をして、首を振った。

「俺はロリコンです　でも、紳士です」

「そうか」

颯真は一言で切り捨てると、コートの裏側に手を伸ばした。それを、ヴィヴィアンが横から慌てて止める。

「ほ、ほら、早くしないとアリアちゃんが行っちゃっわよ！」

「なに、大した手間にはならねえよ。肉屋に肉が増えるだけだ」

にべもなく、颯真は拳銃を取り出した。

人通りがないのを良いことに、堂々と銃口を政臣の額に当てる。

「この子のことは、そう……莉奈ちゃんに任せて！さっき言っていたけど、幼馴染なんでしょう？お肉も安くしてくれたし、ね？」

「ちっ　命拾いしたな、小僧」

莉奈には、颯真も普段から色々任せている。

今日だって店番を任せているし、政臣も疚しいことは考えているが実行しようとはしない。

現に利益しか置いていないと言っこともあり、颯真は矛先を納めた。

重いため息を吐くヴィヴィアンの横で、颯真は颯爽と踵を返した。

その後ろ、肉屋のカンターで、政臣はゆっくりと意識を、失った。

彼はもう少し、思考と言動を改めるべきである。

十

肉屋から一直線。

竜胆川に架かるもう一つの橋……それが、“水仙橋”だ。

アリアは重い荷物を持って一生懸命渡りきると、橋の終わりで大き

く息を吐いた。

少し進んで曲がれば、後は家まで一直線、曲がることなく辿り着く。

額に汗をかいて、一步。

少し痛む足の裏を感じて、一步。

痺れて感覚の無くなり始めた手に力を入れて、また一步。

あと少しで、颯真に褒めて貰える。

そう考えるだけで、アリアの身体はずっと軽くなった。

曲がり角に、さしかかる。

家が見えてしまえば、やる気は大きく違う。

だからアリアは、笑顔で踏み出した。

「あ、れ？」

だが、急に軽くなった手元に、違和感を覚える。

そしてゆっくりと振り向いて……凍り付いた。

辺りに散らばるのは、野菜。

特に重かった野菜の袋が、破れてしまったのだ。

その光景に、アリアは呆然と立ち尽くしていた。

その光景を、遠目で見ていた颯真は、反射的に動いていた。

だが、その手をヴィヴィアンに捕まれた。

「おい、離せ」

「時には、見守らなければならぬこともある……それが、
“親”なんじゃないの？」

ヴィヴィアンのまつすぐな視線。

その視線を受けてなお、颯真は動かない。

そして颯真は、ゆっくりと……息を吐いた。

「はぁ……わかったよ」

そう言うと、再びヴィヴィアンの横に並ぶ。

建物の影から、二人は声に出さずに、アリアを応援していた。

当然だが、アリアは颯真に応援されていることなど、知らない。

知らないはずなのに、アリアは颯真を感じて、胸が温かくなった。

「おとーさん　　よしっ」

能力を使えば、きっと簡単だ。

だが、簡単に能力に頼るのはダメだと、アリアは颯真に言われていた。

颯真との約束を破って、任務に成功。

そんなのは、嫌だった。

リンゴの袋を左手に通して、牛肉の袋を右手に通す。

潤んだ目を強く拭ってから、拾った野菜を両手で抱え込んだ。

「えい、えい……おーっ!!」

声を張り上げて、気合いを入れる。

そこに、先ほどまでの悲壮感はない。

あるのはただ……前を向く、力強い意志だけだった。

「どっつ？ “おとーさん”？」

「はあ……帰るぞ」

「いいの？」

からかうようなヴィヴィアンの声に、颯真はぶっきらぼつな返事をした。

そして、別のルートを通るために、踵を返した。

「下ごしらえがあるからな……おまえも手伝え、ヴィヴィアン」

「ぶふ……はいはい」

アリアが帰ってくる時間に合わせられるように、颯真は早歩きで帰宅する。

その不器用で、ぶっきらぼつで、優しい声に……ヴィヴィアンは、小さく微笑むのだった。

アリアがどうにか店の前に辿り着いた頃には、空はすっかり茜色に染まっていた。

想定していたのよりもずっと時間がかかってしまったことに、アリアは悔しく思っていた。

喫茶店のドアを開けて、中に入る。

開口一番、失敗があっても元氣よく。

「ただいまっ！おとーさんっ！」

「おう」

店にいるのは、颯真とヴィヴィアン、それに莉奈の三人だけだった。他の客は、もう帰ってしまったのだ。

アリアは手に一杯の野菜を持ったまま、颯真を見上げた。

野菜を落としたことを誤魔化すなんてことを、アリアはしたくなかった。

「あのね、おとーさん。わたしね、とちゅうで、やさいぜんぶ、みちにおとしてね、それでね、もってかえって……」

涙ぐみながら、アリアは失敗を語る。

だんだんと声はうわずり、切ないものへと変わっていった。

颯真はそんなアリアに近寄ると、野菜を受け取ってカウンターに置いた。

肉とリンゴも受け取り、ヴィヴィアンに渡して冷蔵庫に運んで貰う。

「おとーさん？」

今にも泣きそうなアリア。

不安げに自分を見上げるアリアの頭に、颯真は優しく手を置いた。

「よく頑張ったな　　上出来だ」

精一杯の、褒め言葉だった。

人を褒めたりはしない颯真の真摯な気持ちだが、涙を溢れさせていたアリアの顔に、温かい笑みを伝えた。

「あ　　うん……うんっ！」

「さて、手を洗ってうがいをして、着替えてこい。今日は、カレーライスだ」

「うんっ！」

柔らかい笑みを浮かべる颯真。

颯真のそんな表情に、ヴィヴィアンと莉奈は目を瞠って驚いていた。

アリアは手洗いうがいを済ませると、生活区に入る扉の前で、振り返り向いた。

「おとーさんっ！」

「どうした？」

そして、大きく息を吸って……太陽のような、笑顔を浮かべた。

「だいすきっ！」

ドアを抜けて走り去るアリアを、颯真は優しい目で見送る。

ミッションコンプリート。
アリアの初めての“お使い”は、こつこつと和やかに、幕を閉じたの
だった。

来週からネット環境の無い場所に行くので、それまでになんとか
本。

アリアの初めてのお使い編です。

漸く政臣を出すことが出来ました。

次は狐狸理のメンバーか、それともエミリーか……。

じっくり、考えておこうと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次回も、どうぞよろしく願います。

2011/03/14 誤字修正

冬も終わりに近づいた、ある週末のこと。

金曜日の授業を終えると二連休が待っているということに、子供達は浮き足だつて帰宅の用意をしていた。

それはアリアも同様で、白いマフラーを巻きながら同じ色の手袋を嵌めると、その暖かさに頬を暖ませる。

教室の中はストーブのおかげで暖かいが、一步外に出れば直ぐに身体を冷やす冬の風に晒されることだろう。

けれどアリアは、颯真に買って貰った防寒着で冷たい風を防げるという事が、どうにも嬉しくてたまらない様子だった。

「おおおお、おい！アリア！」

そうして誰から見ても気の緩んだ表情をしていたアリアに、律人の声がかかる。

その声色には隠しきれない緊張と照れが混在していて、見るからに顔が赤かった。

まるで達磨のようだ、などと、アリアは首を傾げながら思う。

「なーに、りつくん？」

耳当ての位置を調整しながら、アリアは小首を傾げる。

その仕草の一つ一つがツボにはまり、律人は口調が正常でなくなるのを、微かに自覚し始めていた。思春期の男の子など、こんなものなのだろう。

「おお、おまえ、“ばれんたいん”ってだれにあげるんですだよ？」

「ですだよ？」

「そそそ、そこはきにすんな！」

その一言を告げるのに勇気を振り絞ったのか、律人の息は荒い。これが政臣あたりだったら“怪しい”の一言に尽きるのだろうが、そこは年齢相応の少年の、初々しさしか感じられなかった。

「どうしたの？アリア。りつとが、またなにかした？」

「もう、りつくん！いいかげんにしないと……わかってるよね？」

教室の外で待っていたのだろう。

桜と七海が戻ってきて、律人に詰め寄った。

別に悪戯をしようとしていた訳でもないのに疑われるのは、素直になれない彼の普段の行い故だろう。もっとも、素直になっただら颯真という“怖い”壁があるのだが。

「あ、ねえみみちゃん、さくらちゃん」

「アリア、へんなことされてない？」

「だいじょうぶ？アリアちゃん」

よほど信用がないのか、それともからかわれているだけなのか。ふて腐れた律人は、同じく教室に戻ってきた巧巳に慰められていた。

肩を叩いて苦笑する姿は、何かと苦勞人氣質な彼の性格を、如実に表現している。

「げんきだして、りつくん」

「うるせえやい」

それでもちよっかいを出してしまうのが律人という少年なのだが。

それで徐々に信用が削られていっているという事実には、彼は未だ気がついていなかった。不憫である。

「ばれんたいんって、なーに？」

「ばれん、たいん？」

アリアの言葉に、桜は首を傾げる。

きちんとした教育を受け始めて、まだ一年。

彼女もまた、バレンタインの存在を、知らなかったのだ。

「ああ、なるほど」

そんな中、七海は面白そうな笑みを浮かべながら、その言葉を発したのである。律人に目をやった。

そう、今日は二月の十二日。

二日後は セント・バレンタインデーであった。

差し込む陽光は眩くも、身体に当たる風は冷たい。
寒さでかじかみ上気した頬に手袋越しの手を当てながら、アリアは七海の言葉に頷いていた。

もうすぐ颯真の待つ喫茶店。
大きな橋を渡れば、暖かい大きな手と甘いココアが待っている。
アリアの帰る時間に合わせて、颯真はココアを用意してくれているのだ。

「ばれんたいんっていうのはね、すきなひとにチョコレートをおくるひなの」
「チョコレート……えへへ」

アリアは言われて直ぐにチョコレートを思い浮かべ、頬を緩ませる。

真っ黒で、堅くも柔らかくもなる甘いお菓子。

マグカップに注がれたホットチョコレートなど、それこそ頬が落ちるほどに美味しいのだ。毎日は、虫歯になるから飲めないのだけれども。

「わたし、ことしはおとうさまとおかあさまと“わかいの”たちに、てづくりでチョコレートをあげるんだ！」
「てづくり？」

何も無い空間を見ながらにへらと笑うアリアの姿。
その姿を満足げに眺めていた桜は、七海の言葉に疑問の声を返す。
チョコレートとは、主にアリアの相半に預かった時に食べることが
できる、変幻自在のお菓子だ。

ケーキ、クッキー、マシユマロ、ソース。
色々な姿に形を変える、魔法のお菓子。
それこそが桜にとってのチョコレートであり、とても自分で作れるイメージは沸かなかった。

「そう！てづくり！っていつでも、とかしてかたちをつくるだけなんだけどね」

七海はそう告げると、照れたように微笑んだ。
一つ一つの仕草が上品だからか、アリア達よりも大人しめな笑顔だ。

そんな七海に桜は、ただ感心したように頷く。その瞳こそ閉じられて
いるものの、桜は七海の笑顔を感じ取り、そこから感情を読み取って
頷いていた。

だが、ただ感心していた桜と違い、アリアは顎に手を当てて足を止めた。

ここ最近では、学校帰りに七海と桜も喫茶店に寄り颯真のココアを飲むようになった。だから喫茶店まで歩く間にまだ喋る時間はあるのだが、それでもアリアは一度立ち止まる。

「アリアちゃん？」

「ねえ、みみちゃん」

「うん？」

先程までの緩んだ表情とは違い、彼女の顔は真剣そのもの。

だがくりくりとした目や上気した頬などの要素があるため、凛々しいといった表情にはほど遠い、どちらかというところ可愛い顔だった。

「わたしにもできるかな？ チョコレートづくり」

「うーん……ほんとうにかんたんだから、できるとおもっよー！」

その質問と、七海の答え。

それに目を輝かせたのは、アリアだけではなかった。

桜もまた同様に、目を輝かせる代わりに肩を跳ねさせて七海を見る。

そんな二人の顕著な反応に、七海は思わず一歩下がってしまった。

「みみちゃん、それってどうやるの？」

「えーと……だれかにおしえてもらいながら、やるのがいいとおもっよー」

市販のチョコレートを湯煎し、型に嵌めて冷やす。

言ってしまうえばそれだけだが、冬の堅いチョコレートを割るのも、熱湯を扱うのも、調理器具を揃えるのも、子供だけの手で行うべき事ではない。

「わたしがいつしよにつくれればよかつたんだけど……」

七海は、チョコレート作りは連休中、旅先で行うのだという。

拙い口調ながらそう説明され、しかしアリア達は申し訳なさそうな七海を逆に励ます。

「ううん、こっちはこっちでなんとかするよ！でも、おしえてくれてありがとう！」

「そうだよ、ななみ。わたしたちだけだったら、きつとおとうさんになにもできなかった」

太陽のような笑みを浮かべてそう言い放つアリアと、月明かりのような微かな笑みを浮かべて同意する桜。対照的であるはずなのにその笑顔は変わらず優しく、だから七海はつられて笑みを浮かべてしまう。こんな笑顔と一緒に在って、笑わないで居るなんて無理なのだ。

「でもせっつかくだから、おとーさんにはないしよにしたいな」

「そうだね。おとうさんを、びっくりさせたい」

それではいいたい、誰を頼るのか？

それは結局喫茶店に到着しても答えが見つからず、アリアと桜は、眉根を寄せて顎に手を当て首を捻るというまったく同じ動作でココアを口に運ぶ事になるのであった。

冬の麗らかな陽光は、窓際の席の寒さを緩やかに和らげる。

磨かれた机に置かれた、喫茶“konzert”オリジナルブレンドのブラックコーヒーを口に運ぶと、湯気の立ったそれが身体の中から莉奈を温めてくれた。

友人のロリコン学生が変な方向に走らないようにストッパー役を務めなければならぬ、この季節。だんだんと近づいてくる行事に女の子として胸をときめかせられないのは残念だが、この喫茶店の光景はそんな彼女のささくれだった心を適度に癒してくれていた。

「御條」

だがその充実を芯から感じる一時も、静かに終わりを告げた。

もうこの店に通い始めて一年以上経とうとしているのに、最初の

刷り込みが効いたのか心の底から震え上がってしまう声。大魔王様がいたらこんな感じなのだろうか、莉奈の脳裏にはシューベルトの『魔王』がループしていた。連れて行かれちゃうアレである。

「どうしました？源さん」

だが流石に、口調にまで咄嗟の焦りが出ないようにする程度には慣れていた。

別段颯真は自分に危害を加える気は無い。そんなことは解っているのに反応してしまうのは、もう立派にパブロフの犬である。

「新作があるが、食うか？」

「よろしいんですか？是非、お願いします」

「待ってる」

颯真はぶつきらぼうで、そして気怠げだ。

彼はアリアが側にいる内は、もうほとんど威圧感を外に漏らさなくなってきた。内側で何を企んでいるのか解らない凶悪な目つきは相変わらずだが、それでも意図的に周囲を威圧しようとしなくなっただけ、颯真も颯真なりに成長したという事だろう。

「りなさん」

そうして再びコーヒーを口に運んだところで、いつの間にか側に来ていたアリアに声をかけられる。七海はすでに帰ったのか姿が見えず、しかし普段なら七海と一緒に帰っていくはずの桜もアリアと一緒に居た。

「あのね、えっとね、その」

莉奈はアリアに視線を合わせると、次の言葉をじっと待つ。
急かさずに焦らせずに、ただ笑みを浮かべて言うのを待ってあげるのだ。

そうして待つと、もごもごと口を動かしていたアリアが、意を決してつま先立ちになった。そして莉奈の耳に両手を当てて壁にし、彼女だけに聞こえるように“お願い”をする。

「チョコレートづくり、おしえてください」

小さく紡がれた声。

期待した表情で自分を見上げる桜。

こんなにも可愛らしく頼られてしまったら、莉奈に断る気など起きない。

むしろ彼女たちとこの胃の痛くなる行事を乗り越えられるのなら、願ってもないことだった。

「いいよ。それなら明日明後日で、一緒に作るうか」

「ほんとっ、りなさんっ」

「いいの？りなさん」

目を輝かせるアリアと、少しだけ不安そうな桜。

そんな二人を落ち着かせるために、莉奈は自分の性格には似合キャラクターわないような気がしながらも、明るい笑みを浮かべてみせた。

「もちろんだよっ！私も、アリアちゃんと桜ちゃんと、チョコレート作りがしたいな」

その言葉に、アリアは桜と向き合ってて両手を重ね合わせる。

桜はアリアに両手を引っ張られて体勢を崩しながらも、その頬は喜色に染まっていた。

「待たせたな、御條……と、なんの騒ぎだ？」

戻ってきた颯真に、アリアと桜はハイタッチの格好のまま、動きをぴたりと止める。

そして困ったように莉奈と目を合わせて、莉奈はそれだけで意図を汲んで頷いた。

わざわざ颯真が居ない時に内緒話のように話したのだ。その目的くらい、すぐに解る。

アリアは莉奈の笑顔に安堵の表情を見せると、今度は小走りで颯真に近づく。

颯真は方眉を上げながら、莉奈の元へ試作ケーキとコーヒーのお代わりを手際よく配置すると、アリアの顔を見下ろした。

「えーと、えーとね」

アリアは何度かそう言うと、右手の人差し指をぴんと立てる。そしてその指を自分の唇に当てて、小首を傾げた。

「ないしょ、だよ」

「内緒、か？」

「うん。ないしょ」

話の内容よりも仕草が気になる心が勝ったのだろう。

颯真は唇に指を当てたままのアリアを持ち上げて、抱きかかえる。まるつきり“子煩悩パパ”な颯真のその仕草に、莉奈は吹き出しそうになるのを根性と気合いと危機感で抑え込み、微笑ましそうな表情を作るに止めた。

「内緒か」

「ないしょだよ」

「そうか」

「ないしょ」

まだやりとりを続けている二人から視線を外すと、行き場の無くなった桜を手招きで呼び寄せる。彼女は目が見えなくとも、聴覚と風の流れで、仕草を的確に感じ取ることができるのだ。

「一緒に食べようか？」

「あ……うん」

椅子が高いため、莉奈に引っ張って貰い隣に座った桜と、ケーキをつつき合う。

時折ハンカチで桜の頬を拭ってやりながら、莉奈は緩む頬を必死に抑えていた。

どこかで気を緩めてしまえば、同時に視界に入れないようにしている二人の様子に意識が行ってしまうからだ。売られていく子牛になりたくはない。ドナドナ的に。

「おいしい？」

「うん。ありがとう、りなさん」

日陰に咲く小さな花のような、微かな笑み。

その柔らかな表情を見て、莉奈は一つの決意をする。

子供達に何かを教える、先生になろう。

莉奈の将来が、ある種の現実逃避とともに決定した瞬間であった。

十

ジーンズ生地のスカートの下に、寒くないように黒いレギンス。上は黒いヒートテックを着て、その上から白いワイシャツに、更に鳩のワッペンがついた桃色のセーターを着る。

背には鳩の羽模様が装飾として施されたリュックを負ぶさり、手袋とマフラーも完備した。完全装備の防寒具である。

「それじゃあ、おとーさんっ」

「……」

嬉しそうな笑顔で、アリアは手を握る。

その先の人物は颯真……ではなく、現役大学生の女性、莉奈だっ

た。

莉奈は颯真から放たれる無言の圧力に遠のいていく意識を、アリアと桜の柔らかな笑顔と体温で誤魔化していた。将来彼女は、モンスターペアレンツ程度ならば鼻で笑える立派な先生となるだろう。そのことで、颯真に感謝はできないのだろうか。

「いってきますっ!」

「ああ、気をつけて行ってこい」

目に見えてテンションの低い声。

それも、手を振るアリアは気がつかない。

それはアリアとは逆の手　莉奈の左手　を握る桜も同様で、

颯真の隣に佇む自分の義理の父、村正に笑顔で手を振っていた。

彼女は、新緑色のパーカーに、濃紺色のキュロットスカート。それから足には、紺と白のストライプの、ニーソックスを穿いていた。

「いってきます。おとうさん」

「行ってらっしゃい、桜」

「うん……っ」

桜もよく、笑うようになった。

そのことが何よりも嬉しくて、それでいて彼女の“内緒”がどこか、寂しくて。

村正は普段と何一つ変わらない表情で、莉奈に手を引かれていく桜を見送った。

「ふふふ、可愛いいわね」

そんな様子をカウンター席に座って見ていたヴィヴィアンが、そう形容する。

無邪気に歩いて行くお子様二人と大学生の様子は、どうにも可愛らしいものだった。

三人を見送る大の大人二人は、二月十三日という差し迫った日に少女達が何をしに行くのかくらいは、理解しているのだろう。それでも気が気じゃないのが親心か、と、ヴィヴィアンは含み笑いをしてコーヒーを口に運んだ。

「なあ、ヴィヴィアン」

そうして颯真のコーヒーの香りを楽しんでいたヴィヴィアンに、他ならぬ颯真から声をかけられる。小さな子供二人の初めての外泊だ。安全面に信頼のある相手とはいえ心配なのだろう。右手で頭を掻く仕草は、彼が苛立ちを隠すことができているという証明に他ならなかった。

そんな颯真にヴィヴィアンは、今日くらい愚痴に付き合っても良いだろうと、笑みを浮かべて返事をする。

「なーに、颯真」

「アリアの“内緒”って、いったいなんなんだ？」

「……はあ？」

思いも寄らない質問に、ヴィヴィアンは眉根を寄せる。

解っていないかったのか。むしろ、感心と感動を返せ。

そんな風に渦巻く心情を、ヴィヴィアンはぐっと呑み込んだ。

「まったく貴方は……村正、貴方も、何か言ってあげなさいな」

仕方なく、ヴィヴィアンは村正に話を振る。

こういつた行事に興味がないことは昔から解っては居たが、娘ができてそれは変わらなかつたようだ。去年のバレンタインを完全に流していたのは、こんな理由があつたのかとヴィヴィアンは額に指を当てた。

「すまんヴィヴィアン……私も解答が知りたい」

だが、困つた大人は一人ではなかつた。

毎年、顔は良い村正は、署内でそれなりにチョコレートを貰つてくる。

それでも解らないのは、無頓着すぎて日付を覚えていないためだろう。

華やかな行事に興味のない男二人が、ここに来て想定外の鈍さを見せていた。

「自分で考えなさい」

そんな二人に、ヴィヴィアンはにべもなく切り捨てる。

その余りの切れ味の良さに、颯真と村正は揃って一歩後退した。方やシフター対策課の課長、方や伝説クラスのドラゴンシフター。猛々しい面影が欠片も見あたらぬ、“しょうがない大人”達だった。

「おい村正、なにか知らないのか？」

「おまえこそ、握っている情報があるなら隠すな」

二人並んでカウンターに座り、ガラスのコップに入れたお冷やを飲んで緊急会議。

いくら顔が良くても人相の悪いタイプの格好良さなので、肩を付

き合わせて悶々とする姿は“不気味”の一言に尽きる。

どんよりとした空気を醸し出す、駄目な大人二人組。
そんな状況を打開する手立ては、意外なところからやってきた。

「こんにちはーっ！」

妙に明るい笑顔を振りまきながら喫茶店に入る、黒髪の青年。

莉奈の幼馴染でもあるロリコン学生、政臣だった。

よほど“明日の行事”が楽しみなのか、喫茶店に入る時にアリアが居なければ震えている彼も、今日に限ってはハイテンションな様子だった。

どうやら、“貰えない”ということは、欠片も想定していないらしい。

「政臣」

「源さんじゃあないですか！」

「今日、泊まっついていけ」

軽やかなステップで奥の席に腰掛けた政臣は、思いもよらない颯真の提案に目を瞪る。

アリアの教育に何よりも悪いからと、締め出され続けて早一年。
ついにこの日が来たのかと、政臣は机を揺らして立ち上がる。

「いいんですかっ?!じ、実家に電話します！」

政臣は目にも止まらぬ速さで携帯電話を取りだすと、電話番号を素早くプッシュする。

見た目は白の質素な携帯電話だが、如何にも小さい女の子がよつてきそうな可愛い動物のストラップがついているあたり、駄目

な意味で彼らしい。

「俺！今日友達とこ泊まるから！……うん、うん、それじゃ！」

直ぐに親に連絡を入れて、政臣は至福の笑みを浮かべる。

この何よりも幸せな表情を、ヴィヴィアンは見ていらなかった。ロリコンに同情する気は無いが、奈落に落ちる表情を見て楽しむ趣味もないのだ。

「ありがとうございます源さんっ！……ところでアリアちゃんはどこでしようかつ」

一人で舞い上がっていた政臣は、気がつかない。

村正がそつと移動し、喫茶店から逃げられない位置に陣取っていたことに。

颯真の懸念することは、娘を預けている村正にも当てはまるのだ。

「今、御條のところに預けてある。泊まり込みだ」
「へっ?!」

颯真の言った意味を理解できず、目を見開く。

次いで言った意味を理解して、ふらりと後ろへ下がる。

そうして入り口を塞ぐ村正を見て状況を把握し、光の灯らない瞳で椅子に崩れ落ちた。

「これから、み、源さんと、二人きり？」

「安心しろ。私も泊まる」

警察官とヤクザ　外見が　と三人で、楽しい楽しいお泊まり会。

あんまりといえはあんまりな展開に、政臣は視界が真っ白に染まっ
つていくのを感じ取る。

そんな政臣の哀れな様子に、ヴィヴィアンは早々に目を逸らして
いた。あらゆる意味で見えていられない。

「はあ、もう。颯真ー、テレビつけるわよ」

「好きにしる」

喫茶店のカウンター。

その中につけられた小型のテレビは、完全に颯真の“暇潰し用”
である。

そのうち店に移すのだろうが、それもその方が客の入りが良くな
りそうだとエリアが感じた時になるので、当分移動はないというこ
とは予想できてしまった。

とにかく三人から目を離れたかったヴィヴィアンは、カウンター
の中に入って電源を入れた。チャンネルは、適当なニュースにでも
合わせておく。

『昨晚未明、三度目の強盗事件が発生。犯人は依然逃走中で』

「あら？まだ解決してないのね、この連続銀行強盗事件」

流れたニュースの内容に、政臣はチャンスとばかりに食いつく。
とりあえず、逃げられないにしてもこの空気だけは何とかしたか
つたのだ。

「確か、もう三箇所も襲って逃げてるんですね？」

「そうだな。今のところ怪我人は居ないが、ここまで逃げ切られる
と不気味だという話になってな。もうすぐ私も駆り出されるかもし
れん」

「うっひゃあ、大変ですね」

政臣と村正の会話。

その意味に気がついた颯真とヴィヴィアンは、互いに顔を見合わせた。

村正が出なくてはならない事態……それは、“シフター”が関わることだ。

「何事もなければ、いいのだけれども、ね」

ヴィヴィアンは、テレビ画面を見てそう呟く。

その瞳に宿った微かな憂いに気がついたのは、偶然視線を移した颯真だけだった。

菊ノ瀬市からバスに乗って二駅進むと、隣町である牡丹ノ原市に行くことができる。

娯楽施設やスタジアムなどを多く持ち、人々に好まれる明るく豊かな町作りをしている。そのため、菊ノ瀬市にある県内最大の音楽大学である、百合ノ原音大に通う学生達は、大抵この町でアパートメントを借りるのだ。

莉奈の住むマンションは、そんな牡丹ノ原市の端に建っていた。

「到着だよ、二人とも」

「うわぁ……」

「おおきい」

アリアと桜は、二人揃って口を大きく開いた。

見上げたり風で感じ取るだけでは一番上がどうなっているのか良く解らない、地上四十七階建ての超高層マンション。

「アリア、そとぼりにいけがある」

「おさかなさんは？」

「かんじられないからいない、とおもつ。たぶん」

敷地内に入った時点で、整えられた並木道に迎えられた。

それからマンションを見上げるまで、人工に作られた川や池まであったのだ。

普通に生きていけばまずお目にかかることのできない光景で、それ故に訪れる者へ安心を与えることができるだけの、設備があった。

やや過保護気味な颯真が、この“お泊まり会”の許可を渋りながらも出した背景には、確実な信用のある場所だったということが、一因としてあったのである。

広いエントランスホールを抜けて、大きなエレベーターに乗る。その中もデパートなんかとは比べものにもならないほど清潔で、上品な作りだった。

敷地内に足を踏み入れてから、二人の口は一度も閉じていない。

「りなさん、このえれべーター、いつうごくの？」

「もう動いてるよ。なるべく音がないように動くんだよ」

「うん……しずかだけど、たしかにうごいてる」

階数を示す表示が、だんだんと昇っていく。

デパートのそれよりも遙かに速いスピードで昇っていくのにも関わらず、意識しなければ駆動音など聞こえなかった。

そうして辿り着いたのは、地上四十七階……超高層マンションの最上階だ。

大きな玄関から入り、二人は靴を脱ぐ前にまず一礼。

立派なレディになるための条件は、挨拶から始まるのだ。

「おじゃましますっ！」

「おじゃまします」

「ふふ、はい、どうぞ」

莉奈の言葉に顔を上げ、アリアは今日何度目かも解らない絶句をした。

口を半開きにしながら見渡すのは、マンションの中とは思えない

ほどの広いラウンジ。

床下暖房でも使用しているのか、フローリングに立っても冷たさは感じられない。

見て驚くアリア同様、桜もその光景を視覚以外の感覚で感じ取り、やはり驚いていた。

「兎さんと熊さん、どっちのスリッパが良い？」

「えーと……わたしは、うさぎさん！」

「それならわたしは、くまさんがいいです」

並べられた可愛らしいスリッパを履いて、ラウンジを歩く。

まず案内されたのは、牡丹ノ原市の全景を見ることができるといわれるベッ
ドルーム。

昼間の内なのに目に焼き付くほどの光景という事は、夜景はその比でなく絶景なのだろう。

「今日寝る部屋はここで、大丈夫？」

「う、うんっ」

「もちろんです。すごい、きもちのいいへやです」

アリアと桜は、リュックを部屋に置くと、早速窓まで走り寄った。無邪気な子供達でも足が竦む高さなのだが、それもアリアと桜の二人には当てはまらなかつた。“空を飛べる”ということは、高さで動じたりはしないという事なのだ。

もっとも桜は、景色を楽しむのではなく、景色を楽しむアリアの感情を読み取り同期することで安らぎを得ているのだが。

「さて、それじゃあ早速、キッチンに行ってチョコレート作りをしようか？」

「あ……うんっ！おねがいします、りなさんっ」

「おねがいします」

勢いよく頭を下げると、二人の髪がふわりと舞う。

その一生懸命で、そして気合いの入った様子に莉奈は小さく頬を綻ばせた。

鈴を転がすような声で笑いながら、自分の後をヒヨコのようについてくる二人の少女。

颯真と村正が溺愛してしまうのも仕方がないと、莉奈は一度だけ苦笑を零すのであった。

十

着てきた服の上から身につけるのは、この日のために用意したエプロン。

鳩のワッペンがついた白いエプロンがアリアのもので、カラスのワッペンがついた黒いエプロンが桜のものだ。

可憐な白い天使と、綺麗な黒い小悪魔。頭に頭巾を巻いて拳を握りしめるその姿に莉奈は、彼女の幼馴染のように邪な意味ではなく、目の保養をしていた。眼福である。

「まずは市販のチョコレートを用意します」

「はい、せんせい！」

「はい」

先生、とそう呼ばれて、莉奈は刹那目を瞠る。

だがすぐに柔らかい笑みを浮かべると、二人が用意した板チョコを見て微笑んだ。

「お家でもできるように、今日は湯煎のやり方を覚えましょう」

普段莉奈は、熱を発するプレートのような機械“電磁調理器”を使っている。

だが当然ながらどこの家庭にもあるものではないので、今回行うのは熱湯によってチョコレートを溶かす、“湯煎”だった。

「まずは、頑張ってチョコレートを砕いてみて」

包丁を使って細かくしても良いのだが、今回は小さな子供二人とチョコレートを作るといふ事もあり、それは行わない。

莉奈が二人の前でチョコレートを細かく砕いていくと、それに合わせてアリア達も砕き始めた。

「えいつ」

「む、けっこうむずかしい」

莉奈が用意した、足場代わりの高い椅子の上に立って、机の上でチョコレートと戦う。

ほどよく暖房の効いた室内は暖かいが、真冬のチョコレートを柔らかに剥ぐには少し力不足だ。冷たい風では、旅人の服を剥ぐこともできない。重要なのは、芯から温まる麗らかな陽光なのである。

「できたっ」

「できました」

満足げに笑うアリアと、喜色を頬に浮かべながら微笑む桜。

対照的だがよく似ている二人に、莉奈は“姉妹みたいだ”と考える。

莉奈は知らぬ事だが、生まれた環境的に考えれば、あながち間違いないとも言いきれなかった。

「次に、熱いお湯を入れたボウルに、もう一個ボウルを浮かべます」

それぞれの前に置かれた、熱湯入りのボウル。

莉奈はこの日のために、幼い子供の火傷の対処まで、しっかりと勉強していた。

自信さえすっかりつけておけば、本番で失敗なんかしないのだ。

「そうしたら後は、柔らかくなるまでひたすら混ぜる！」

「うんっ！やってみる！」

「わかりました。やってみます、りなさん」

アリアと桜は、熱湯に注意を払いながらチョコレートをへらで崩

していく。

伸ばして、叩いて、捻って、首を傾げて。

地味にで面倒で大変で時間のかかる作業だが、二人は見事にやり遂げてみせた。

「そうしたら、この型から好きなのを選んで、チョコレートを流し込んでみよう?」

「わかった!えーと」

沢山並べられた、チョコレートの型。

莉奈が今日のために用意していたものの一つで、ハート型や星形だけでなく、丸四角三角に各種動物まで、本当に多くの種類が揃えられていた。

「あ」

その中の、一つ。

コウモリを模った型を見つけて、アリアは手を伸ばす。

その羽は見まごう事なき、大切な“おとーさん”のものに、よく似ていた。

アリアがコウモリの型を手にする横で、桜は一つ一つ手にとって形を確かめていた。空気の流れや音の反射で形は解る。だが、視覚で捉えるほどはつきりとしたイメージで捉えることは、桜はまだできない。

だから父親を思い浮かべて、そのイメージでチョコレートの型を選んでいた。

「わたしは、これ」

選んだのは、三日月の型だった。

半円を描くその形は、さながら刃のようで。

鋭利な日本刀を連想させる空気を放つことがある、父親のイメージになぞらえていた。

「よし、それじゃあ型に流し込もう！」

「うんっ！」

「はいっ」

普段、年齢不相应に落ち着いている桜から、弾んだ声が漏れる。

二人はチヨコレートを選んだ型に流し込み、それから余剰分を適当に選んだ型に流し込んだ。流石に、一個には収まらない。

「あとはこれを冷やせば完成だよ」

「えと、おねがいます！りなさん」

「おねがいます。あと、ありがとうございます」

「うん、私も楽しかったから」

莉奈は頭を下げる二人に微笑みかけると、大きな冷蔵庫に二人のチヨコレートを入れる。

もちろん、二人に実践しながら作った自分の分も、忘れずに。

そうしてだいたいの作業を終えると、もう夕方になっていた。

茜色に染まった空は、己の色を地上に映す。

それにより、普段白く輝く町並みは、空と同じく橙色に煌めいていた。

「ねえさくらちゃん、おとーさんはどっちなかな？」

「たぶん、あっち」

方向感覚にも優れている桜は、こういったことで場所を間違えたりはしない。

だからアリアに頼られていることに気恥ずかしさと嬉しさを覚えながら、感覚で捉えた方向を、あっちこっちと示し続けていた。

「今から夕ご飯を作るから、自由に過ごしていていいよ」
「はいっ」

アリアが元気よく返事をし、桜はそれに続いて、キッチンから覗く顔に頭を下げた。

この場所は、桜が“以前”住んでいた“部屋”と、同じくらいのスペースがあった。

だが、家具や壁の配置などでこちらのほうが小さいくらいだというのに、桜は何故だか、目に包帯を巻いて過ごした“部屋”の方が、ずっと狭く感じられていた。

「ひろくて、あったかい」

「えへへ、うんっ。あったかいね！さくらちゃんっ」

フローリングの熱の事でも言っているのか、小さく足踏みしながらアリアは桜の呟きに同意する。桜はそんなアリアの笑顔を見て、自分も頬を綻ばせた。

きみがいたから、わたしはわらっていられるんだよ？アリア。

脳裏によぎった言葉は、口には出さない。

そうしてただ、桜は優しく微笑んだ。

この喜びが、アリアに伝わりますように、と。

+

ニンジン、タマネギ、ブロッコリー、鶏肉。
ことこと煮込んだホワイトクリームのシチューが、柔らかいご飯
にかけている。

カレーライスやハンバーグに続いて子供達が好む料理、クリーム
シチューが、今晚の夕飯だった。

「いただきますっ」

「いただきます」

「どうぞ、召し上げれ」

莉奈は言いながら、二人の首にナプキンを巻き付ける。

零してしまうのは子供ならば仕方が無く、普段父親達が言っているのなら、莉奈はここであえて言うつもりはなかった。

「はぶ、ん……おいしいっ」

「はむ……うん、おいしい」

表し方は違えど、二人とも喜んで食べてくれているのが解った。拙い手さばきでスプーンを操り、頬を膨らませて息をかける。

アリアはふうふうと、回数はだいたい二回から三回ほど。充分に冷ましたら、大きな口を開けて頬張るのだ。

その様子がリスのように可愛らしく、莉奈はデジタルカメラを構えて時折撮影していた。

実はチョコレート作りの最中にも撮影していたのだが、とにかく一生懸命な二人は気にしている余裕がなかったのだ。

「これだけ可愛い姿が見られるなら、源さんも怒らないだろうしね」
保身である。

妙な八つ当たりをされることは、なんとなく解っていた。だからこそ、娘の可愛い姿で癒されて貰おうと考えていたのだ。もちろん、この微笑ましい姿を撮影しておきたいという気持ちもあるのだが。

両手で抱え込むように水を飲むアリアと、熱いのがさほど得意ではないのかアリアの二倍ほど息を吹きかける桜。その様子を頬杖をつきながら眺めると、莉奈自身も食事を再開するのであった。

十

夕飯の後は、お風呂である。

夜景を一望できる、檜造りの大きなお風呂。

そこで三人は、一緒に身体を洗っていた。

鳩の装飾のシャンプーハットと、カラスの装飾のシャンプーハット。

それをつける二人の後ろに回り、莉奈は二人の髪を洗っていた。

「アリアちゃんも桜ちゃんも、すごく綺麗な髪だね」

「えー、りなさんもすごくきれいだよー」

「うん。りなさん、きれい」

「そう？ありがとう」

木製の腰掛けに座りながら、アリアは気持ちよさから目を閉じる。人に頭を洗って貰うという事は、普段颯真に洗って貰っているのとは、また別の心地よさがあった。強いて言うのなら、莉奈は颯真のそれより“柔らかい手”なのだ。

「アリアちゃんは普段、源さんに？」

「うん。おとーさんが“まるあらいだ”って」

ぬいぐるみを洗うような感覚である。

もちろん丁寧に洗っているというのは、艶やかなアリアの髪の手触りから解る。

けれど如何にも“らしい”様子に、莉奈は頬を引きつらせた。

「はい、流すよー」

「うん……はふう」

アリアの髪を流し終わると、丁度身体を洗い終わった桜の後ろに回り込む。

その間に、今度はアリアが自分で身体を洗い始めた。

「桜ちゃんも、香川さんに？」

「はい。おとうさんと、それからおなじ“か”のゆりさんや、あんずさんが」

男一人暮らしの村正が、娘を育てている。

その手際は間違いないのだが、それでも心配して同じ課の百合や杏子が手伝いに来ることがあるのだ。おかげで桜は、村正の仕事が忙しい日でも、割と割と寂しさを感じずに過ごしていた。みんな忙しかったらアリアと過ごして、それはそれで楽しんでいる毎日だ。

「はい、流すよ」

「はい、おねがいしま、すう」

温かいお湯をかけられて、気が抜ける。

その横では、身体を洗い終わったアリアがそんな桜を見て楽しそうにしていた。

「それじゃあ、浴槽へ移動しようっ」

「うんっ」

「はい」

乗り気なアリアと、若干物怖じしながらお湯に入る桜。

三人は夜景を眺めながら、並んで浴槽に腰掛けた。

檜の香りと、入浴剤で真っ白なお湯。

窓から眺められる絶景と、両隣の体温に、桜は全身から力を抜いてお湯に浸かっていた。

「百数えたら、出ようね」

「うんっ……えーと、いち、にいー、さん、しいー、ごおー

」

「ろーく、なーな、はーち、きゅーう、じゅーう、じゅーう、じゅーういち

」

並んで、一緒に数えてくる。

拙い口調の少女達による、優しい輪唱。

その澄んだ音色に、莉奈は目を眇めて耳を寄せていた。

自分も一緒に、数えなくなる。

そう考えたら止まらず、三人に混じって輪唱を始めた。互いに数を忘れぬよう、ゆっくりと、ゆっくりと……。

十

お風呂から上がったら、そろそろ寝る時間だ。

パジャマに着替えて、髪を乾かして、歯を磨いて。

それでも、慣れない場所と明日への興奮で、二人は眠気を感じられなかった。

「うーん……ああ、そうだ」

そんな二人の手を引いて、莉奈は奥の部屋へ行く。

寝室とは反対側のリビングルーム。

その空間にあったものに、アリアは声を上げた。

「わぁ……ぴあのだっ！」

「えーと、ん……ほんとだ、おつきいぴあのだ」

黒く大きなグランドピアノ。

それが、夜景の見える位置に配置されている。

艶やかなピアノはよく手入れされていることが見て取れて、行き届いた気遣いにピアノが喜んでるように、アリアは感じていた。

「さ、座って」

黒いソファーに腰掛けると、心地よい柔らかさに吸い込まれる。

アリアはそれが楽しくて、何度も身体を弾ませた。

桜もそれは同様で、アリアよりも控えめにその感触を楽しむ。だがやがて二人とも、蕩けた表情で大きく息を吐くにいった。

「それじゃあ最初は、森の熊さん」

「おー」

「わぁ」

柔らかい、音だった。

森の熊さん、チューリップ、グリーングリーン。

聞いたことのある曲が、綺麗な歌声と共に流れ出す。莉奈の唇に合わせて紡ぎ出される音色は、心地よい。

温かい、声だった。

大きな栗の木の下で、汽車ポツポ、さくらさくら。

耳をくすぐる旋律、大きな手に抱き締められているような感覚。

美しい指から弾き出される音階は、どこか懐かしくて胸が温かく

なる。

莉奈が演奏を終わらせた頃には、二人はソファアの上で寄り添って眠っていた。

「ふふ……おやすみ、アリアちゃん、桜ちゃん」

莉奈は二人の頬を一撫ですると、一人ずつ寝室に運ぶ。眠りながらも小さな手を握りしめ合う、二人の姿。そんな二人に、莉奈は柔らかい微笑みを浮かべて毛布を掛けた。

「さて……もう二、三曲、弾いてこようかな」

気分が乗ってきてしまったと、莉奈は寝室から出る。電気を消す前にもう一度だけ、二人の寝顔を眺めて。

暖かな日差しが、マンションの前に立った三人を照らす。
チヨコレートをリュックに収め、臨むは今日のバレンタイン。
気合いは充分、自信も充分、そうならば勇気も十分だ。

「それじゃあ、出発しようか」

「うんっ」

「はい……っ」

大きなマンションを、アリアは一度だけ振り返る。
そして小さく頷くと、踵を返してその場を後にした。
一日過ごした部屋に胸の中で“ありがとう”と、言葉を残して。

マンションからバス停までは、徒歩十五分ほどだ。
それまでの道のりは、公共施設が建ち並ぶ。
更にバス停に近づけば、娯楽施設が見えるのだ。

その手前を、アリア達は笑顔で進む。
リュックに詰まったチヨコレートを、大切そうに気にかけてながら。
思い浮かべるのは当然ながら、父親達のぶっきらぼうな横顔と、
優しい大きな手のひらだ。

「あれ？」

そうして歩いている中、アリアがふと足を止める。

それに合わせて、桜と莉奈も足を止めた。

「どうしたの？アリアちゃん」

「うんと、なんか」

道向こうには、慌ただしい様子の銀行。

それをのぞき込み、それからアリアは首を傾げる。

銀行と、道と、自分の視界　その、中間。

「アリア、さがって。そこになにかある」

「ちっ、気がつくヤツがいるとはな」

と、突如。

何もない空間から手が伸びる。

大きな、男のものに見える手が二本。

アリアの腕と、側にいた桜の腕を掴み取った。

「アリアちゃん！桜ちゃん！」

莉奈は咄嗟に、その手を掴み返す。

だが、身体を鍛えている訳でもない普通の女性の力では、拮抗することまでできなかった。

そして、目撃者もないまま　その場から三人の人間が、姿を消した。

冬の日差しに晒された、颯真達の喫茶店。

そのカウンター席で、政臣は憔悴した表情で蹲っていた。

この家での暮らしを一言で表すのなら、“快適”だ。

綺麗に清掃された居住区と、金を払って食べたくなる美味しい料理。

アリアが居る内は飲まないのか、上品で濃厚なウイスキーまで置いてある。

それはもちろん素晴らしいことなのだが、如何せん居づらさの精神的負担の方が上回った。これでアリアでも居れば、颯真の視線に晒されようと政臣は乗り切ることだろうし、そうでなくても彼の幼馴染である莉奈が居れば、もうちょっと耐えられたことだろう。

けれど、颯真と村正と三人で過ごす夜は、胃の痛みで正直あまり寝られなかった。

泊めて拘束しておかなければ間違いなく突貫する　マンションは、良く行くので顔パスらしい　ので、日頃の行いという一言で片付けられてしまうのだが。

「むう、遅い」

そんな中、カウンター席に腰掛けた村正がそう呟いた。

昼前には戻ってくるはずだったのに、もう正午になるうとしてい

る。そうならば、心配になってくるのも仕方がないことだ。

「バスが混んできるとか、でしょうかね？」

「いや……この時間、バスは余り混んだりはいはしないはずだ」

リサーチ済みである。

村正も、颯真に負けず劣らず親バカだった。

「おい、政臣。連絡は取れるか？」

アリアに携帯電話を持たせていなかったことを悔やみながら、颯真は政臣に声をかける。

そのいつもの威圧感とは別のベクトルの真剣な声に、政臣は素早く携帯電話を取り出した。

「頼むから、出てくれよ」

『……………ッ、政臣』

「莉奈か？今どこだ！」

『とりあえず、二人は無事。わからないけど、どこかの倉庫……………き

「やっ、かえし
ブツッ
」

途切れる声。

政臣が咄嗟にスピーカーカーホーンにしたため、その声は周囲に届いて
いた。

そう、村正と颯真の二人の耳に。

「村正！」

「あらかじめ、桜のリュックには発信器が取り付けられている。警
視庁御用達だ」

「でかした！」

職権乱用である。

些か過保護に取られるかも知れないが、彼女たちは“普通”の子
供ではない。

危機的状況に置いて無茶なことが“できてしまう”からこそ、余
計に心配なのだ。

莉奈が側にいるのなら、シフターとしての能力は使わないで居て
くれるかも知れない。

だが本当に危険な状況になったらエリアも桜も躊躇わないだろう
し、それで傷ついても彼女たちは動くだろう。

「なるほど倉庫か……薔薇曾根埠頭の三番倉庫だ」

村正が、携帯電話に表示されている地図を見て、確認をする。
それを聞いて颯真は、椅子を蹴り上げる勢いで立ち上がった。

「行くぞ」

「ああ、私の車で構わんか？」

「交通で足止め喰らうと面倒だ。念のため俺は単車を使う」

瞬く間に準備を進める二人。

厄介ごとに慣れているためか非常に手際が良く、颯真は黒いロングコートをウエイター服の上から羽織って、既に喫茶店の扉に手をかけていた。

「あの！俺も」

「足手まといだ」

政臣の言葉を、颯真は容赦なく切り捨てる。
だが政臣も、ここで引こうとはしなかった。

「アリアちゃんも桜ちゃんも心配ですが、でも！莉奈もいるんでしよう?!」

幼い頃から一緒に遊んでいた、親友。

幼馴染の女性の顔を思い浮かべて、政臣は颯真の目を真っ向から睨み返す。

続くかと思つたその状況に、すかさず村正が助け船を出した。

「御條君を助けるのに手を貸してくれるというのなら、断る気は無い」

「ちっ、時間がねえ。好きにしろ」

「っありがとうございます！」

二人の肯定に、政臣は目を輝かせて頭を下げる。

もちろん、村正の言ったことは本当だ。自分が桜を、颯真がアリアを、政臣が莉奈を引っ張ってくれるのはありがたい。

けれど、どうしても二人だけの時よりも機動力が落ちる。それでも政臣を連れて行こうと決意したのは、颯真への配慮があった。

「他に人が多くいれば、迂闊に“使わない”だろう」

無線で署に状況を伝えたと、村正はそう呟いた。

使えば使うほど命を削る、颯真の能力。

アリアが成人するまで生きられるかも解らないのに、これ以上更に削らせる気は毛頭なかった。

「これ以上、あの娘と過ごせる時間を削ってやるなよ 颯真」

漆黒の大型バイクに跨る、颯真の姿。

決して躊躇わず生き抜いてきた男の背中に、村正は大きく息を吐く。

正午の菊ノ瀬市を、黒い乗用車と黒いバイクが、走り抜けた。

人の入らない倉庫の中、区切られた一室で、甲高い音が響く。前で手を縛られ尻餅をつく莉奈の前、携帯電話に突き立てられた大きなナイフ。ショートして動かなくなったそれを前に、莉奈は己の肩が震えるのを感じた。

「次に余計なことをしたら、解っているな？」

莉奈の後ろには、莉奈同様ガムテープで手を縛られたアリアと桜が居る。

その二人を、ナイフを突き立てたザンバラ頭の男が、睨み付けた。後ろの二人を引き合いに出されては、頷くことしかできない。

「おいおい、あんまりイジめてやるなよ手津野ー」

ナイフを持った男　手津野隆行てしのたかゆきの後ろから、陽気な声が聞こえる。

おかしな口調で変に高い声は、爬虫類のような気色悪さを醸し出していた。

「丹波……まあ、いい」

爬虫類のような男、スキンヘッドに刺青とサングラスという如何にもチンピラ然としたこの男の名は、たんぱこうのすけ丹波幸之助。男達の、リーダーである。

「禎助、外の見張りはどうなってんだ？」

「渋川が行ったぞ。そろそろ戻ってくる頃だ」

大柄な体躯にエラの張った顔と、茶色の逆立った髪。

くるまていすけ久留間禎助という名の男と

「そ、外は誰もいなかったよ、丹波さん」

ニット帽にたれ目の小柄な男、しづかわみつる渋川充を含めた四人が、莉奈達を浚った犯人。

巷を賑わせている、“連続銀行強盗団”である。

「アリア、あのおおとこと、もうひとりの」

「うん、さんぐらすのひとだよね？なんか……“ちがう”」

莉奈の後ろ。

幸之助達の死角で、アリアと桜は状況を見ていた。

莉奈がいることももちろんだが、ナイフの男、隆行とニット帽の男、充もまた莉奈と変わらず“普通の人間”だ。ここで迂闊に、能力は使えない。

「ね、ねえ丹波さん、あ、あの女、見たことあるよ」

「あーん？」

幸之助は充に言われ、胡乱げに莉奈を見る。

サングラス越しで見えているのかと疑いたくなるが、そこは問題ないのだろう。

目を逸らそうとする莉奈を、幸之助はじつくりと眺めていた。

「確か、なんかの雑誌で」

「お、思い出した！御條財閥の令嬢だよ！」

「はあっ！？」

充の言葉に、幸之助は胸を反らし大口を開けて、驚いた。

世界にその名を轟かせる、大手楽器メイカー“御條グループ”は、音楽に興味のない人間でも耳にしたことがある大企業だ。次期社長は長男という話したが、長女である莉奈も父の名に恥じぬヴァイオリン職人として、世界各国の音楽家から期待を寄せられている。

当然、彼女自身の顔も、メディアの場に登場したことが幾度となくあつた。

そんな説明を、充は首を傾げる隆行にしていた。

その分野に興味があるのか、はたまた何かしらの関わりでもあるのか。

熱の籠もった解説に、アリアと桜は感心していた。

「どどど、どうしよう丹波さん！あんな化け物企業相手にしたら、消されちゃうよ！」

「ばばば、ばかやろう。俺の能力は知ってるだろ？捕まりっこねえよー！」

いっばしの犯罪者相手に油断はできないが、どうにも気は余り大きくないようだ。

どもりながらも、幸之助は胸を張ってみせている。見栄っ張りでもあるのだろう。

「この俺の 【眼部接続・因子転換・承認】」

幸之助の呟いた言葉。

その意味を知るアリアと桜は、瞳を鋭くする。

幸之助はそんな二人に気がつくことなく、ゆっくりとサングラスを外した。

「つなに、あれ」

「【カメレオンシフト】」

紫と紺色の、とぐろを巻いたような大きな目。

人間のものとは思えないその瞳が瞬くと、幸之助の右半身が、宙に溶けるように消えた。

そのねっとりとした雰囲気に、莉奈は驚きと嫌悪感から目を瞪る。

「環境適応。おまえら四人程度なら車ごと隠せるんだ。安心しろ」

「そ、そうだよな、丹波さん」

それが効かずに見つかった事など忘れて、四人は安堵の息を吐く。連続銀行強盗団として成功し続けてきた背景には、侵入する段階から逃げる段階まで、全て透明でいられるという能力の恩恵があったのだ。

「さて、充は引き続き外の監視。禎助は俺と収穫物の確認。手津野

はそいつらの監視だ」

そう言い放つと、幸之助はサングラスをかけ直す。
そして一度だけ、隆行に振り返った。

「逃げようとしたら好きにしま」
「わかった」

手提げからナイフを何本も取り出しながら、隆行は不気味に笑う。
その銀光と仕草に、莉奈はびくりと肩を振るわせながらも、アリ
アと桜を背に隠そうとしていた。

そうして後には、ガムテープで縛られた三人と隆行だけが、残さ
れるのであった。

赤灯を点けた黒い覆面パトカーが、車の間を疾走する。
縫うように動いているのにも拘わらず、事故などは決して起こさないドライビングテクニク。

身体にかかる重い圧力と、視界を流れていく車に建物に人間。その風景に、助手席に乗る政臣は顔を青くしていた。シートベルトがなければ、嘔吐していた可能性もあるだろう。

道路を抜けて、脇道を走り、驚いて飛び上がった猫が電柱にしがみつく。

植木鉢一つにもぶつからないのはいいのだが、村正のそんなテクニクを知らずに乗り込んでいる政臣としては、恐怖以外の何ものでもなかった。

「ひいいつ、ぶ、ぶつかるっ!？」

「大丈夫だ」

なにが大丈夫なのかと、政臣は目を瞪る。

T字路に向かって一直線、だというのにブレーキの反動で滑りながらもほぼ直角にカーブする。だが、それだけでは安心できない。

「ちよ、この先道無いですよっ!？」

ガードレールの向こうには、青々とした海が広がっていた。日差しを反射してきらりと輝く海面に、このままでは飛び込んで

しまつことだろう。

そうすれば、二人仲良く海の藻屑だ。

「在ると信じれば、どこにだって道はある」

「無いですよ！」

そうして村正は、躊躇うことなくガードレールを突き破った。声を上げる暇もなく、政臣は怯えたようにシートベルトを握りしめる。

浮遊感に包まれる中、脳裏に浮かぶのは走馬燈。

初恋の少女は幼馴染でした。ただし幼女に限る。そんなどうしようもない走馬燈が、幼馴染にばれたらどうなるか、政臣はしなくともいい心配をしていた。

ダンッ

「へ？」

海面にぶつかるかと思いきや、車は大きな衝撃と共に着地した。迂回しなければ来られないはずの薔薇曾根埠頭に、実に大胆な侵入を果たしてみせたのだ。

「し、死ぬかと思った」

「この程度、生きていれば十や二十は体験するものだ」

「しませんよ！」

むしろ、一度切りで十分だ。

そんな政臣の願いは、叶わない。

なぜならば、第三倉庫が見えているのに村正がブレーキを踏もうとしないからだ。

「あ、あの、ブレーキは？」

「いらん。突っ込むぞ！」

「ええええつつ！？」

アクセルは、全開で。

大きな倉庫のシャッターめがけて覆面パトカーが突撃する。

「さて、ハンドルは任せた」

「え、ちよつと、え?!」

政臣にハンドルを握らせると、村正はドアを開け放ち外に出る。

そして器用に身を翻して、車の屋根に乗った。

この位置ならば、政臣は自分を見ることができない。

「【右腕部接続・因子転換・承認】」

右手を鋭い鎌のついた、虫のものに変換する。

そうして構えるのは、腰だめの型 居合い術だ。

「【マンティスシフト】」

煌めく銀光が、シャッターを横一文字に斬り裂く。

更に返す刃で二度三度と切り刻み、車が近づいてから突入するまでの僅かな時間で、入り口を作ってみせた。

「もういいぞ」

「もういいって……っわ」

そういつて車内に戻り、ブレーキを軽く踏みながらドリフトする。

だが勢いが強すぎたのか、そのまま五、六回ほどスリップして、倉庫に積まれた段ボールに衝突する形で漸く勢いを止めた。

「流石に颯真はまだか」

「い、生きてる？生きてる？俺生きてる？」

村正は何事もなかったように車から降り、政臣は腰を引かせながら恐る恐ると車から出た。いくらヘタレとはいえ、この場合ならば、正常なのは言うまでもなく政臣だ。普通はこんなに、毅然としていられない。

「なんだデメエら！」

「ここで何をしているッ」

幸之助と禎助が出て来て、村正と政臣を威圧する。その騒ぎを聞きつけて、隆行までやってきた。だが、そんな隆行を、幸之助が怒鳴りつける。

「手津野！おまえは人質から目エ離すんじゃねえ！」

「ぐ、ぬ、そ、そうか。なら俺はあいつらを」

踵を返そうと、隆行が幸之助に返事をする。

だが、ここにはもう一人、それもとっておきの“危ないの”が来るのだ。

人質の元になんて行かせようとしない、一人の“父親”が。

バリント

「な、なんだ！？」

倉庫の窓を突き破って、黒い大型バイクが飛び込んでくる。

そのバイクは人質の元へ行こうとした隆行の前で綺麗に止まり、事も無げに降りたってみせた。

「なな、なんだ、おまえ！」

黒いフルフェイスのヘルメット。

断続するエンジン音の中で醸し出される、圧倒的な存在感。身を刺すようなプレッシャーに、隆行は無意識のうちに後退していた。

「貴様らに名乗る名前なんぞ、ねえよ」

ヘルメットを取り、そのまま足下に投げ捨てる。

ウェイター服に黒いロングコートという姿は、さながら死神のようだった。

「素直に跪くなら、五発で許してやる」

その手に持つのは、巨大なりボルバー拳銃。

彼の友人がS & amp ; WM500をカスタムした、世界最強の名を冠する化け物銃。

ちなみに五発装填なので、許す気など欠片も見あたらない。

「ハジキ程度にびびるな！手津野、おまえ得意のナイフはどうした！？」

「お、俺は血が苦手なんだ！」

「ハア？！」

倉庫の中央に追い詰められた三人が、互いに声を荒げる。

そんな情けない様子を見ても、颯真は怒りを収める気は無かった。

だが、その状況も一発の銃声で、変化する。

ダンッ！

「ひはア！そこまでだ！」

「っ……………」

縛られた莉奈とアリアと桜。

その三人に銃を突きつけて、充は奥からやってきた。状況を見て一目散に人質の元に向かったのだろう。

拳銃を手に持って気が大きくなった彼は、まるで別人のようだった。

「源さん、香川さん……………それに、政臣？」

「……………おとーさん」

「じゅめん、なさい」

目に見えて落ち込む、アリアと桜、そして莉奈。

その様子に、颯真達は歯を噛みしめる。

乾いた空間の中で軋む、空気。

その空気を打ち破ったのは、幸之助だった。

「くははははっ、良くやったぞ充！【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

「よし、これなら勝てる！【全因子接続・因子転換・承認・変身】」

幸之助と、それに続いて禎助の身体が変化する。

緑の鱗、大きな目、長い舌、吸盤のついた手足の指。

茶色い体毛、二メートルを超える身長、丸太のような腕。

「【カメレオンアウト】」
「【コングアウト】」

二体の巨大なシフターと、ナイフを構えてヤケクソになっている
犯罪者。

たった一人の行動で、一気に場が逆転した。

『さあて、いたぶってやるぜ』

『この強腕、この剛毛！逃れる術はないぞ！』

力を手にした小心者ほど、気が大きくなる。

それを体現するかのような言動に、村正は頭痛を覚えていた。

こういうタイプが一番御しやすいのだが、調子に乗られると一番
厄介なのだ。

「なんとか、しないと」

その光景を目の当たりにして莉奈は、ただ一人唇を噛みしめた。
子供達を守らなければならぬ。政臣ですら、危険を冒して助け
に来てくれた。

それなのに、自分はなにも、できていない。

「アリアちゃん、桜ちゃん」

「りなさん？」

「……二人は私が 守るから」

銃を突きつけて完全に勝った気になっている、充。

莉奈はそんな充に振り向きながら、肩でタックルをした。

「いでっ……お、おまえ！」

ダンッ！

体勢を崩しながらも、充は銃の引き金を引く。
適当に狙った上にもともと腕なんか無かったため、その一撃は莉奈の左手を掠めるに終わった。

だが深くは入らなかったが、それでも血は滲む。
赤く線が入った莉奈の腕を見て、微かに香る血の臭いを感じて、
アリアと桜が飛び出した。

『チイツ！』

「させるかよ！」

空間に溶け込もうとした幸之助に、政臣が飛びつく。
何をしようとしたかは解らないが、碌なことではないだろう。
危険なことかも知れないのに、それでも政臣は飛び出さずには居られなかった。

『丹波！くっ、こうなったら俺が』

「誰が、行って良いと許可した」

動き出そうとした禎助を、立ちふさがった村正が止める。
その手に握むのは、彼が最も愛用する武器 銘刀・雅宗だ。

「そこで寝ている」

『俺の力を嘗めるな アッ！？』

キンッ

すれ違い様に、一閃。

抜き放たれた刃が空中で返り、峰打ちによって禎助が倒れる。

鎧袖一触。いくら強い力を持っていても、彼程度で逃れられる刃ではない。

一方、地に倒れる莉奈を一瞥して、アリアと桜が走る。見られてしまっただとか、そんな気持ちは追いつかない。ただ二人は、体勢を崩して息を荒げる充だけを、捉えていた。

「【わんぶせつぞく・いんしてんかん・しょうにん】」
「【ぜんいんしせつぞく・いんしてんかん・しょうにん】」

桜の腕が、黒い羽に覆われる。

やがてその両腕はガムテープを引きちぎり、翼となって広がった。アリアは、見た目こそは変化しないが、淡い輝きに包まれている。その効果か、アリアの手を縛るガムテープは消滅していた。

「【くろうしふと】！」
「【いまじんあうと】！」

桜の風が銃を吹き飛ばし、アリアの手に生まれた輝きが充本人を吹き飛ばす。

枯れ葉のように宙を舞う充はその一撃で気を失い、地面に落下した頃には悲鳴を上げることなく目を回していた。

「ひいひい」

莉奈の血を見た時点で、隆行は使い物にならなくなっていた。それを見て、幸之助は舌打ちをする。

だがここで逃げなければ、晴れて刑務所行きだ。無駄に高い虚栄心を持つ幸之助にとって、それはいやだった。

『チイツ！ここで捕まっただまるか！』
「そうか」

消えようとした幸之助の長い舌を、大きな手が掴み取る。
それは、颯真が素早く出した彼の左手だった。
無駄に出しているから掴まれるのだが、無意識なのでどうしようもないのだ。

『ほ、ほまえ、や、やえろ！』

舌を掴まれて上手く喋ることのできない幸之助に、颯真は銃を突きつける。

その目は真剣そのものであり、こんな状況でなくとも怖い。
こんな状況で掴まれている幸之助の内心は、推して知るべしものであった。

「風穴は……アリアが嫌がるか」
『ほっ……っへ、ひいっ』

颯真が銃をしまって安心したのも束の間。
颯真は舌を掴んだまま幸之助を引き寄せると、右手で幸之助の太い後ろ首を掴んで、そしてそのまま片手で持ち上げた。

「コンクリートと誓いの口づけだ。一生幸せにしてやれ」
『ひゃ、ひゃめ　へぐうっ!?!』

颯真はそのまま、地面に幸之助を叩きつける。
人外じみたその一撃により、人外の風貌の幸之助はコンクリートにめり込んだ。

そしてそのまま、だらりと手を下げて動かなくなる。まあ、丈夫

なのでせいぜい骨折が関の山だろう。

村正が禎助と充、それから隆行を拘束する。

自分一人の力では、めり込んだまま復帰できないであろう幸之助は、後回しだ。

手を押さえる莉奈は政臣が抱き起こしていて、その側にはアリアと桜の姿があった。

「ごめんなさい、りなさん。わたしたちも……わたしたちも、ひととは、ちがう」

顔を落として、桜が独白する。

知られたくなかった。

幸之助の目を見て嫌悪感をあらわにしていた莉奈に、自分の姿を見て嫌われたくなかった。それでも、動かすにはいられなかった。

誰もなにもいう事が出来ず、アリアもただ俯くばかり。

少女達がどう変身しようと気にならない政臣がフォローをしようとするが、それよりも速く莉奈が動いた。

「へ？」

「あ」

政臣の手から離れて、アリアと桜を抱き締める。

彼女たちのことを知らなければ、あるいは彼女たちが恐れる未来もあつたかも知れない。

けれども莉奈は、アリアと桜のことを、本当に“良く”知っているのだ。

父親のために一生懸命で、友達の手を取って温かく笑う、その姿を。

「助けてくれて、ありがとうね」

目を瞞る二人に、莉奈は肩越しにそう告げる。

抱き締めた両手から伝わる、少女達の怯え。

こんなにも子供らしく在る彼女たちが、幸之助達と同じなはずがない。

けれどもシフターの事情をよく知らない莉奈は、アリアと桜を安心させるために、ただ自分の気持ちを吐露した。

「私はアリアちゃんと桜ちゃんが　　大好きだよ」

「り、なさん」

「……りなさん、りなさんっ」

二人は莉奈に抱きつき返すと、涙を流す。

颯真達が見守る中で、大きく声を上げて泣いていた。

「アリアちゃんっ……桜、ちゃんっ！」

やがて莉奈も抑えきれなくなり、政臣もつられて四人で泣く。

一度溢れ出した涙は止まらず、頬を伝ってアリアと桜に流れ落ちた。

ただただ思いを伝えたいと、腕に力を込めて抱き締める。

その様子を、颯真と村正はただ、優しげに見つめていた。

十

太陽が西に落ち始め、空が橙色に輝く。

夕暮れ時になった頃、後始末を終えたアリア達は、疲労感を滲ませながら喫茶店に辿り着いた。

「もう、しばらく車は勘弁です」

席に着いた政臣の第一声は、村正の運転への愚痴だった。

肝を冷やす場面が何度もあったのだ。不平の一つも言いたくなるのは、仕方がない。

もちろん、それで間に合ったのだから、本気で不満を言うつもりはないようだが。

「りなさん、ひだりてはだいじょうぶ？」
「ぴあのがひけなくなったり、しませんよね？」

左肩に包帯を巻き首から吊った莉奈に、アリアと桜が声をかける。
あんなに楽しそうにピアノを弾いていたのに、それが出来なくなつたらと思うとアリアと桜は悲しくなっていた。

その声は心の底から莉奈を心配していて、それ故に莉奈は気恥ずかしさと両立した嬉しさを覚える。

「大丈夫だよ、見た目相応、それほど深い傷ではないからね」

「ほんとうに？」

「うん。ホントだよ」

莉奈に目を合わせて言われ、アリアは大きく息を吐いた。

それは桜も同様で、安堵の息と共に肩を下げる。

二人とも、よほど心配していたのだろう。

「さ、私は良いから、今日本当にやりたかったこと、やっておいで」

「あ……うんっ！」

「ありがとう、りなさん」

アリアと桜は、互いに顔を見合わせると、頬に朱を差しながら微笑み合う。

あの騒動の中でも傷つくことの無かった、可愛らしいラッピング。
その包みを持って、アリアは小走りで颯真に近寄った。

「おとーさん！」

「……どうした」

煙草に火を点けようとして、それから直ぐに握り潰す。

疲れているであろうアリアにわざわざ注意させるのは、忍びなかった。

それでも時折注意させてしまうのは、颯真の悪い癖である。

「えーとね、うんとね」

言いづらそうにしているアリアを、颯真はただじっと待つ。

アリアはそんな颯真の視線に気恥ずかしさを感じて頬を上気させながら、上目遣いで颯真を見ていた。

「これ、ばれんたいんぷれぜんとっ!」

「バレンタイン?……ああ、バレンタインか、今日は」

アリアの言葉で漸く今日が何の日であるか気がつき、それから包みを開けた。

ラッピングの包みを止めるリボンを丁寧に解き、中に入った小さな箱を取り出す。

手のひらサイズの小さな箱は、きつと少し力を入れただけで簡単に壊れてしまうことだろう。だから颯真は、なるべく力を加えないように、ゆっくりと丁寧に開けていった。

「コウモリか……これは、アリアが作ったのか?」

「うんっ!」

満面の、笑みだ。

初めてのチョコレート作り、その成果。

綺麗に冷やされたチョコレートは、気泡が浮いたりもしておらず、実に良い出来だった。

「どじっ?」

颯真はそれを味わうために、まず半分に分けて口に放り込む。基本的に好き嫌いのない颯真は、割となんでも食べることができ

る。生きてきてそれなりに美味しい料理も食べたことがあるし、作ったことだってある。

だがこのチョコレートは、今まで食べてきたどんな料理よりも、美味しいような気がしていた。

「ああ……最高に美味しいぞ、アリア」

颯真は、社交辞令やお世辞の類が、本当に苦手だ。

誰にでも本音で切り込んでいくからこそ、老若男女問わずに怖がられるのだ。

大人としてはもうどうしようもないくらい、駄目なタチである。

だからこそアリアは、それが颯真の本心だという事に気がついて、嬉しそうに微笑んだ。

ふと横を見れば、桜もまた嬉しそうな表情で、村正と向き合っているようであった。

「はあ、いいなあ」

そんな彼女たちの様子を、離れた席で政臣が見ていた。

アリアと桜にチョコレートを渡され、見たことの無いような柔らかい表情を浮かべている二人。とくに颯真からは、普段の刺々しさが見あたらない。

バレンタインのことなんかすっかり忘れて救助に向かっていた政

臣は、普段ならちゃっかり分けて貰おうとするのに、今回はタイミングを逃してしまった。

流石に今割り込むような、空気の読めない真似はできないし、落ち着いたら颯真と村正の手によって、大人げなくも全力で阻止されることだろう。

「うう、チョコレートさん」

だから政臣は、情けなくも項垂れることしかできなかった。

「まったく……そんなに言っただったら　　これで、我慢しなさい」

「へ？」

項垂れる政臣の前に置かれた、包み。

可愛らしいラッピングで包まれたそれは、まごう事なき　　チョコ

レート、だ。

「今日の政臣、さ。いつもよりちよつとだけ……格好良かったよ」

上気させた頬を隠すように、莉奈は顔を背けた。

けれど横顔から覗く耳が、夕焼けよりもずっと朱くて、政臣は小声で礼を言いながら受け取ることしかできなかった。彼の頬もまた、夕焼けのように朱くなっているからか、気の利いた言葉の一つもいえない。

「サンキュ、莉奈」

「ん、どーいたしまして」

包装を開けて、星形のチョコレートを口に放り込む。

チョコレートの味なんか、よく知っているはずなのに……政臣は、莉奈のチョコレートが、普通に食べられるそれよりもずっと甘いよ
うな、そんな感覚を覚えていた。

アリア達にとつての初めてのバレンタイン。

艱難辛苦はあったけれども、こうして最後には笑い合うことができた。

「おとーさんっ」

「おとうさん」

アリアと桜の声に、颯真と村正は揃って首を傾げる。

そんな二人の表情に、アリアと桜は、楽しそうに微笑んだ。

そして揃って、大きく思いを伝える。

『だいすきだよっ!』

新しい関係、新しい感情。

夕暮れの喫茶店を包む陽光は、どこか彼女たちを祝福するようであつた。

余談だが、その翌日の小学校では、アリアの義理チョコ 颯真に、“義理”チョコの存在を教わった を貰って小躍りして喜び
奈々子に怒られる律人の姿が、見られたという。

バレンタインに投稿することを予定して書き始めたのですが……ふと気がついたら、ホワイトデーになっていました。丁度一ヶ月もの遅れ、申し訳ありません！

読まれた方々が元気になっていただければと、容量も少し増やしてみました。

お楽しみいただければ幸いです。

それでは、長くなってしまいましたが、ここまでお読み下さりありがとうございました。

作品に対するご意見やご感想のほど、お待ちしております。

また、他の作品や違う場所でお会いすることができましたら、どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032m/>

SHIFT

2011年6月5日17時15分発行